

正
大
庚
申
茶
道
記
下

202
299

202-299
1200901404143



202-299

筈庵高橋義雄著

大正庚申茶道記下



東京筈庵文社藏版



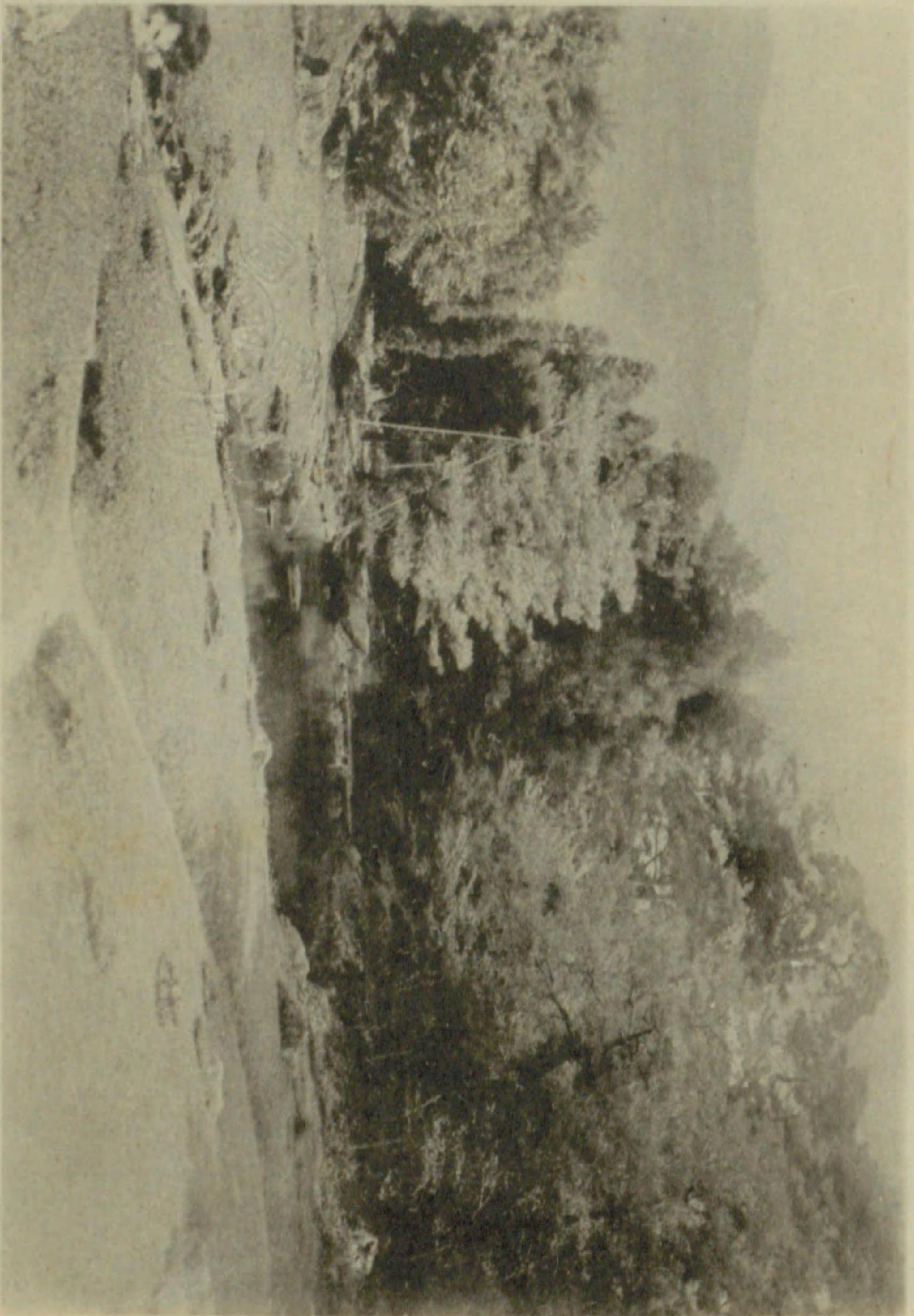
漢代石渠一又林藏版

長川藏書一依藏書人



知居所地地地地地地

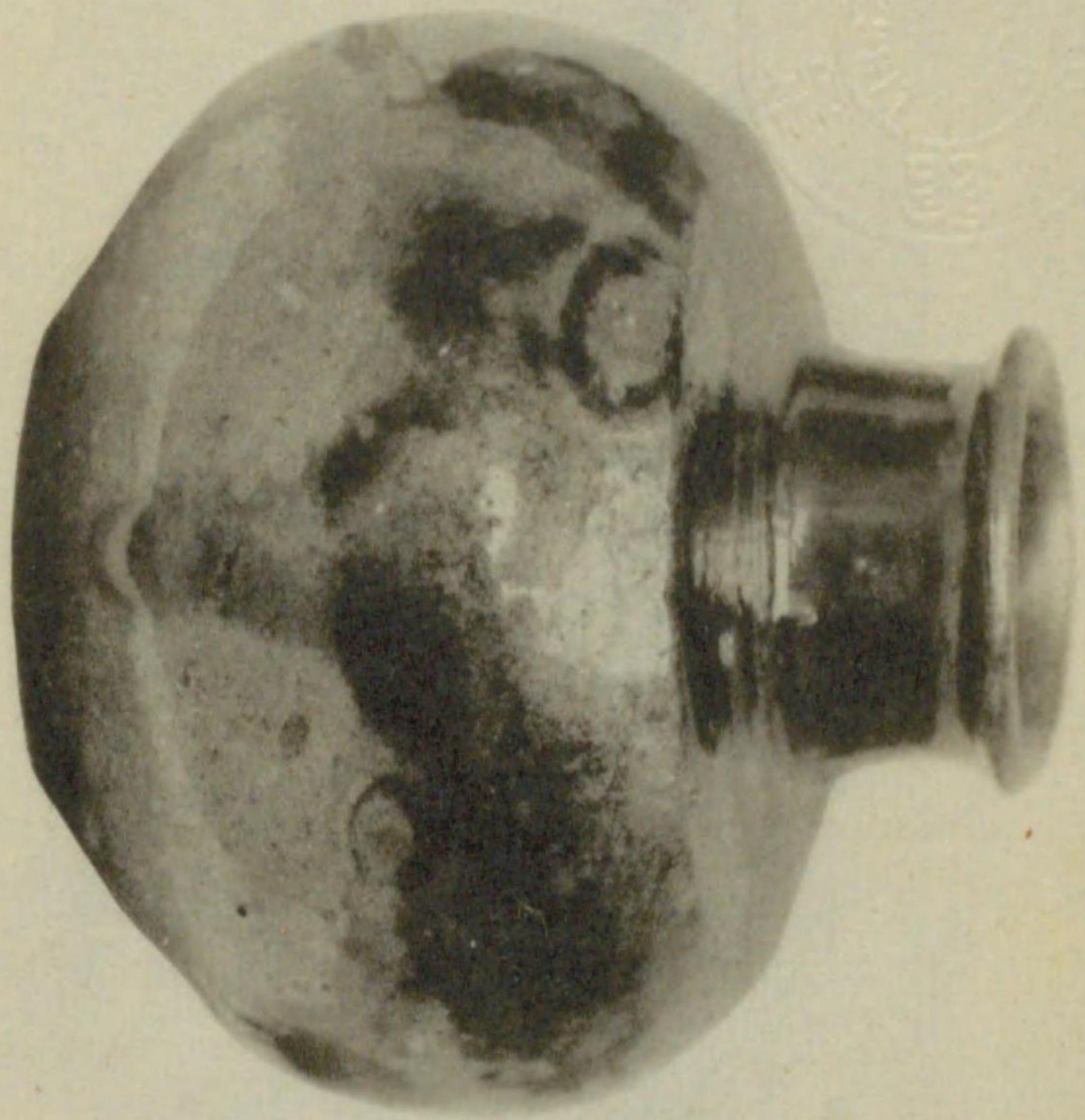
三三三



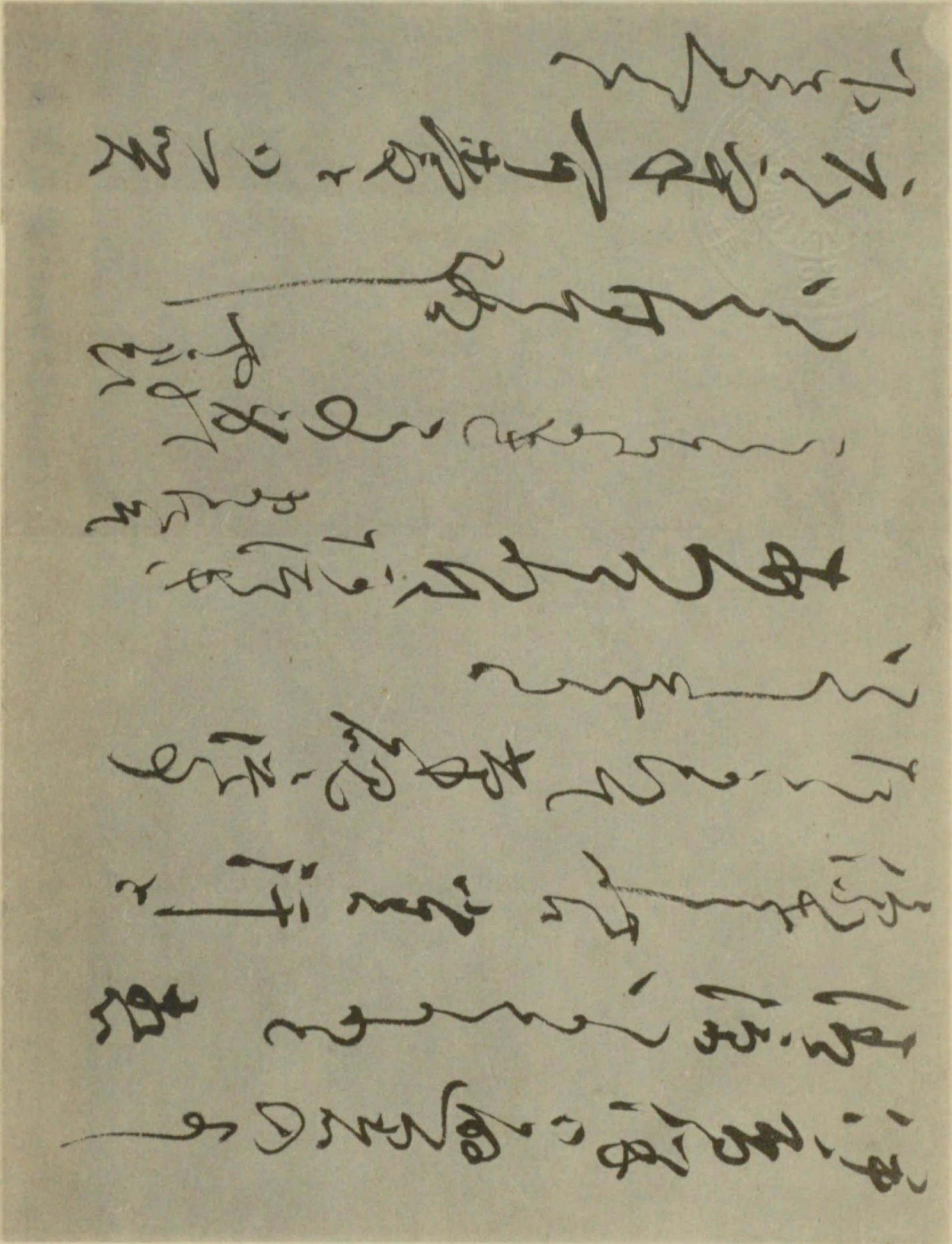
山縣公無隣庵（洛北無隣庵參照）



下條翁肖像（大講伯桂谷翁參照）



天下第一丸壺茶入（數内家重寶參照）



大口氏書簡（大口寄人參照）

正大庚申茶道記下卷目次

- 長尾山莊
- 耄茶會
- 大用國師
- 鈴山翁記念會
- 親庵開席
- 香山畫談
- 箱根唯識庵
- 藪内家重寶
- 大口寄人

大口寄人詠草 九七

小田原狙庵 一〇〇

新席樂庵 一一〇

洛東無隣庵 一二六

庚申光悅會 一三一

永坂茶會 一四七

大畫伯桂谷翁 一五五

小柴庵口切 一七八

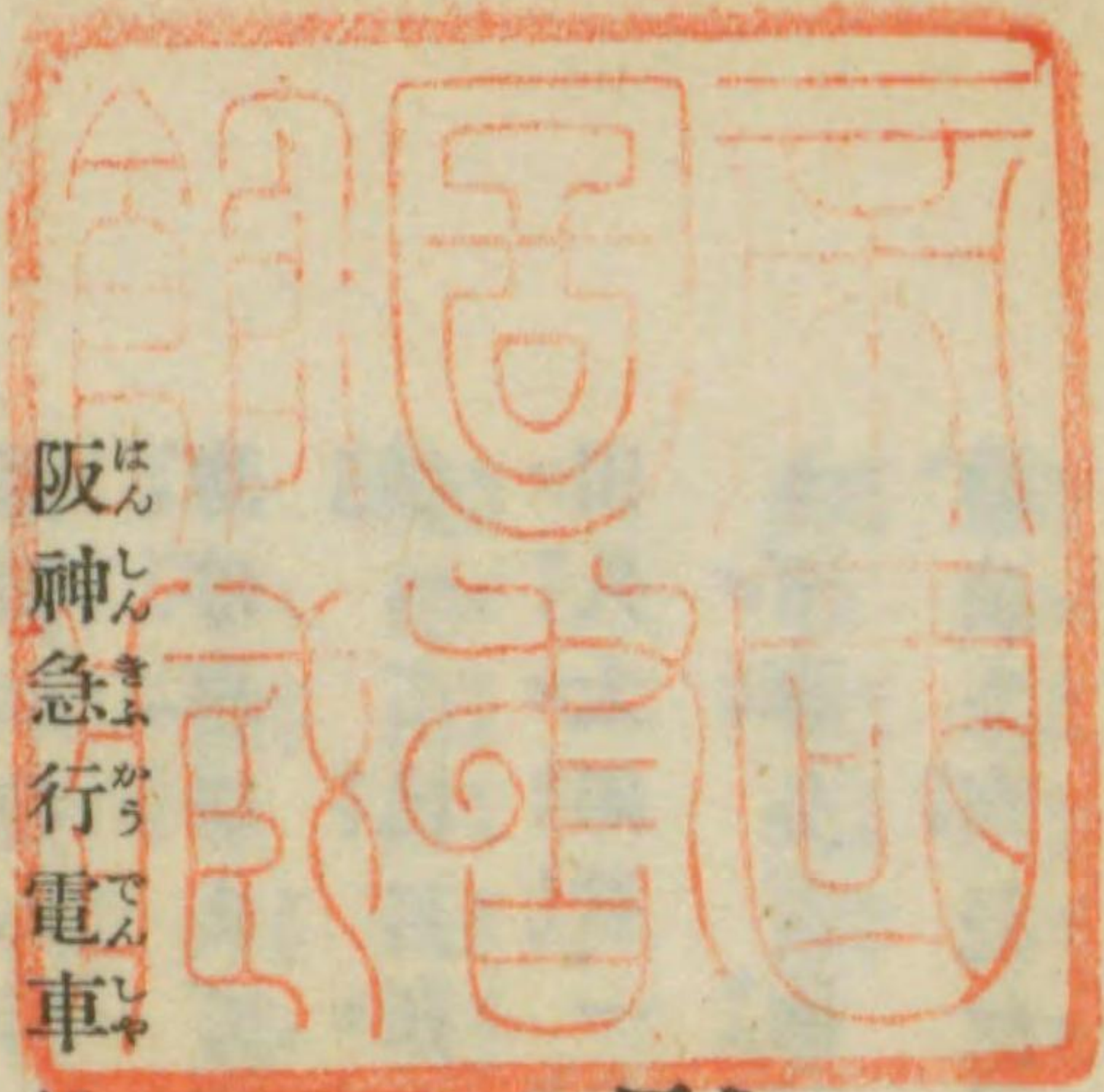
目次終

大庚申茶道記 下卷

箒庵 高橋義雄著

長尾山莊

(大正九年六月三日)



一
 阪神急行電車にて大阪より約二十五分程、寶塚の手前に平井停車場と云ふあり、此停車場より下車して爪先上りに村落の間を過ぎ、七八丁進み行けば、一道の溪水山中より流れ來りて兩崖漸く相迫る其崖下道を更に三四丁登り去れば、溪流に架けたる木の橋の正面に頑丈なる石造の山門あり、之を長尾山莊の入口とす、山莊は藤田平太郎男の季弟彦三郎君の別業にして、君が之を買収せられたるは大正三四年頃なりと云ふ、

長尾山莊

兩三年來君に逢ふ毎に、阪地に來りて若し餘暇あらば何時にても一度長尾山莊を訪はずやと申聞けられたれども、下阪の節は毎度多忙を極めて其佳招に應ずる能はざるを遺憾とせしが、去る五月中名器拜見を許されたる諸名家に廻禮の爲め、六月一日態々下阪する都合と爲りければ、此機會を以て長尾山莊一覽の宿約を果すべく彦三郎君に申入れしに、左らば拙者自身に案内すべし、同三日午前十時大阪の阪神急行電車停車場まで出向はるべしとの事に就き、同時同所に赴きしに、君は執事林榮吉君を從へて已に在り、當日の相客として磯野良吉君、阪神電車の小林一三君、大阪三越の小田久太郎君、一行六名小林君の幹旋にて今日初運轉の新電車に乗込み、頓て平井驛より下車して前記長尾山莊の山門に入れば、道は是れより二手に分れて一手は溪流に沿ひて右し、一手は爪先上りに左するを先づ其右手の方に赴けば、兩側の絶壁は頭上に落ち掛らんばかりに接近して、其岩石の間には矮松雜樹叢生し、又山躑躅の紫色斑爛と咲き残りたる光景得も言はれず、溪流は愈々急にして、佩環の響、松聲と相和し、大阪より三十分程にして早く已に塵寰を出て、仙境に入るの想ひあらしむるは眞に

意想外なるが故に、右顧左眄、頻に感歎の聲を發しつゝ、到頭絶壁盡る處に到れば、正面に衝立の如く屹立したる一枚岩あり、其側面を行き過ぐれば、右手の懸崖より高さ三丈許りなる一條の瀑布稍斜に瀧壺に落ちて、今まで沿ひ來りたる溪流の源を爲す、攝津名所圖繪には此瀧を最明寺瀧と稱し居る由なるが、是れは最明寺時頼が諸國行脚の節、此瀧を賞觀せしに因りてなりと云ふ。

二

長尾山莊最明寺の瀧壺は、莊主の手に入りてより一層改修されたる者と覺しく、瀑下の小池を澤飛びにて渡り行けば、正面の岩窟に丈二尺許りなる不動尊石像あり、是れは古來高名にして利益顯著なりとて、遠方より來賽する者多きにぞ、此部分は莊主も之を公開して公衆の自由に來去するに任すとなり、當日は此池邊に木造腰掛粗朶椅子を並べて、鹽煎餅に番茶など振舞はれければ、余等は廬山瀑下の李白もどきに、九天より落つる銀河に對して、酒ならなくに同じ山吹色の番茶を啜りながら、暫時御輿を卸しけるが、左るにても人里近き此山莊に、雪舟の山水畫に見るが如き絶壁大瀑の光

景を展開するは眞に不思議の勝境なりとて、一同激賞の餘り俯仰低徊殆んど去るに忍びざりしも、時已に正午を過ぎければ、元來し道を引返して彼の山門の處より今度は左手に登り行きしに、是れも左側に溪流ありて、天然の一枚岩に山水の布を晒すが如くサラ／＼と流れ去る風情又なく佳し、斯くて爪先上りに一丁許り登りたる處に掛茶屋あり、此處には提籃に煎茶道具を仕込みて、玉露の一滴に一行の渴を癒せんとする用意至れり盡せり、是れより又一丁許り登り行けば、右手に登ゆる山腹に、丹塗の色褪せて數百年を経たらんと覺しき極めて恰好よき多寶塔の屹立するあり、又其一段高き處に腰掛茶屋の一棟あるを見れば、此山一面凡そ眼界の及ぶ限りは皆此山莊の領分なるが如し、此邊は彼の最明寺瀧より一段高く、周圍に峰巒を繞らして、其中の平地を占めたる山莊は、彼の瀧壺を俯瞰すべき懸崖に面して設けたる者にして、山莊の事なれば構造は餘り嚴めしからず、丸木門の入口に物徂徠筆斜通神仙居と云へる木額を掛け、玄關を入れれば、莊主の控室一棟あり、廊下傳ひに左折して一段下りたる處に、上段十疊九尺床、次の間同十疊に深き土廂を繞らしたる一棟あるは、此莊中の客間なるべし、當日床には探幽筆中壽老、左右鶴三幅對を掛け、禮賓三島三足花入に、大蓮華と赤百合を活けられしが、書院火竈口、雨戸、土廂簾掛など、山莊めきたる無造作の中に、自ら新意匠を出し、新古建築を取捨折衷するに、慘澹たる苦心を費したる莊主の物數寄、只管敬服の外なかりき。

三

長尾山莊には、勿論茶席あり、之に附屬する廣間あり、當日其茶席には、櫻井基佐の短冊を掛けられしが、

しげりあふよそ目もさすが薄く濃き

みどりはおなし梢ともなし

とあり、山中の事とて露地の青苔毛氈を敷たるが如く、殊に姫黄楊と云へる植物を、下草と爲したるが面白く、蹲踞石向側には、天狗の杉箸と稱する一本杉あり、是れは昔天狗が杉箸を土中に突差したるが成長して、此大木と成りたりとの傳説ある、由此茶席に續きて、長圍爐裏を切り、大土瓶を掛けたる文人風の一席あり、其壁床に掛けたる翠

巖和尚筆截斷紅塵水一溪の一行長上幅は非凡の出来にて殊に此山莊掛としては無類の一軸なりと思はれぬ斯くて客間と茶室とは平地の一段を占めたれども本来懸崖に接したる場所なれば湯殿物置等は是れより一段低き下層に在りて山莊の内部略ぼ三段に分れたるを廊下傳ひに联接せる普請なれば傾斜面に戸障子を建附くる細工極めて巧妙にして大仕掛ならざれどもチンマリとして極めて上品に且つ氣の利きたる山莊と云ふべきなり扱莊主の案内にて庭前に下り立ち懸崖に接して彼最明寺瀧を俯瞰する處に建てられたる一室を覗けば是れは二疊敷許りの小亭にて床に乾山筆半身寒山の圖を掛け其前の手附籠に野菊一枝を活けたる風情の面白さ言はん方なし乾山幅は紫翠老人の落款にて

おのづから拂はぬ箒もつ人の

心のそこに塵はなきもの

と云へる自讃あり是れは箒を持ちたる寒山の圖なれば箒庵と號する余に對する御馳走とも觀らるべく今日各席の飾附に莊主が大に其意匠を凝らしたる一端を知る

べきなり是れより一段小高き平地に無造作なる掛茶屋風の棟あるを近づき視れば元此山莊を建築したる時の休息室を其儘保存したる者の由なるが今まで莊内を徘徊する間は唯周圍の峰巒を環視するのみなりしに今此處に至れば西南の眺望豁然として展開し兜山は近く目睫の間に立ち西の宮住吉邊を見越して攝海より遙かに遠洋を見渡す光景雄大廣濶にして茲に始めて此山莊が山海の風物を一眸中に收むる勝地たるを會得せり。

四

長尾山莊は天然人工兼ね併せて興趣極めて多く日本名園中確かに第一流に列すべき者なれば巡覽に時移りて已に午後二時を過ぎけるにぞ眼界開豁なる掛茶屋風の一構に於て淡泊なる辨當の御馳走を頂戴せしが朝來曇勝なりし梅天は此頃より霏微として降出しければ午餐後此處に腰を据ゑて四方山の談論に耽りし中にも小林一三君が寶塚少女歌劇團を組織して阪神急行電車の前身たる震面電氣線路の繁昌策を講じたる其計畫圖に中りて寶塚に多數の遊客を引き寄せ歌劇開場中は日々三

千人の出入を増加する實況を物語りたる其談柄を捉へて、少女團の藝術及び脚本の批評より延いて和洋音樂將來の盛衰に及び、莊主も時々横槍を入れければ、小林君も一時頗る苦戦に陥りたる程なりしが、果ては大笑ひとりとなりて思はぬ餘興を添へたりけり、晴天ならば是れより更に彼の山腹なる多寶塔若くは腰掛茶屋まで登覽すべき筈なりしも、降雨容易に歇まざれば、當秋紅葉狩を兼ねて今一度來莊せん時の樂みに、之を殘して直ちに母屋に引返せし頃は、彼れ此れ五時近くにたりしにぞ、此處に正式の晚餐饗應を受け山水の奇觀を貪りたる上に、猶ほ又食膳の珍羞に飽きて、夜も早や初更を過ぎければ、莊主が殘る方なき心盡しを感謝しつゝ、一同雨中に平井驛まで回着せしが、當夜は舊曆四月十七日にて、晴天なれば月光の溪流に映寫する風景を御覽に入るべきものをとて、莊主は頻りに殘念がりしも、亦其心入りの深厚なる一端を知るに足らん、今夫れ大阪を距る事電車三十分程の處に、此深奥幽雅なる溪山あるべしとは何人も想像し得ざる所にして、京阪の文人墨客が三百年來之を見遁し、烟霞の癖ある頼山陽の如きも終に此勝境に一筆を着けず、長尾山莊主をして最近易々と之を買收せしめたるは、山靈自ら莊主に契合する所ありて、久しく其來住を待ち居りしに非ずや、因て余は莊主が殘る方なき優遇の芳情を謝すると同時に、山靈の殊籠を得て此山莊の主人公と爲りたる幸運を祝福せんと欲するなり。

耄茶會

(大正九年六月十三日)

上

先年東都實業界の新進者同志が盲滅法に茶事を催して、互に招ぎ招がるゝ一會を組織し、之を盲茶會と稱しけるが、盲蛇に怖ずの義に因りて、或は之を盲蛇會とも呼びしとかや、然るに今度此名稱と邦音相類する耄茶會とも、若くは耄爺會とも名づくべき一茶會の、偶然御殿山幽月亭に開かれたるは、近來斯界の一奇談と謂ふべきなり、今其事實如何と云ふに、十數年前伊皿子の三井元之助君が、梅若能舞臺に於て道成寺を演じける時、演能に使用したる竹を以て尺八花入を作り、之に日高川と云へる銘を書附けて、益田鈍翁始め三井家に縁故ある好事家に贈られたる事ありき、然るに鈍翁は此

程此花入の事を思ひ出し、是は的切三井家の長老三井華精翁より贈られたる者と誤信せしかば、今日迄此花入披きを爲さざりしを茶人にあるまじき無念なりと恐縮の餘り、遽に華精翁を御殿山幽月亭に請じて、右花入披きの茶會を催しけり、斯くて亭主鈍翁は正客華精翁に向つて、先年花入寄贈の謝禮を述べ、且つ其日高川と云へる銘柄の由來を質問せしに、華精翁は甚だ當惑の體にて拙者の老耄かは知らねども、左る竹花入を貴方に贈りたる覺え更々になし、夫れは何かの間違ひに非ずやと言はれしに、ぞ、亭主は奇異の思ひを爲し、様々に思案したる後終に前記三井元之助君が道成寺演能の記念品なりし事を發見して、是れは拙者の老耄なりとて主客大笑ひに終りければ、同席の誰彼となく此茶會を耄茶否耄爺會と言ひ囃したりしとなり、扱此花入寄贈者が三井元之助君と知れ渡りたる以上は、當然君をも此茶會に招かざる可らず、乃ち六月十三日正午幽月亭に同君の來臨を乞ひたれば、余にも其相伴たるべしと亭主より懇に申越されしに、最と興がる事に思ひて當日幽月亭の寄附に推參せしに、元之助君は差支ありて參會せられず、福井菊三郎、益田紅艶、山澄宗澄、岡崎彌太郎諸君已

に詰め掛け居りければ、遅刻を詫びて早速其壁床を窺ひしに、松平不昧公筆道得也三十棒と彫附けたる細長き禪板を掛られしが、其裏面には道不得也三十棒とあり、道得るも道得ざるも共に三十棒頂戴は甚だ苛酷なるやうなれども、是が禪家の活作略にて頗る面白き處なるべし、斯て更に席上の飾附を見廻せば、吊り棚に松民寫し輪寶模様の矢立を載せ、青銅瓶掛に鐵瓶を掛け、茶盆には大河内焼立菊茶碗に南京赤繪瓢箪形香煎入を取合せ、毛氈の上に古雅愛すべき手附籠煙草盆を置きて、之に備前火入を備へたるなど、寄附より先づ初風爐茶會の氣分を漂はして誠に清々しき風情なりけり。

中

竹花入披き茶會に其寄贈者たる三井君が缺席して其正客を失ひければ、茶臘に依りて余が正客を承り、先づ幽月亭に入りて其床を見れば、金扇面の中央に瓢形を畫きて、其中に澁紙庵の三字を認め、傍に

おそろしや思ふが中もさけぬべし

夜のふすまのなるかみの音

と書附けたる小堀遠州筆の一軸を掛けられしが、是れは水戸徳川家舊藏哀公遺愛品にて、其箱には同公筆にて戯歌とあり、遠州が得意の歌と覺しく、往々茶書に載せらるるを觀れば、當時斯界に喧傳せられし者ならん、而して哀公が之を所藏せられたるは、常に瓢箪を好みて之に縁故ある書畫什器を聚められければ、其扇面中に瓢箪模様あるを取りし者なるべし、更に道具疊を見れば、保全作遠州好み丸風爐に細川三齋好み松向寺文字入り釜を掛け、亭主挨拶の後、直に石州好み黒赤塗分膳、遠州好み黄漆碗にて自身好みの懷石を出されしが、其獻立左の如し。

汁

三州味噌、おごせ、小芋 向附 染附四方皿、鱈、甘酢

椀

夏鴨しんじよ、早松茸、淡竹、水前寺菜、柚花

焼物

志野平鉢、長良川鮎子、大根卸し、煮ぬき茄子

吸物

ちよろぎ、藤豆

八寸

鵜卵味噌漬、くちこ、松の實鹽煎串に差して

香物

鈍阿焼、茄子、蕪、胡瓜、茗荷、昆布漬

酒器

銀ちろり朱引盆

菓子

水羊羹

食物博士たる亭主の工夫例によつて面白く、豊富なる材料中にも松の實の鹽煎など、七十五日生延びる御馳走は唯感々服々と云ふの外なし、扱て懷石終りて後炭手前の器物は左の如し。

香合

遠州藏帳の内、黒塗瓜花紋

炭斗

唐物四方入外籠平

羽箒

青鸞

火箸

故三井武之助君手製

遠州藏帳香合は屈輪と一雙入りにて、黒地に共色瓜の花紋あり、遠州遺愛品としては珍らしく、窠れ過ぎたれども、薄作にて頗る精巧なるものありき、扱て中立後再び復席して床中を見れば、小堀權十郎作一重切花入に、額と深山苧環とを、チヨビリと小さき簪の如く活けられたるが眞に面白き手際なりけり、斯くて亭主の濃茶手前あり其器物は左の如し。

茶入

遠州藏帳の内桑木、地棗、袋木綿、廣東

茶碗

井戸呼繼ぎ樂、銘大澤

茶杓

神尾元知共筒、銘卯の花

水指

モール抱桶

建水

木地曲

蓋置

青竹引切

茶

碧雲

下

幽月亭初風爐濃茶器物は、前記の如く夫れ、面白き組合せなるが、中に井戸呼び繼ぎ樂茶碗は、十代目旦入が古井戸茶碗の底ばかり残りたるを赤樂にて繼ぎ足したる

者にて、南明庵無用子の箱書附に

一本と思ひし菊を大澤の

池の底にもたれか植ゑけん

とあり、その池の底にもと云へるは、蓋し井戸茶碗の底のみ残りたるを呼び繼ぎしたる景色を指したるにて、無用子と云へるは拙叟和尚の事なりとぞ、而して旦入が之を補ひたるは弘化二年季夏の由其箱書に、詳かなり、又神尾元知作茶杓の筒に

白妙の衣ほすてふ夏のきて

かき根もたはに咲ける卵の花

と書附けあり、斯くて濃茶一巡するや、同席の襖を取拂へば小間は忽ち廣間と爲り、一同打寛ぎて小書院に飾られたる江月和尙筆巻物二巻を拜見する間に、獨樂の菓子盆に山川及び撫子打物の總菓子を盛りて、矢野春子女史の薄茶手前あり、其器物は左の如し。

茶入 信樂小堀政峰銘岩間 茶碗 一入黒啖味齋銘孤月 替茶碗 高麗白四方

水指 飛彈曲 茶杓 象牙

信樂茶碗は變り物にて、一座其所見を入札せしに、余と紅艷は何れも膳所と云ふ鑑定なりしが、是は信樂瀧土と云ふ者なりとぞ、而して小堀政峰が其箱に書附けたる歌は、
岩間よりおちくる瀧の白糸は

むすはて見るも涼しかりけり

にて、時候柄誠に面白き者なりき、扱て今回の茶會は遠州筆澁紙庵の一軸を始めとし、權十郎若くは政峰神尾元知等遠州の一族門弟を網羅したる道具組なれども、本來尺八銘日高川披きが主眼なれば、寄贈者の缺席に依りて本日は之を掛けられざりしも、兎に角一覽せざる可らずとて、薄茶後亭主に乞ふて之を拜見せしに、京都竹にて彼の正玄が切りたる者と覺しく、後に朱漆にて日高川の三字及び三井氏の書判あり、花入は至つて平凡にして鬼をも蛇をも出さざれども、亭主が其寄贈者を間違へたるに依りて、此興味ある毫茶會を構成するに至りたる次第なれば、見掛はノツペリとして平凡なるも、此花入決して只の尺八にてはなかりけりと、一座相顧みて悦に入りたるは

真に興がる茶會にてありき。

大用國師

(大正九年六月二十六日)

文化の頃鎌倉の圓覺京都の相國天龍を董して其法鼓高く天下に鳴り響き、夙に禪刹の百廢を興し、又雲衲の教導を勤め、松平不昧侯、柳澤堯山侯等と道交を結びて、書畫を嗜み、茶事を好み、僧俗各方面に對して化育の功最も盛なりし誠拙禪師は、真に近世稀有の高僧たりしが故に、禪師の法孫並に之を渴仰する居士等は、其百年遠忌に先だち特に國師號の宣下あらん事を衷心祈願して止まざりしに、聖明幸に照鑑を垂れ給ひ、去年十月二十八日大用國師の謚號を賜はりたるは誠に有難き事共なりかし、抑も國師は文政三年六月二十八日世壽七十五歳を以て示寂せられ、今年恰も其百年回忌に相當せり、左れば鎌倉圓覺寺に於ては六月下旬其報恩接心會を催す事と爲りたる由にて、同月十一日同寺管長古川慧訓師駕を我が伽藍洞に枉げられ、國師號宣下及び其報恩會に關する經過を報告せられければ、余は此機會を以て、國師の遺墨品展觀會を圓覺寺に催し、余等渴仰者をして彌々國師の流風遺韻を偲ばしむる趣向あらん事を希望せしに、夫れかあらぬか數日後管長より二十六、二十七兩日圓覺寺境内に於て國師の遺墨展覽會を催すべきに就き、隨意參觀ありて然るべしとの案内狀に接せり、是に於て余は我が願望の首尾克く成就したるを悦び、二十六日午前十時東京發鎌倉に赴き、直に圓覺寺の山門に着到、本堂に向つて左手の坂路を登り行けば、北條時宗の廟所たる佛日庵と云へる禪坊が其遺墨展覽會場なりけり、乃ち其門内に入りて突當りの廟所を見れば、鎌倉時代創立其儘の建物と覺しき、三間四面許りなる古色愛すべき小堂の正面高く昭憲皇太后の時宗を詠ぜられたる御歌、

あた波は再び寄せすなりにけり

鎌倉山の松の嵐に

と云へる一首を書きたる匾額を掲げられければ、堂前に進みて相模太郎の遺靈に敬意を表し、此小堂に接續する佛日庵の玄關より罷り通れば、第一室には國師の讚ある

狩野探淵齋筆十六羅漢幅を掛け連ね其他全庵各室悉く國師の遺墨を陳列せられしにぞ順次之を巡覽するに、書畫百點許の中書七分畫三分にて、此外に遺品約十點あり、而して其筆跡の輕妙洒脫なる余等の豫想以上にして、此等をこそ書畫說法とも稱すべく、愈々國師の高風偉德に傾倒せざるを得ざりき。

二

大用國師は伊豫國宇和島高串村の産にして、法諱を周楞と云ひ、誠拙無用道人、不顧庵主等の號あり、幼にして宇和島の佛海寺に入り、靈印和尚の弟子となる、法器夙成、言動已に凡兒に異なり、宇和島伊達侯時に佛海寺に來りて靈印と談ずるの際、國師に命じて其肩を叩かしめ、吾次回江戸より歸城の節、今日の褒美として汝の爲めに法衣を購ひ來るべしと言はれけるが、其後侯の江戸より歸りて佛海寺を訪はるゝや、又國師をして其肩を叩かしめければ、國師は侯に向つて何故お約束の法衣を賜らずやと問ひしに、候は多事に紛れてハタと失念致したりと答へられければ、國師は憤然として聲を厲まし、武士に二言あるべきやとて、侯の横面を一撃して、何處にか走り去りしにぞ、

靈印和尚は大に驚きて國師の爲めに陳謝する所ありしに、候は却つて國師の凡物に非ざるを歎賞し、靈印をして篤く之を撫育せしめたりと云ふ、國師稍長ずるに及んで、武州永田月船和尚の宗風を慕ひ、東遊して永田山に登り、和尚の室に參せんとせしに、恰も和尚の留守中にて番僧堅く之を拒み、折柄雨の降り出でしに、門宿さへ許さざりしかば、國師は雨中に山を下りて路傍の辻堂に入り、石地藏の頭に踞して眠り居りしを、偶々月船外より歸りて之を見附け、其凡器に非ざるを知りて終に挂搭を許しけるに、勵精刻苦衆に越え、後年大に樹立して遂に月船の衣鉢を傳へたりと云ふ、國師の業成りて圓覺寺佛日庵に住するや、大に同寺の荒廢を憂ひ、先づ樓門の改築を發起しけるが、江戸深川の豪商白木屋の主人、國師に謁して金百兩を寄進せしに、國師は此金を受取りながら一言も謝辭を述べざりしにぞ、主人大に案外して、自分に於ては聊か奮發したる積りなれども、此寄進に對して老師が一言の謝辭をも述べられざるは、某甚だ其意を得ずと云ひたるに、其時國師は爐邊に座して豆粥を煮つゝありしが、忽ち鍋蓋を取つて主人に擲げ附け、百兩の金は汝自ら其福田に植ゆるなり、老衲に於て何

の謝する事か之れあらんと叱咤せられしにぞ、主人も大に感悟する所ありて、益々國師を恭敬したりとなり、昔宋の大慧禪師は或る人が其寺の窮乏を見兼ねて禪師に糧米を贈りたるに、禪師は敢て謝辭を述べず、汝の慳貧を破るは汝の智慧を増すなりと言はれたりとぞ、東西の高僧所言暗契、異曲同工と謂ふ可きなり。

三

大用國師は禪餘書畫を嗜み、茶事を好み、詩歌を詠じ、紀行を草する等極めて多藝多趣なりしかば、機鋒は時に應じて峻嚴なりしやうなれども、氣が利きて垢脱けがして、僧俗双方の人望を集めたる者の如し、今度佛日庵に於て催されたる國師遺墨展覽會に出品されたる國師の肖像畫は、法弟東海禪師の讚ありて、原在明の筆に成りたる者なるが、潑刺の氣眉宇の間に溢れて、伊達侯の横面を撲りたる當年の威風を存すれども、之れに接したらば頗る如才なき應對を爲すべしと思はれ、其微笑を含みたるが如き口邊には、縦横無礙の説法を演ずべき筋肉を緊張して、其逸事と併せ考ふれば如何にも禪師の面目を思ふべき者あり、白河樂翁公鎌倉巡視の際、圓覺寺禪堂の前に到り、其

座禪牌を見て、是れ何の義ぞと國師に問はれけるに、國師は即座に之に答へて談何ぞ容易ならん、相公縱令金の草鞋を穿きて一日に日本國中を巡り來るとも、這個座禪の事は到底お分りになりまますまいと言ひ放ちければ、公も大に感歎して辭し去りたりと云ふ、又松平不昧侯が國師を其茶會に招ぎ、大阪の谷松屋權兵衛に其相伴を命ぜし事ありしが、權兵衛は今の戸田露朝の先代にて、宗潮と號し、不昧侯も彼は道具にかけては至極の目利者なれども、兎角油斷のならざる剛者なりと評されたる程にて、大膽不羈の人物なりければ、今日は仲間の者と吉原に遊ぶ約束あれば、和尚のお相伴は平に御免を蒙りますとて、事もなげに之を斷りけるにぞ、不昧侯も是非なく明々地に之を告げられしに、其後權兵衛は餘りに我儘なりしを悔たる者の如く、或る時國師が天龍寺にて病氣に罹りたりと聞くや、羊羹一包を携へて其見舞に赴きけるに、國師は病床に權兵衛を延きてハツタと睨み、汝は曩に雲州侯の茶會にて愚僧の相伴を斷りたりと聞き、扱ても小氣味よき男よと思ひ居りしに、今我が病氣見舞に來るなど何ぞ先の大膽不敵に似ざるやと一喝せられければ、流石の權兵衛も逡巡して一語を發す

る能はず、誠拙和尚は眞に畏るべき師家なりとて、舌を巻きて驚歎したりとなり。

四

大用國師の茶事に於ける、如何なる趣向を用ひられしや之を知るに由なし、嘗て忘路亭なる一茶室を設けて茶三昧に入りたる事ある由なれども、禪僧の事とて勿論名器を所有せし者とも思はれず、今度遺墨展覽會場に出品されたる國師常用の風爐釜と云へるは、木製樽の中に鐵釜を仕込み、据風爐の如く炭火を底に置きて湯を沸す構造にして、無造作極まりたる一品なるが、此一品に依りて觀察すれば、國師が一碗萬能的茶人にして、大佗茶風を悦ばれしや知るべきなり、又今度陳列の遺品中に國師が佛日庵に寄附したる天人釣香爐と云ふ物あり、唐金製にて天人が飛行の姿を即身香爐と爲したる者にて、足利の鏝阿寺にも義政所持とて之れに類したる香爐あり、時代精作殊勝にして、最も書院用に適する者なり、又國師の持ちたりと云ふ屈輪柄拂子は、定めて由緒ある者ならん、精作にして頗る古雅なり、栗木製如意は、其柄に少林面壁神光斷臂の八字を彫附けたる者にして、之を以て無數の法弟を打出したるならん、又其絡子は至つて粗末にして、國師が平常質素を尙び、粗衣に甘んじたる一端を見るべきなり、國師嘗て不願齋待合噺と云へる一本を著はして、自家の茶事訓を示したる事ありしが、其中に、

不願が茶は無茶なり、有茶に對する無茶にはあらず、然るに無茶と云ふ事は何ぞや、若し人無茶の佳境に入り給はば、無茶は即ち大道なり、道に生死迷悟、是非取捨の備なし、備なきの域に至るは無茶の道なり、備なきを知て行ふは無茶の徳なり、さあれば貴き事も無茶の道より貴きはなく、美なる事も無茶の徳より美なるはなし、此に一つの話あり、僧あり、趙州和尚の所に到る、州云く曾て到るや、僧曰く曾て到らず、州云く喫茶去、又僧あり到る、州云く曾て到るや、僧云く曾て到る、州云く喫茶去と、曾て到るも到らざるも喫茶去と云ふ、何の處にかある、此等の趣、深く知らば、趙州和尚の堂奥に入つて、茶味の苦うして且つ甘き鹽梅を知り給はん、それ何か鳴るやうだ。の一節あり、禪僧の喫茶樂は、余等門外漢の容易に窺ふべき所に非ざれども、松平不昧侯等が國師の高風を欽慕して、茶禪一味の清交を結び、茶事上深く國師に學ぶ所あり

しは固より多言を待たざるなり。

五

六月二十六日、圓覺寺内佛日庵大用國師遺墨展覽會場に於ては、竹嶋松田虎雄氏接待役を勤め、古川管長より豫て余の來場すべき由聞き居りたりとて、慇懃に各室を案内せられしが、最後の一室には風爐釜を備へて薄茶攝待の用意さへあり、圓覺寺塔頭若くは鎌倉在住の居士連より出品されたる國師の遺墨は凡そ百點内外にして、之を拜觀する事約二時間に亘り、因て以て國師の非凡なる性格並に其比類なき多藝の一端を窺ふ事を得たるは、余の甚だ欣幸とする所なり、國師は書を趙陶齋に學びたる由なるが、其筆法に禪機を含みて清健飄逸、自ら一家を成し、細大行草到る處として可ならざるなし、又其繪畫は松花堂に私淑したるやうなれども、傑作に至りては更に之を超越して、因陀羅若くは牧溪、梁楷の室に迫らんとする者あり、當日の列品中丹霞布袋、達磨寒山拾得、普化禪師、柱杖圓相等の圖多きは、國師が好んで揮灑したる畫題と覺しく、自畫あれば必ず自讚あり、而して其自讚は國師の文學的素養を發揮して、皆朗々と

して誦すべし、普化の讚に鈴聲斷處、面目分明と云ひ、柱杖の讚に到處無心、卽是山と云ひ、達磨の讚に、

不立文字祖

直指人心師

已被他追出

栖々又何之

と云ふが如き、徒に常套文句を題して其責を塞ぐ者と同日の談に非ざるなり、又國師は其遷化に先だつ事十二日自ら起たざるを知りて左の偈を示せり。

時來人未來、與來人將行、閻魔大王令嚴、明日打爲君相

國師が好んで畫を作り、又自ら之に讚して共に達筆なりし事は、酷だ白隠和尚に似たり、然れども白隠は書畫共に奇矯粗傲にして、畫中の人物險相にして毒々しく、要するに百姓手たるを免れざれども、國師の書は清瘦勁拔、其畫は輕妙洒脫、何となく垢ぬけして清々しく、之を通人手とも評すべきか、書畫は直に作者の精神を現はす者なれば、二老漢の百姓手と通人手は其禪風に於ても亦自づから然りし者なるべし、國師嘗て藤澤驛にて不味候と行き逢ひしが、嚴寒の候にて双方駕籠に乗り居りしかば、候は國師が寒からんとて一時手爐を貸與へたるに、國師は駕籠を急がせて其儘手爐を分捕

りたりとの奇談あり、國師の遺品として柳澤堯山侯より贈られたる銀製手爐あるを見れば、此逸話は或は後人の假作なるやも知れざれども、兎に角其爲人の輕快飄逸なりしは、斯かる奇談あるに依りて略之を推知す可きなり。

六

大用國師は著書多く、其中にも正法眼藏、虛行實紀、忘路集等は最も著名なる者なるが、此外誠拙禪師歌集一卷あり、彼の澤庵和尚が「人ことに一つの癖はあるものを、吾にはゆるせ敷島の道」と詠じて和歌を烏丸光廣卿に學びたるが如く、國師も亦國風を香川景樹に學び、交換的に禪要を景樹に傳へたりと云ふ、今其歌集を見れば、清新の句調頗る其師に類し、然も其中に禪味を寓して、和歌も亦國師が説法の一類たりしが如し、今左に其二三を掲げん。

涅槃會

けふはなしきのふはありとみほとけの

姿にまよふ人そかなしき

忘路亭秋暮

年をへは今も昔となりぬへし

昔にまさる人となれわれ

又

富士はこね鎌倉山の梢まで

雪晴にけり庵の曙

國師が晩年忘路亭を造りたるは藤澤附近と聞き及びしが、余は未だ之を探究するに及ばず、蓋し彼の佗茶道具を其亭に備へて時に茶三昧に入り、靜かに道念を養はれたる者なるべし、國師の多藝なるや時に又俳句をも試みられたる者と覺しく、其遺墨中に自ら牛を畫きて左の一句を讚せし者あり。

秋の日もやつはり牛の野羅くくと

扱國師の遺墨拜觀を終るや、佛日庵を出て、其門前より元來し路を數十歩引返せば、右手に大用國師塔所と認めたる立札あり、乃ち國師の墓所に敬意を拂ふべく、或る禪

坊の裏手を廻りて岩窟内に墓碑の連立する丘麓を辿りつ、最後の岩窟に着到すれば、稍大型なる一基の石碑あるが國師の塔所なりと云ふ、但數代の高僧を合葬したる墓標にて、國師一人の石塔にはあらずとなり。

國師は文化十三年七十一歳にして嵯峨の天龍に移住したれども圓覺に住する事最も長く、百廢を興して寺觀を改め、爐鞴を開きて雲衲を陶冶し、清陰淡海、東海、巨海、泊船、拙庵等を其門下より出して、徳川末期漸く衰殺せんとしたる禪風を舉揚したる功業は百年後の今日に發顯して、自ら周樗若くは無用道人と稱したれども、今や大用國師の謚號を賜はりて無用竟に大用に歸したるは、國師の潛徳幽光が如何に深長なりしやを知る可きなり、而して余の如き門外漢が今日國師の遺墨に接して、親しく其流風餘韻を偲ぶ事を得たるは、古川管長若くは圓覺會下居士等の賜なるが故に、茲に當日所見の一端を記して、右等諸君に敬謝の意を表するなり。

鈴山翁記念會

(大正九年六月二十七日)

上

御歌所寄人文學博士佐々木信綱氏は、六月二十七日先考鈴山翁三十年記念會を帝大法科大講堂に開き、又同構内山上會議所に故翁の遺著遺墨竝に竹柏園藏品を展陳して、當日參會したる人々の縦覽に供せられぬ、翁は明治二十四年六十四歳を以て歸泉せられ、余は其生前に於て警咳に接するの機會を得ざりしかば、隨つて翁に就て知る所甚だ尠けれども、今其小傳を按ずるに、翁は文政十一年伊勢國鈴鹿郡石薬師驛に生れ、父を徳綱、母を鴉子と云ふ、幼きより學を好み、弱冠同國山田の足代弘訓翁の門に入り、留學數年、學業大に進み、時に師の代理を爲すに至る、後江戸に出て歌學を井上文雄に受け、歸國後津藩主藤堂侯に招かれて、爲めに歌文を講ぜし事あり、明治十五年居を東京に移し、帝國大學古典科及び東京師範學校に教鞭を執られしが、十八年病を得て閑地に就き、専ら著述を事とし、後進を導き、其門弟實に千有餘人に上ると云ふ、翁は幼名を習之助、時綱と云ひしが、足代翁より其名の一字を分たれて、弘綱と改め、鈴山又は鶉居と號し、園に那木の大樹あるに因りて、別に竹柏園と稱せり、篤學にして國典に精

しく、和歌に秀で、最も心を門弟の教育に盡したりとなり、伊勢は日本に於て最も多く國學者を出したる國柄にして、本居宣長、足代弘訓の如き天下に高名なる偉人あり、而して鈴山翁は實に足代翁の高足たり、才學夙成、少より老に至るまで國學歌文の著書其數を知らず、又詠歌に堪能にして、十七歳の時正月より十二月までに千首の和歌を詠じたる事あり、竹柏園歌集を見れば詞藻富贍、格調高雅、感吟枚舉に遑あらざれども、中にも立春の題にて、

久方の天の戸あけて來る春に

立ちそふものは霞なりけり

又辭世に、

命あらは嬉しからましもしくは

それもすへなし神にまかせむ

と云ふが如き、一は天照大神の鎮座まします伊勢の國人の歌として、其秀麗高朗なる、本居翁の敷島の和心の歌に詞響すべく、一は翁が終焉に際して、從容自若、安心立命

の極意を示したる者にして、因つて以て其平生の爲人を偲ぶに足らん、又明治の初め翁は歌詠む人の絶えくくなるを歎きて、

月花をよそにのみ見て言の葉の

みちゆく人もなき世なりけり

と詠ぜし事ありしが、翁が國風衰頹の際に於て如何に其興復を以て自任したるやは、此一首に依りて思ひ半に過ぐべきなり。

下

帝大法科大講堂に於て開かれたる、佐々木鈴山翁三十年記念會は、午後一時半より開會して孝子信綱氏は先づ追憶の辭を述べ、次に文學博士芳賀矢一氏の國語と和歌同萩野由之氏の古典科時代の佐々木先生、同上田萬年氏の伊勢國と國學者と題する講演あり、此講演は取々面白く又有益なりし中にも、上田博士の伊勢國と國學者に關する演説は、鈴山翁の如き斯道の大家を出したる國柄の歴史的考證該博にして、殊に傾聴に値せしが、茲に之を披露する能はざるを遺憾とす、斯くて講演終るや、夏の日佐々

木弘綱大人の三十年の記念のまとひに懐舊といふことを詠める」と題する歌の數々披講せられしが、其中には徳川頼倫侯、山縣有朋公、故威仁親王妃殿下等より寄せられたるものあり、而して今日の會主信綱博士兄弟の歌は左の如し。

印東昌綱

別れまつりこゝたのよはひへぬれども

吾思ひには年月もなし

佐々木信綱

天かけり見しきこしめせふみまし、

道はとこしへにひろこりさかゆく

右歌の讀師は萬里小路通房伯、講師は藤田雅之男にて、都下神社の社司社掌五人發聲講頌を爲し、例の優雅なる聲調を以て繰返し、歌披講あり、滿堂の參席者數百名に深き感動を與へられしが、夫れより山上會議所に於て故翁の遺著遺墨及び竹柏園藏品展覽會あり、廣き一室に故翁の書畫を掛け列ね、又故翁及び信綱博士が愛藏の珍書

奇冊を披陳せられければ、其中には定めて有益なる材料ありしならんと雖も、講演批評に時移りて早や午後六時頃となりければ、余は他約ありしが爲め其詳覽を他日に譲りて退場せり、左れど首尾一貫如何にも學者風なる記念會にして、半日間國學に關する有益の智識を享受する事を得たるは畢竟故翁の賜と云ひて可ならん、古來歌人に二代なく、俊成卿父子以後殆んど其例を見ざりしに、信綱博士が鈴山翁の箕裘を繼ぎて金聲玉振益々之れを發揚しつゝあるは、當に一門の榮譽なるのみならず、眞に我が學界の慶事と謂ふべきなり、井上通泰博士が當會に寄せられたる歌に、

みそとせの昔の小松世をおほふ
蔭となりぬとまをせ御たまに

とあり、故翁在天の靈、今日此記念會を降臨して如何に悦び給ふらん、誠に目出度き記念會なれば、聊か所見の概略を記して當日參席の光榮を荷ひたるを謝し、又腰折一首を物して、恭しく故翁追慕の意を表す。

のこしまし、言の葉を見てありし世に

まみえぬことを悔しくそおもふ

親庵開席

(大正九年七月一日)

上

三井物産常務福井菊三郎氏、一昨年講和會議使節の一行に加はりて佛國に赴くや、赤坂青山新邸建築設計一切を仰木魯堂に依頼して、本家庭園茶室露地とも總て主人の指圖を待たず、思ふ存分に經營せしめければ、氏の歸朝後知友を招ぎて和洋兩様の饗宴を開く毎に、仰木式建築として、非常の進歩を示したりとて、頗る好評を博せしが、未だ其茶席を開くに及ざりしかば、同人中の進行係より督促矢の如くにして到底當冬の口切を待つを得ず、後れ馳せながら初風爐に於て取敢ず開席する事と爲りたる由にて、余は七月一日午後五時半の客組に加へられければ、示刻青山南町六丁目の福井邸に赴き、正門を入り更に其左手の内門に入れば、右手に當りて杉皮葺の露地門あり、松花堂筆親庵の二字を彫りたる團扇形木額を其入口に掛けられしが、親は藪の古文にて庵名としては異様の文字なり、松花堂が如何なる意味にて何人に書き與へたる者なりや其由來を審かにせざれども、福井氏が取つて以て新庵名と爲せしは物産會社に絹絲輸出の一部あり、茶室に在りても猶ほ其商賣を忘れざるが爲め親庵の二字を以て座右の銘と爲したるものと見れば、雅俗兩様に通じて最も適切なる者なるべし、扱て此露地門を入りて檜林の中を十數歩進めば、奥庭の方より流れ來る遣り水は木立の中を貫き、木橋の下を潜りて潺湲たる溪流を成し、人をして忽ち深山中に入るの想ひあらしむ、而して此木橋を渡りて突當りたる一構は即ち當庵の寄附にして、溪流に面して腰掛を設け、腰掛の後に三疊寸詰りの待合席あり、其片隅の丸爐に銀瓶を掛け、茶盆には赤繪の香煎入と朝日焼茶碗を取合せ、栗木地透し手附煙草盆には、染附の火入を供へて、寄附の設備殘る所なかりしが、設計者が餘りに我流を用ひ過ぎ、て、柱若しくは窓の棹縁を太くし、又此席の割合に天井を高くとし、隨つて寄附的小幅を掛くるに、適せざる壁床を造り、又殊更に三疊を寸詰りにしたるが如き、果して何の意味なるやを知らず、兎に角露地の傑作なるに比して、寄附の見劣りせらるゝは、忽ち待

味なるやを知らず、兎に角露地の傑作なるに比して、寄附の見劣りせらるゝは、忽ち待

合中の談柄となりしが、當夜相客は三井守之助、早川千吉郎、團琢磨、山澄宗澄にて、余を併せて五人、而して正客は無論守之助君なりき。

中

福井氏の新席、親庵は其寄附と目と鼻との間に在り、寄附を出て、左手の溪流中に据ゑ置かれたる伽藍蹲踞石にて嗽ぎ、順次入席して其床を見れば、俊頼卿筆大色紙と云ふを張附けたる一軸を掛けられしが、臺紙は白地唐草模様唐紙にして、文字中に少しく磨損したる所あれども其歌は

いにしへにありきあらずは知らねとも

千歳のためし君にはしめむ

と云へる祝言にて、表具も頗る結構なり、近來古筆家は此色紙を公任筆と鑑定するに至りたる由なれども、何れにしても新席に相應しき名幅なり、當庵は利休好み三疊臺目なれども、又しても其一方に開きたる織部口の寸法古法に協はざるが爲め、何となぐ不恰好にして、入席勿々先づ余等の茶事眼を刺戟するは、古人の工夫したる茶室の

寸法が幾多の試験を経て、自ら其歸着する所に歸着したる者なるを知るべきなり、扱て顧みて道具疊を見れば、雲龍土風爐に寒雉作雲龍釜を掛け、庵主出て挨拶の後、溜塗丁斧目船底膳と、喜三郎黒塗椀にて懷石を運び出されしが、其獻立は左の如し。

- 汁 三州味噌、茄子、水がらし
- 向附 祥瑞紅皿、味噌和へ整
- 椀 鱧、冬瓜細輪

- 燒物 支那禁黨、芋、椎茸、百合、午夢、胡蘿、葡萄、鉄
- 吸物 青梅
- 八寸 海老、新蔬

- 香物 雲鶴鉢、胡瓜
- 酒器 阿蘭陀蓋鐵銚子、丁抹國製德利、雅印、拾孟、菓子、水羊羹、青葉を敷きて

懷石器具中、燒物鉢は鳥の子めきたる白地にて、底に嘉祐二年臣趙幹造とあり、雲鶴香物鉢は精作無疵美麗言はん方なし、コツペンハーゲン製德利は、彼の國に於て日本趣味を利用したる者と覺しく、茶席に用ひて映り好き者なるが、本來德利として生れたる者たるや否やは疑問と云ふべし、斯くて懷石終るや、庵主の炭手前あり、器物は左の如し。

- 香合 時代蒔繪青貝互用、桐模様
- 炭斗 竹組四方
- 羽筥 白鶴
- 火箸 鐵

香合は長角形にて時代古きにも拘はらず、蒔繪錫縁共に窶れ少く、青貝と蒔繪を重ねて桐模様を出したる精巧美麗譬へんに物なし、庵主が何時の間にか新庵開きの策戦計畫を立て、厚俸大祿を以て如何に多く所要の雄將猛卒を抱へ入れたるやは、此一品に依りて其他を推知すべきなり

下

親庵茶會炭手前終りて後暫時腰掛に中立せしに、當夜は五月十六夜にて、露地の木立を洩れ来る月光は涼しく遣水の上を照して、席中の炎熱忽ち消え去りし折柄、大銅羅と覺しくて搖曳長き合圖の七點陰陰と響き渡る夜會の風情は又一段と思はれけり、斯くて再び入席すれば、床には空色滴らんばかりの青磁筍の花入に、杪羅の満開一輪、蓄一つを活けられたる美事さ筆舌の形容すべき所に非ず、頓て庵主出て濃茶手前ありしが、其器物は左の如し。

茶入

新兵衛作銘卯の花
袋益田廣東

茶碗

唐津おはぐる
建水 砂張棒の先

茶杓

遠州作歌銘浦波
蓋置 青竹引切

水指

木地釣瓶

建水

砂張棒の先

蓋置

青竹引切

茶

好の白

遠州作茶杓浦波は神尾藏帳品にて、筒に同筆にて

立かへり思へはさすかふりにけり

五十路なれぬるわか浦波

とあり、唐津おはぐる茶碗は關西にてはかはくちらと稱し、比較的輕き者なれども、無疵にして作行立ち優り、夏茶會に於ては如何にも尤なる組合せなりしが、新兵衛の茶入は掛物、花入、香合に對して聊か位負けせしやう思はれぬ、扱薄茶は同席にて、水指は高取と替り、茶碗はおはぐると併せて應舉筆群鶴圖入了入作樂茶碗を用ひ、唐物朱菊盆に惣菓子を盛り、不味好み一閑手附煙草盆に織部火入を備へ、伊丹信太郎の薄茶代點ありしが、茶事は是れにて終りたれば、廣間にて番茶一杯差出すべしとの挨拶に連れて八疊廣間に寛げば、一間四方床に松花堂筆一指禪俱胝和尚の圖に、澤庵和尚の讚ある長上幅を掛け、恰好よき耳附籠に草花數種を活け、小書院に近衛三藐院筆詩歌色紙帖を飾られしが、美麗なる今利の大鉢に果物を盛り、古九谷の皿類を出されたる

は、庵主が彩壺會員たる面目を發揮したる者と見えけり、聞けば庵主は嘗て一度も點茶を稽古したる事なしとの前觸れに違はず、濃茶手前中停電、珍形團子製造等新茶人にあらん限りの愛嬌を振り蒔かれしが、其亭主振り好きは先天的にして、初陣的茶會は残る方なき大成功を以て終局せり、今や東都の茶老漸次凋落しつゝある際に於て、斯界に此一新星を加へたるは眞に悦ばしき事にして、古語に虎は死して皮を留め、蠶は死して繭を残すと云ふ事もあれば、庵主も今度の開席を出發點として、其本領たる實業以外に或る風雅的好事を傳へ親庵主人の名稱に背かざらん事を余は同人と共に至囑に堪へざるなり。

香山畫談

(大正九年九月十日)

一

余は今年も亦伊香保に避暑せり、七月二十二日登山、八月末日に歸京、滯留實に四十一日に及びしが、今夏は大正名器鑑に収録する名器の列傳を記述するに忙はしく、不精

者の節季働きと云へる諺に洩れず、四旬を打通して閉戸先生を學び、下山の前日辛うじて茶入茶碗百七八十點の傳記を書き終りたる次第なれば、散歩にも出ず、知人も訪はず、机と首引なりしが爲め、山中一事の記すべきものなしと雖も、八月中旬、余の宿房たる木暮第二別莊の直下なる第三別莊に小室翠雲畫伯の來寓せしに依り、三四回氏と相會して其席畫を見、其畫話を聞き、殊に畫伯の先師田崎草雲翁の經歷談を傾聽して、人格と畫風とが如何に相關聯する者なるやを領解する事を得たるは余の最も欣幸とする所なり、初め畫伯の來香するや一夕余の僑居を訪ひ、自分は過般來箱根湯本の別莊に滯在せしに、交通便利なるが爲め、俗客蟬集して應接に忙しく、畫想と揮毫を妨げらるゝを以て、此程飄然當地に來遊したる次第なりとて、自ら綠竹を畫き、金泥を以て左の一首を認めたる、支那製の紺紙扇一本を贈られぬ。

飄然抛筆避炎塵

茲地靈泉驗若神

我出函山遠來此

休嗟唯重百年身

贈筭庵主人

庚申夏抄香山客中

翠雲道人畫併題

余は登山以來一向名器鑑編輯に没頭して未だ詩想を動かすに暇あらざりしに翠雲道人より一絶の惠贈を辱うして忽ち吟興を催せしかば一夜考案して左の拙作四首を得たり但し余が住居したる第二別荘は西園寺陶庵公と翠雲畫伯との中間に介在せしを以て第一首は先づ此事に言及せしなり。

香山寓樓興陶庵老公僑居相接偶翠雲畫伯來卜隣因有此作

喜聞載筆雲林至

已有謝安來養眞

自是山中清福足

名公巨匠各成隣

翠雲畫伯自函嶺來訪我香山僑居惠贈自畫竹便面賦此道謝

紺紙金泥扇一張

揮來四座忽生涼

謝君自寫函山竹

贈我清風無盡藏

翠雲畫伯見贈自畫竹便面乃步其原韻道謝並言懷

瀟洒風姿自絕塵

干烟千雨見精神

坡翁去後一千載

畫竹如今誰替身

披拂風烟不染塵

禪機入畫筆如神

虛心勁節一竿竹

即是現成清淨身

二

余は小室翠雲子と相識る日甚だ淺く當春小田原山下氏の對潮閣にて初對面以來今度は實に第二回目の會見なるが子は軀幹餘り大ならず眉目清秀才氣駿發所謂口も八丁手も八丁にして一問題出る毎に應答明晰能く其要領を得るは實に畫才に富むのみならず又兼て世才に富む人たるを知るべし子の生家は舊館林藩の御用商人にして屋號を田島屋と云ひ苗字帶刀御免にして祖父は吉右衛門嚴父は楨三郎と云ひしが土地の舊家なるを以つて多少漢學の素養あり殊に嚴父は繪畫を好み時に畫筆を弄びて雅號を溪村と云ひければ子も亦少小より其藝に倣ひ宿好次第に募りて足利なる田崎草雲翁の門に入り専ら畫道を學ばんとするに至りしが家人は之を悦ばず今日の時勢に繪畫などを學びて何かせんとて容易に其請ひを許さざるにぞ

子は自勞自活一切實家の支給を受ざるを條件として遂に草雲方の塾僕に住み込しが其時子は十六歳草雲翁は七十歳にして爾後常に此老師に親炙し明治三十一年翁が八十四歳にて病歿の時まで其膝下に在りて研修を怠らず十六歳より十四年間修業を積みて子は已に三十歳に達せしを以て翌年初めて東京に出で當時の諸大家を歴訪して其畫風を窺ひ又其談論を聞きしに豪放高邁なる先師草雲に比較すれば何も識見卑俗にして意に満つる者甚だ少かりしと云ふ子は勿論文人畫家にして草雲の衣鉢を傳ふれども夙に日本古畫を愛する由にて余が寓樓の床に掛け置きたる雪舟達磨の一幅を見るや子は直ちに雪舟に關する感想を語り出で自分は雪舟の高邁なる筆致に對して常に非常の敬意を表し居る一人なるが先年日本美術協會に於て雪舟畫展覽會を催されたる時何心なく會場に入りて正面に掛り居たる維摩居士の像に面するや其威容場内を壓して之に向ひたる自分は頭を仰へ附けられたるが如く殆んど之を正視する能はず自分は已に畫家として世に立つ者なれども一生中に斯かる名畫を描く事を得べきや如何と自省すれば自ら責任の重きを感じて呆然自失せし事あり畢竟雪舟の人格が畫面に反映して此威嚴を生じたる者にして今日拜見せし此小幅達磨も筆力の勇勁膽氣の充實先年一覽したる彼の維摩像に異ならず雪舟の如き大畫家に至りては獅子が小兔を打つにも猶全力を用ふると一般幅の大小に依つて其力の強弱を異にせざる者にして名畫の名畫たる所以は實に此處に存するなりと語られぬ。

三

余は平常人格と繪畫と密接の關係あるを信じ又其人格向上に禪學修業の必要あるを信するものなるが故に翠雲子が偶々禪僧雪舟の畫風を激賞するを聞き最も先づ我が意を得たるを喜び古來禪僧に大人格者あり而して宋元若くは日本の古名畫が概ね此禪僧の手に依りて成りたるを觀れば禪學と繪畫と冥々間に相關聯する所頗る深切なる者あるべしと言ひたるに翠雲子は固より同感にして自分も數年前より此事に注意し鎌倉建長寺管長菅原時保老師の會下に參して時々打坐を試みつゝあり已に師より趙州狗子佛性の公案を授けられ日夕工夫を怠らざれども未だ自得す

る所なく、或る時老師より所解を提示せよと促されたれども何等言ふべき所を知らず、我が如き鈍根の者は長年月に亘りて修行するの外なければ、僅々數年間にして自信ある所見を呈する能はずと申譯したる次第なるが、先日箱根の別莊に於て揮毫に餘念なかりし折柄、雷鳴猛烈に起りければ、此時こそ我が度胸を試験すべき機會なれ、我が心を雷鳴中に投じて彼我打成一體と爲り了らば、天地間更に怖るゝ所ある可らずとて、平常雷嫌ひなるにも拘らず、縁端に立出て、閃き渡る電光を打守り居りしに、頓て二三丁先きに一時に二三ヶ所落雷したる震動に我知らず頭を俯し、オ一怖やと一聲發したる後より氣附きて、未だ遠く悟道の境に達し居らずと思ひ、自分の對雷試験はマンマと失敗したるを自覺せりと語られしは、頗る面白き實驗談と云ふべし、翠雲子の畫境が今日那邊に到着し居るやは門外漢たる余の知る所に非ざれども、目今世間幾多の畫師中、兎に角禪機と畫趣と相關聯する所あるを達見して、平常心を此邊に用ひ、他年一日畫禪一味の境涯を自得せんと心掛くる者幾人ありや、言ふは易く行ふは難きが故に、翠雲子の畫禪一致論も其最後に到着せざれば、効果如何を知る事能はざれども、空念佛も猶ほ爲さるるに勝れり、言説のみにても兎に角此邊の消息を解せんとし、若くは解せんと勉むる夫れ自身已に幾分の進境を示すものなれば、余は當今の畫家として此事に思ひ及びたる翠雲子の自覺を多とせざるを得ず。

四

小室翠雲子は田崎草雲翁の晩年の弟子なれども、翁の衣鉢を傳へて所謂出藍の譽を得たる者は、翁の門人中、唯子一人あるのみなりと云ふ、西園寺陶庵公は今度伊香保に於て翠雲の席畫を一覽せられ、其筆に任せて花卉禽蟲を描くに何等苦心の體なく、談笑の間に輕々揮灑し去る其熟練驚くに堪へたり、草雲の畫は硬勁餘りありて輕妙足らざるの憾みなきに非ざりしが、翠雲は此點に於て已に先師の窠臼を脱し居り、唯山水大作畫に至りては先蹤を逐うて新意を出さず、爲に千篇一律の嫌ひなき能はざるやう思はると語られしが、公は繪畫に對しては流石に一隻眼を有せり、余は此品評を以て最も能く今日の翠雲に適切なるを感ぜざるを得ず、兎角文人畫は餘りに描き過ぎて減筆の妙に乏しく、随つて餘韻を留ざるもの比々皆是れなるが故に、余は翠雲

子に向つて先づ此事を尋ねたるに、貴説誠に然り、抑も文人畫は形似の外に超越して氣韻を以て勝るべき者にして、減筆の間に餘韻を留むるは寧ろ其本領なる可き筈なれども、古來支那南畫派の筆法が大抵滿幅皆畫式なりしが爲め、日本の文人畫家も多くは其響みに倣ひ、貴説の如く所謂描き過ぐるの弊に陥りたれども、此等は今後の文人畫家が、大に精思熟案して、時代に相應する新意匠を出すべき所ならんと答へらる、又余が東洋繪畫の極致は運筆の鍛練にあり、一點一畫夫れ自身已に畫にして其畫が相集りて形を成すを以て、全幅活動の妙を具ふる者なれば、東洋畫家は最も意を此點に注がざる可らずと言ひたるに、翠雲子は固より同案にて、明治時代の畫家にては、下條桂谷翁が最も運筆の妙を極め、濃墨の鮮かなるに至りては、何人も之れと比肩する能はざるべし、又橋本雅邦は何と言ひても近代の大家にして、西洋畫風を東洋畫に交用し所謂新派の率先を爲しつゝ、狩野芳崖の如く露骨ならず、彼の筆致を我が有と爲して上品に之を活現し、明治時代の畫風に一生面を開きて不朽の名を後世に留め得たるは、明治畫壇の第一人者たるを失はずなど、其他流に關する評論の頗る公平にして且つ能く肯綮に中りたるは、自ら此中の消息を解する者と謂ふべきなり。

五

余は嘗て田崎草雲の溪山飛雪圖を觀て、其豪放の意氣筆端に、送り人をして覺えず快哉を喚ばしむる趣あるを感じ、蓋し其人も亦其畫の如くなるべければ、翁を知る者より其經歷談を聽聞したしと思ひ居たるに、今度其高弟翠雲子と緩談するの機會を得たれば、一夕子に乞ふて翁の略傳を聽き取りしが、翁の少壯時代に於けるローマンチック行動は常人の意外に出づるものあり、之を談話上手の翠雲子が講師の偉人傳を辯ずるが如く語り出でたるに依り、波瀾重疊盡くる所を知らず、之を詳叙するは、到底拙筆の能くする所に非ざれば、今左に其概要を述べし。

田崎翁は其名を芸と云ひ、此芸の字を分析して音便に因りて自ら草雲と號せり、足利の人にして少小より擊劍若くは柔術を好み、體軀偉大膂力絶倫にして、然も磊落不羈なりしが、其江戸に出るや、川崎に住したる畫師梅翁と云へる者に就いて繪畫を學び、梅溪と號して時に畫筆を弄びしを以て、後年諸國勤王の士と交るに及んで、花川戸

に佗住居し、紙鳶の繪を描くを内職とせしが、赤貧洗ふが如くなりしかば、夫人は憂悶の餘り狂疾を發して家内の悲惨目も當られざる程なるに、翁は泰然として更に屈せず、心を傾けて看護せしを以て、翁を知る者は皆其情誼の篤きに感じたりと云ふ、斯くて程なく夫人を失ひたる翁は、彌放縱自恣にして酒を飲む事量りなく、氣を負ひて人を壓し、市中を徘徊して喧嘩と見れば自ら其中に飛び込みて之を引受け、花川戸に住みつゝ、一種の幡隨院を氣取りたるが如き趣あり、強者と見れば得意の腕力を振つて一步も相譲らざりしを以て、當時人呼んで喧嘩梅溪と稱せりとぞ、其頃都下に浪人武士の一團あり、翁が晝會の席に招かれて其仲間と酒宴最中例の浪人團四名隣席に來りて亂暴を始め、遂に翁の席に闖入して片端より膳部を足蹴にするを、翁は窃に睥睨し乍ら酒を飲み居りしに、喧嘩梅溪とも知らず四人の浪士は翁の前に來りて其膳部を蹴揚ぐるや、翁は猛虎の嶋を負ひて立ちたるが如く、大喝一聲鐵拳を振つて浪士を散々の目に遣はせしかば、一座驚駭始めて喧嘩梅溪の膽勇に嘆服したりとぞ。

六

前記翁の亂暴浪士退治に就いては猶ほ餘談あり、翁は彼の浪士を逐ひ散らして後、酔歩蹒跚として歸路に就きしに、彼の浪士連は同勢二十餘人にて途中に待受け、多勢を待みて遂に翁を縛り上げ、將に一刀を頭上に加へんとせしが、翁が泰然自若として秋毫も動ぜざる勇氣に感ぜし者の如く、グル／＼捲にして其浪人團長の巢窟に拘引し去りしにぞ、翁は遂に團長に面して益々大氣焰を吐きけるに、團長も亦頗る之を奇として自ら其縛を解き、翁が酒を好む由を聞きて兩人對酌を始めしが、團長は翁の酒量に敵すべくもあらず、先づ散々に酔ひ潰れしを以て翁は悠然として其場を立去り、無事に生還する事を得たりとなり、又其頃勤王志士の一人にて已み難き必要に迫られ、翁に金五兩を無心せし者ありしに、赤貧洗ふが如き翁は固より一錢の貯へなかりしが、我に一策あり暫く此處に待たれよとて、飄然山谷の某寺に赴き、住職の不在を幸ひ、本堂阿彌陀如來の前に掛りたる金襴の純帳を取外し、腰に差したる矢立を抜取りて、拙者只今義に依つて友人の爲めに金策の必要あり、一時此純帳を拜借する者なりと、阿彌陀如來宛の借用證文一札を認めて之を佛壇の上に残し置き、此純帳を典物とし

て友人の急場を救ひたる處に、住職駈け付けて大に翁に嚴談せしが、翁は至つて平氣なる者にて、貴僧は阿彌陀如來の從僕ならずや、拙者は其主人たる阿彌陀如來と相談せしに、左る必要あれば遠慮に及ばずサツ／＼と純帳を持ち行くべしと云ふ快諾を得て、借用の一札さへ殘し置きたる次第なれば、從僕たる貴僧より異存を聞くべき謂れなしとて、始めより相手にならざるにぞ、住職も呆れて終に泣き寝入りと爲りたりと云ふ、翁の不羈放縱前記の如くなれば、其家庭は甚だ悲惨なる者にして、夫人は已に狂死を遂げ、長男は佐幕論者にして翁の勤王論と相容れず、父子異論の結果、或る寺院に於て遂に自刃するに至りしかば、其後足利の名家の次男を養子と爲せし事ありしも、更に自ら感ずる所あり、乃木大將の所論を三十年前に實行して、早くも己が繼嗣斷絶の覺悟を定め、住宅及び書籍を賣却したる金子を其養子に與へて之を離縁し、單身孤立、唯畫筆を弄びて其晩年を慰め、左の述懐一首を物したりと云ふ。

ひとたひは君にさへけし命毛の

残りてほそき筆のうつしる

七

草雲翁は晩年足利に隱居して孤獨自ら守り、興來れば畫筆に親しみ又門人に教授するを以て老後の樂みと爲せしが、其壯年時代に於ては豪放不屈、人の意表外に出づるの奇行少からず、或る時畫室の床に明珍作鐵製具足を飾り置きしに、砲術家某之を視て鐵砲の世の中と爲りたる今日、明珍の具足など何の役にも立たざるべしと言ひたるを翁は聞き咎めて、古名工が精神を籠めて鍛へたる具足はへろ／＼玉にて打貫かるべきやと言ひ放ち、次第に言ひ募りたる末、翁は左らば我れ此鎧を撰きて庭前に立ち居るべければ、君は鐵砲を以て之を打つべし、若し打たれて死すれば夫れまでなり、併し若し打貫かれざる時は君の首を拙者頂戴すべしと言ひければ、某も騎虎の勢ひ止むことを得ず、翁に向つて實彈射撃を試みたるに、彈丸は左胸部に命中したれども、如何にしたりけん、唯鐵板を回ませしのみにて、終に之を打ち貫く事能はざりしかば、翁は大刀を引抜きて今や砲術家の首を斬らんとせし時、某は翁に向つて、吾に一人の老母あり、程遠からぬ處に住めば一應暇乞ひして立ち歸るまで、暫時の猶豫を乞ひた

しと云ふ翁は即ち之を諾して暫く彼れを待ち居る間に胸部一面に紫斑を生じて發熱尤も甚だしく身動きさへもならざる處に彼の砲術家は歸り來りて約束の首を討たるべしと言ふにぞ翁は痛所の全快するまで暫く彼れに其首を預置きしに彼れは是れより翁の病床に侍し數十日間看護懇切至らざる所なかりしかば翁も其誠意に感じて預けし首は其儘に終身刎頸の交りを結びたりと云ふ翁の豪氣は晩年に至りても猶ほ全く衰へず時に門人を激勵叱咤する事などありしが清癯鶴の如く胸に垂れたる長髯の端を縮ねて兀坐したる處を望めば殆ど神仙の如く會心の友來れば悦んで談笑すれども俗客を厭ひて座右に十分間以上談話お斷りと云へる札を張り置き獨り閑適を樂みけるが住所の近傍に水車の響きあり又汽車の附近を通行するに及んで頻に其喧囂を厭ひ或る時左の狂句を作りたりと云ふ。

世の中は水の車に火の車

人のくるまもうるさかりけり

八

翠雲子の談に嘗て草雲翁の筐底より一疋の馬が後向きに爲り尻尾を揚げて正面に尻を露はしたる處を畫きたる原圖を發見しければ何とて斯かる異様の圖を作りたるやと試みに之を翁に問ひしに近來日本の畫家等は動もすれば西洋に心酔して東洋藝術の萬國に冠絶する所以を知らざるものあり恰も巴里博覽會に出品すべしと勸誘せられければ此機會を以て西洋畫家等に我が尻でも喰へと云ふ意氣を示さんと思ひ敢て此奇圖を認めたる次第なりと答へしとぞ是れは翁が平常負けず嫌ひにして何物も怖れざる豪放の氣性を現はしたる者なれども翁は斯かる豪放中に又極めて細心なる處あり少小國難に當り貧困の間に生活せしが故に卑事に多能にして獨身生活を爲すも更に不自由を感ずる様子なく常に門生を誡めて小事と雖も細密の注意を缺く者は畫家として決して成功する能はず例へば水入一つを買取るにも第一損所はなきや水は漏らずやと十分に之を檢査したる後に非ざれば決して之を買ふ可らず自分は少年の頃水入又は土瓶などを買ふに必ず水を入れて之を試験し代價を拂ひたる後彼此の苦情なきやう注意せしが斯かる注意は作畫上寸刻も閑却

す可らざる者なりと言はれしとぞ、翁は死生の際に入して其心身を鍛ひたるが故に自然に悟道の域に達し、已に繼嗣を絶ちたるを以て死期の漸く近づくを知るや、平生愛讀したる多数の書籍は悉く足利文庫に寄附し、筆硯紙墨日常用具は夫れく門生若くは縁者に分配して、禪宗の大徳が坐脱往生するが如く晏然として逝きたるは、到底常人の企て及ぶ所に非ず、翁は斯かる氣風なるが故に、其繪畫も自ら匠氣を脱して、勁拔豪健の筆致殆んど其人の如くなりしならん。翠雲子は翁が晩年の門弟なれども、翁は頗る其前途に囑望し、翁の實父の雅號たりし翠雲の二字を子に與へ、吾父は畫を以て世に顯るゝ事能はざりしが故に、汝大に勉勵して此名を辱しめざる程の畫家たるべしと訓誡されたりとなり、左れば先師に對する翠雲子の責任は頗る重大なるものあり、子は今年四十七歳にして猶ほ春秋に富むが故に、時勢に順應して古人未踏の地に新生面を開き、彼の文人畫の常弊たる滿幅皆畫的筆法を改めて、減筆中に一種の餘韻を求むる等大に研修する所なかる可からず、余は今度子より先師草雲翁の經歷を詳聞して、其後繼たるべき子が責任の重大なるを知るが故に、今聊か其談論の概要を記述して翁の逸事を傳ふると同時に、子の技能が年と共に愈々妙境に入り、大正畫壇に一大異彩を放たれん事を敢て切望して已まざるなり。

箱根唯識庵

(大正九年九月十三日)

益田鈍翁告老後、根居を小田原に占め、函嶺の一端石垣山を開墾し、小田原電氣鐵道を強羅まで延長して、此處に山中市を創設する主動者と爲り、自ら方丈庵を其中に結びて山居の多趣味なるを同人に示し、鎮西八郎が琉球統治に殘生を託したるが如く、老後の餘勇を函嶺の開拓に試みつゝあるは同人の感服して措かざる所なるが、同山中を跋涉して足跡至らざる所なきが故に、丘岳溪澗一として知らざる所なく、今に箱根通と爲り澄まして、翁に問へば山中の事歴々として掌を指すが如しとなり、世に廊下蔭と云ふ者あれども、翁の如きは其れ箱根蔭とも謂ふべき乎、然るに此蔭殿近頃千石原の一部に於て不思議なる隱棲を浚ひ得たれば、遊山の序を以て一度來り

て其地相を檢覽せずやと言はるゝにぞ箱根通が選りに選りて手に入れたる地所とて、定めて面白き仙境ならんと思ひ居りしに、余は例の茶器列傳編修の爲め、九月十日より數日間千石原俵石閣に滞在する都合と爲りければ、鈍翁は此機會を以て自ら彼の隠棲に余を案内し、ピクニツクの一會を催すべしとて、十三日正午頃自動車を驅りて俵石閣まで出迎はれければ、乃ち同乗して彼の早川の流に沿ひ、宮の下の方に向つて十四五丁下り行けば、川に臨みたる路傍の平地に今や茶店様の茅屋新築中なり、從來屢々此處を通行して氣にも留めず、唯草藪とのみ思ひ居りしに、今此平地より眼下の川岸を俯瞰すれば、近頃新築せし者と覺しき萱葺の棟あるを認めれば、不思議なる處に爲殿が隠棲を卜しける者かなと思ひつゝ、翁に尾して此茶店の庭前より稻妻形に屈曲せる山徑を爪先下りに下り行けば、往來を隔てたる山上より道路の土中を横切りて懸崖の半腹に流れ出づる山水は、或は白糸の瀧と成り、或は段々瀑と成りて、淙々琴々の聲大小高低音調を合せて天然の樂を奏するにぞ、境を踏む事一步にして已に遠く塵寰を離れたる想ひあり、右顧左眄遂に河岸に降着すれば、左手に當り

て水田様の平地あり、一面にゴロタ石の散在する中に、青々と山葵の生立ち居るは豫て聞及びにし、山葵畑なりき、山葵は山水の清冽なる砂地の上に生立つ者にして、其水の迅速に變換する程益々峻烈の氣を増す者なりと云ふ、左るにても瀧の下流の砂石中に於て何處に其根を託すべきやと疑はるゝ處に生長する植物とて、之を人間に譬ふれば、世智辛き世渡りする苦勞人の、其目より鼻に抜けてツンと強烈なる處あるに均しく、鈍翁の如きも其前半生を顧みれば、急流激湍中に立ちたる場合少からず、今日功成り名遂げて福徳翁となりたれども、猶ほ山葵畑の主人たる資格を有するは余の信じて疑はざる所なり。

二

今日余が益田鈍翁に誘はれたる、函根山中千石原早川沿岸の地所は、字を水土野と稱する由なるが、鈍翁は土の字が少しく風雅ならざれば、之を門の字に換て水門野と改書する筈なりと云ふ、往來より河岸まで數十間ある處を、河に沿ひて約百間程占有し居れば、其面積凡そ五千坪に達すべし、而して其河原の平地は、或は廣く或は狭く、又其

間に高低ありて懸崖には瀧を背負ひ、前面は早川に臨み、清流が曲折して奇岩怪石の間を奔下し来る處を、垂直に川上遠くまで見渡す光景、眞に奇絶壯絶と謂ふべし、而して其對岸は峰巒重疊、大樹鬱蒼として、其中に一道の飛瀑あり、山上より段々を成して木の間隠れに流れ落つる其景色、悉く庭前の物と爲り、鹽原山中に於てすら猶容易に見受くる事能はざる此絶景を、帝都を去る事程遠からぬ此箱根に於て目撃し得るは、流石に箱根通の選擇とて何人も豫想し得ざる不思議の地相と謂ふべきなり、斯くて余等は彼の河岸に於ける山葵畑を一覽し了り、川に沿ひて更に上流の方に數十歩すれば、今や半出來の姿なる萱葺土室に續きて篠を以て葺きたる杉丸太造りの小亭あり、と見れば平田越々一人亭下の腰掛に御輿を卸して余等の來會を待ち受け居りしが、越々は先般大病後、鵠沼に靜養中の處、今や殆んど全快せしを以て今日鈍翁の招きに應じて態々登山したる由にて、頻りに對岸の飛瀑を賞玩し居るにぞ、余は先づ此小亭中を見廻せしに、二疊敷の板縁の上に例のほどろぎと云へる敷物を敷き、呂宋産と覺しき大佗花瓶を藤蔓にて壁上に釣り、今を盛りと咲き出でたる紫色の葛の花を生け、其傍に何人の筆なるか墨繪の鹿一疋を描きたるに、蓮月尼の讚ある一軸を掛けられしが其歌は、

旅衣うすひの嶽の秋風に

鹿さへ鳴きてえこそ寝られね

とあり、大木の空洞を利用したる白形椅子を粗造なる杉木地テーブルの周圍に環列して、此處にピクニック的辨當を開かれしが、會津製の春慶塗辨當箱の中には、茶飯の三角握飯あり、魚の干物に野菜を添へ、魔法瓶に仕込み來りたる豆腐汁を辨當箱蓋につき分けたる御馳走は、太牢の盛饌にも優りて、近來有難き珍味と覺えしが、寄せ葛に砂糖黄粉の菓子など、山家の風情を味はしむる主人の趣向は例に依りて感服の外なかりき。

三

函根水門野の小亭にて、今しもピクニックの御馳走相濟みたる余等に、茶箱を以て薄茶一服參らせん、其間先づ此地所内を巡覽すべしとて鈍翁自ら案内を爲し、早川に沿

ひて次第に上流の方に歩行すれば、彼の小亭より數十歩にして小高き丘上に萱葺の
 一構あるを唯識庵と云ひ、今日薄茶は此處にて振舞ふべしとのことに就き、其一覽は
 後刻に譲りて此庵前を通り過ぎ、更に數十歩すれば懸崖の下に穴居人の棲みたらん
 が如き岩窟あり、其中に石佛などを並べ置きたるは無論新主人の物數奇なるべし、此
 岩窟の附近に又々白糸の瀧が涿々の響きを傳へ、更に河岸の方を覗けば、此頃岩石の
 下より硫黄の附着したる小石を發見せしに、ぞ此邊を掘りたらば、或は温泉など噴出
 するやも知れずとて、今日は其試掘に着手し、技師らしき一人が頻に河岸を檢索し居
 りしが、若し此處に新温泉を發見する事を得ば、箱根七湯は忽ち一湯を加ふべきが故
 に、余は箱根の山神が水門野の新主人に殊寵を垂れ給ひて、其目的を達せしめん事を
 餘所ながら祈願に堪へざるなり、扱て此邊より猶上流に進むに隨ひ、河岸の益高く
 成行たる其の突端に、粗造なる見晴らしの小亭あり、其中より環望すれば、川の上流下
 流を一眸に收めて、深秋紅葉の頃など、紅樹白浪相映射する奇觀如何ばかりなるべき
 やと、人をして忽ち再游の念を抱かしめぬ、是れより元來し道に踵を回して、彼の唯識
 庵の前面に來り、先づ其正面を見上ぐれば、萱葺屋根に破風を見せて、其簷下に腰掛を
 取り、庵内に入れば、土間の周圍三方に腰掛を置き、正面に三尺四方の板敷を設けて、其
 片隅に丸爐を切り、亭主は此板敷の手前なる一疊敷の上に座して、點茶するの趣向に
 して、其一疊敷の片隅に水屋棚あり、又彼の丸爐を切りたる板敷の左手壁内に出窓様
 の壁床あり、當日は此床に細川三齋と澤庵和尚と問答の一軸を掛られしが、庵室は總
 體頑丈造りにして、天井は太き荒木を組合せたる屋根裏を見せ、亭主の座したる後に
 は三疊敷の納戸ありて、其傍に小さき臺所が附屬し居れり、元此一棟は品川御殿山
 益田氏邸内の南手崖下に一色七五郎と云へる、彙駝師が築造したる者にして、彼れは
 此一棟内に起臥して自ら足れりとし、固より一種の奇人にて、強羅公園を經營したる
 も此人なり、常に深山植物を採集する事を好み、鈍翁が茶事の際、珍花の採擇は毎度此
 一色の手を借られし程なりしが、昨年流行感冒に罹り、強羅に於て病歿せしを以て、鈍
 翁は彼の遺物たる一色庵を品川御殿山より此水門野に移し、一色の文字が餘りに無
 意味なりとて、音便に因りて之を唯識庵と命名したりとなり。

四

益田鈍翁が箱根唯識庵の壁床に掛けたる一軸は、細川三齋が澤庵和尚に宛て、
留守をつかひ人もなきまの我宿へ

君きたらばと思ふ何事

と一首を認め、下に越中宛名を澤庵和尚几下として送りたるに、澤庵和尚は右手翰の越
中と云ふ名書の上に上又自名の上に下の字を加へて、

留守をつかひ人もなきやのつれづれを

いかにすらんと思ふ何事

と返歌を認めたる者にして、何とやら禪宗問答らしく容易に其消息を解する能はざ
れども、水門野の唯識庵には又なく適當の掛物なりき、斯くて丸爐に掛けたるは故三
井松籟翁が小田原益田家別業掃雲臺中に經營したる心曠亭と云へる新庵附屬の新
釜にして、釜の中央より半分仕切り、一方にては湯を沸し、他方にては酒の燗を爲す
様造りたる佗趣向面白く、胴に心曠亭の文字あり、茶箱は黒草地に秋草模様蒔繪にて、

其中に仕組まれたる茶器及び席上使用の雜器は左の如し。

茶入 宗和好み朱塗 蓋輪違蒔繪

茶碗 鈍阿焼銘水門野

替茶碗 空中在銘 信樂土筒

茶杓 象牙芋の葉形

香合 蒔繪菱形

建水 鈍阿焼

蓋置 枯竹引切

以上茶箱器具中鈍阿焼銘水門野は平茶碗にして、玉蜀黍色に赭味を帯び、高臺は輪形
にて光悦作を見るが如く、近來見受けざる名作なれば、余は激賞の餘り此茶碗に相當
する杉箱を作り、鈍翁自ら其銘を書附け置かば、後年一廉の名物たるべしと言ひ出で
ぬ、扱て茶碗にて濃茶一服頂戴し終れば、主客皆是れ旅の人なり、此上此處に留るべき
に非ざれば、三人相携へて唯識庵を立出て、例の九折坂を登りて往來に面する平地に
出れば、先刻より建て初めたる新茶店は早や棟上が出來上りて、晚秋紅葉の頃までに
は大抵落成す可き様子なりき、此茶店の庭前には清泉滾々と噴出して、旅客の渴を癒
やすに足るのみならず、前山及び早川の眺望他に比類なき勝地なれば、京都の平八茶
屋に倣ひ、此處に相當の茶屋守を置き、麥飯蕨薯汁を賣出さしめば、箱根七湯の浴客が

半日の清遊を爲すに好適の一名所たるべしと、余は意地汚き一案を提出し置きしが、鈍翁が果して之を採用するや否やを知らず、最初此地に着せしより入口の噴泉懸崖の瀑布、前面の早川、對岸の大瀧、境内到處、悉く是れ水ならざるなきは、水門野の名真に其實に背かざる者と謂ふべし、因つて余は

前に流れうしろに瀧の音たかみ

浮世のさがも聞えざりけり

と即吟一首を呈して、山の中半日の清娛を與へられたる好意を謝し、自動車にて余を俵石閣まで送り來られたる鈍翁と分袖せり。

藪内家重寶

(大正九年九月二十五日)

京都藪内紹知宗匠家は藪内大納言實藤より出づ、實藤の子右中將公秋の子に宗把と云ひし者あり、有名なる西三條實隆の甥にして、夙に茶事風流を好み、東山義政の殊寵

を得て當時の名流珠光宗祇等と其名を齊しうしけるが、藪内家に於ては此宗把を以て遠祖と爲す由なり、宗把子なく、此一代の大宗匠家も一時繼嗣を絶ち居りしが、其後岐阜の産にして藪劍仲と云へる若者あり、京師に出で、茶儀を千利休に學び、大徳寺の春屋國師に參して大に得る所あり、天晴一流の宗匠たるべき器量を具へけるが、其姓を藪と云ひ、藪内氏と宿世の因縁あるが如くなるを以て、遂に同家を相續する事と爲り、利休の媒酌を以て、其七哲の一人古田織部の娘を娶り、更に藪中齋と稱して當時宗匠家の列に加はりしに、程なく豊太閤の寵遇を蒙りて、聚樂邸の一部に住居する事を許され、珠光好みの茶席燕庵に居りしに依り、此頃より燕庵主人と稱せしが、寛永四年五月七日九十二歳の長壽を以て、易簣せり、藪内家祖劍仲紹知は斯の如く長壽の人なりしを以て、家督を其子の眞翁に譲りたるは、翁が五十歳の時なりき、是れより藪内家主人は五十歳を以て家を繼ぎ、其時より紹知と稱するを定例とし、嫡子と雖も五十に達せずして歿したる者は之を一代に加へざるが故に、自然長壽にして學徳老成したる者に非ざれば、同家の宗匠たる能はず、随つて宗匠一代の年數割合に長く、現宗匠

紹知氏の如き當年五十六歳にして、家祖劍中より第十二代目なりと云ふ、藪内家の家制已に斯くの如くなるを以て、歴代中に名宗匠多く、二代眞翁は燕庵を聚樂邸内より現住所に移し、家礎を確立したる人にして最も名高く、其子劍翁も亦當家三代の名を辱しめず、而空又は不住齋と號し、後竹心と改めたる五代竹陰宗堅、比老齋と稱したる六代、七代の西洞桂隱齋竹翁、八代の眞々齋竹猗皆な好宗匠にして、諸茶器を好み、箱書附を爲し、門弟を誘掖して、斯道に貢獻せし事尠しとせず、殊に比老齋の如きは最も傑出したる宗匠にして、其遺作遺墨が今日大に關西茶人に珍重せらるゝは決して偶然に非ざるなり。

二

藪内家は前記の如く足利時代に於て已に一方の宗匠家たりしを以て、遠祖宗把が東山義政より拜領の什寶數々あり、其後家祖紹知が豊大閣大和納言秀長等より拜領したる茶器若くは當時の名流宗匠と往復の文書等を持ち傳へ、元治年間兵火に罹りて住宅は全焼したりと雖も、寶藏は幸に焼け残りたるを以て、家寶は其儘に相續し、

維新後滄桑變革の際にも亦能く其散逸を防ぎ、當家の衣鉢とも見るべき歴史の什寶の大半今日に現存するは、畢竟祖先の遺烈に由るべしと雖も、歴代宗匠の志操堅實、殉道の美德に富みたるが爲ならずんばあらず、而して此等家寶中には勿論我が大正名器鑑に収録すべき名器尠からざるが故に、去る五月余が關西名器を巡覽するの際、右一覽の事を藪内家に申入れしに、同家にては折柄茶席修繕中にて、茶禮を以て余等を接待する能はず、宗匠家が其傳家の茶器を人に示すに、茶室の外に於てするは家法違ふ所あり、就ては折角の御所望なれども此度は貴需に應ずる事能はざれば、重ねてに御入浴の際一會相催して家寶を御覽に供すべしと言はるゝにぞ、流石は藪内家の言分なり、宗匠家が其所藏名器に對する觀念は如何にも爾あるべき事ならんと思ひければ、此上には強ひても請はず、後日更に一覽の機會あるべしと待ち受け居りしに、現宗匠紹知氏の令弟拙庵君は、豁達洒脱の人にして細故に拘々たらず、吹田に住居して廣く關西に茶弟を有するのみならず、洋服姿にて時に東京に現はれ、三井諸家の依頼に應じて庭園茶室の構造を指圖するなど一風變りたる宗匠なれば、先般三井守之助

君の邸にて同家の名器拜見の際、拙庵君の來會したるを幸ひ、藪内家の重寶一覽の事を依頼せしに、守之助君も亦同家寶を一覽せんとするの希望あり、九月二十五日入浴の序を以て之を果さんとすれば、同時に參觀しては如何と云ふ、是に於て余は此機逸す可らずと思ひ、名器鑑編輯員及び寫真師一行四名、二十四日午前八時東京驛發、同夕入浴、澤文旅館に投宿し、二十五日午前九時より年來の宿願たる藪内家寶檢覽の希望を果す事を得たる次第なるが、同家現宗匠紹知氏は温厚恭謙の君子人にして、世に云ふ發展家の類に非ざれば、從來同家の名譽ある事歴にして世間に紹介せられざる者少からず、乃ち今度檢覽したる名器と共に當日見聞の概況を記して、京都の名家藪内案内の一端と爲す可きなり。

三

九月二十五日午前九時、西洞院花屋町藪内家を訪問すれば、來々堂服部七兵衛當日のお手傳役として出て迎へ、先づ余等を寄附六疊の間に案内しければ、罷り通りて其床を見るに、可翁筆と覺しき墨畫、達磨の堅幅に春浦の讚は左の如し。

西來無意非老

誰坐生輝碧睡

這麼狐精變體

藏身入畫圖中

春浦拜讀

此一室には、凹字形に敷き詰めたる絨緞の上に程宜く煙草盆を置き並べ、拙庵君先づ出て、挨拶の後、現宗匠紹知氏を余等に引合されけるが、紹知宗匠は極めて恭謹の態度を以て、當家傳來の茶器は先祖が諸家より貰ひ受けたる者のみにて、御目に留るべき程の名器を所持せざれども、御便宜を謀りて、悉く廣間に陳列し置きたれば、緩々御尊覽下さるべしと云ふ、因つて直に其廣間に打通れば、是れは本派本願寺第十八世文如上人の居間なりしを、元治の火災後當家が現住を新築する折、本願寺より寄贈せられたる者の由にて、十二疊の廣座敷に輯熙堂と云へる匾額あり、而して其九尺床には阿佛坊が紀貫之の『ふるうたたてまつりしときのもくろくのそのなかうた』と云へるを書き列ぬたる末に、烏丸光廣卿が紙中極を爲したる一軸を掛られしが、是れは光廣卿が當家家祖劍仲の所藏したる俊成卿懷紙を所望して、其代りは古天猫釜と此一軸とを贈られたる者の由にて、末尾に紙を接足して光廣卿自ら左の如く書附けらる。

阿佛坊筆痕也、これを藪内紹知につかはすとて其名を、

ほとをやふ野うちなかめて心はせ

うちにうこかすうめの木のもと

即ち歌一首中に『やふ野うちせうち』の名を詠み込まれたる者にて、當時光廣卿が所望したる俊成の懐紙も定めて結構なりしならんが、此一軸も亦頗る珍しき者なり、斯くて此一軸の前なる長角卓の上には、豊公より拜領の鼈蓋天目を唐物黒塗百足臺に載せ、琉球朱塗金蒔繪臺に載せたる劍仲所持建蓋天目と二つ置並べて飾られしが、座敷の三方に毛氈を敷廻して、其上に陳列されたる名物茶入茶碗は實に左の如くなりき。

一天下一丸壺

東山義政より宗把拜領

一八重櫻肩衝

家祖劍仲奈良にて發見

一藤四郎肩衝

利休より傳來

一繪唐津筒茶碗

豊公より拜領

一眞熊川茶碗

大和大納言秀長より拜領

一萩焼割高臺

古田織部より傳來

一志野織部筒茶碗

一伊賀茶碗

劍仲好み

一井戸脇茶碗

二代眞翁の三男紹春より寄贈

四

藪内家の輯熙堂に陳列されたる前記名器を一々説明せんとすれば、殆んど際限なきが故に、今其重立ちたる者に就きて略説せんに、天下一丸壺は元足利義滿所持にて、藪内家の遠祖宗把が東山義政公より拜領したる唐物茶入にして、紫釉地に黒餉色の景色美事に現はれ、時代古く作行精妙にして、天下第一の名空しからず、而して之に附屬する四方盆は、三好實休より遠祖宗把に傳來したる者にして、松の木に溜色漆の掛りたる其古色の高雅なる得も言はれず、世に之を松の木盆の本歌と稱すとかや、此茶入は古來最も高名なるに依り、其袋は豊太閤、細川玄旨、千利休等より贈られたる古裂を以て作られ、天正時代の多數寄者が寄合ひて、各其丹精を凝らしたる者なれば、嘗に

當家の重寶たるのみならず、我日本に茶史に大關係ある國寶と謂ふべきなり、次に八重櫻肩衝は藤四郎作にて、柿色地に黒釉の景色光澤麗しく、大型にして盆附近に轆轤深く三段に廻りたる作行一種異様の茶入なるが、是は劍仲が奈良にて發見せし後、太閤が八重櫻と命名して細川幽齋に其箱書附を爲さしめければ、忽ち高名なる名物とは爲りぬ、是より先太閤秘藏の茶入に檜柴と云へる者あり、之に附屬せし唐物木地彫内角形朱塗盆を、或る時他の盆と取換て其盆を利休に賜はりしが、檜柴も奈良に縁故あり、八重櫻も亦同様なればとて、利休は之を劍仲に與へ、八重櫻肩衝に附屬せしめしに、檜柴は大阪落城の節焼失して嘗て之に附屬したる唐物盆のみ、今猶藪内家に現存するは誠に不思議の因縁といふべく、名器の存滅無常轉變なるを知るべきなり、又劍仲が此八重櫻肩衝を發見したる時、其祝として大和、大納言秀長より拜領したる眞熊川茶碗は、此種茶碗中の絶品にして、高臺廻りの作行一段優れたる者なれば、藪内家に於ては八重櫻肩衝茶入を用ふる時必ず此眞熊川を取合すを定例と爲せりと云ふ、又繪唐津、菊桐模樣茶碗は、豊太閤が文祿征韓の役、肥前名護屋在城中唐津窯にて之を焼かせて、歸陣の際土産として、劍仲に賜はりたる者にして、墨畫の菊桐模樣粗雜の中に大に雅味あり、是れ亦歴史的名物と稱すべき者ならん、伊賀茶碗は劍仲が伊賀窯にて焼かせたる者にて、高臺脇に『藪内あつらへ』の彫銘あるは如何にも無造作にして面白く、其口縁の一方に張出したるは後世おしやべりなど云ふ茶碗の形に似て、固より尋常人の好みとは見えざりけり。

五

藪内家傳來の茶入茶碗の説明は大略前記の如くなるが、當日拙庵宗匠は特に余の爲めに、大阪天満の井上平兵衛氏所藏、伊羅保茶碗近衛豫樂院銘池水と云へるを借受け來りて、同席に展陳せられけり、是れは彼の片身替の手にて、内部の白釉一刷毛頗る美事に、高臺邊の作行手強くして、此種の茶碗中有數の名品と見受られ、お蔭を以て今日坐ながら一名器を檢覽する事を得たるは誠に望外の幸なり、斯くて數々の名器拜見に時移り正午近くに爲りける頃、三井守之助君は山澄宗澄老を同伴して來會、一應陳列の名器を歴覽ありければ、藪内家に於ては元の寄附の間に於て辨當式午餐の

饗應あり、續いて備前小服茶碗を以て薄茶を點出されけるが、當家には前記茶入茶碗の外に、東山義政、豐太閤、千利休等より傳來の名器若くは文書等數々あり、本日は茶入茶碗の拜見を主旨としたれば、其他に及ぶを得ざりしかども、序を以て豫て聞及びたる利休の木像及び其末期の文等の一覽をと三井君より申入れられしに、何がさて珍客の懇望とて、宗匠も直ちに承諾あり、拙庵君案内役と爲りて、緝熙堂より廊下傳ひに六疊敷許りの佛間に導かれけるが、其正面の佛壇上段に飾られたるは、寛文の頃法譽最も盛んなりし盤珪禪師の念持佛木彫觀音にして、尺にも足らぬ小佛體なり、佛壇稍暗くして、定かに之を拜する事能はざりしが、極めて精巧の作なるを見れば、必ず由緒ある尊像なるべし、而して其下段に安置せられたるは、高さ一尺許りの木彫達磨像にして、玉眼白く輝き丸々として、福々しき相貌中、自然に侵す可らざる威嚴を具へたるは、固より凡作に非ざるべし、聞く所に據れば、是は建仁寺開山榮西禪師が宋より持ち歸られたる者にして、藪内家五代の宗匠不住齋竹心の實兄たる、竺和尚が建仁寺住職中同寺より藪内家に贈られたる者にして、開山禪師の請來せし達磨像なれば、建仁寺住職たる者は、一度藪内家に來りて之を禮拜するを例とすと云ふ、而して此觀音達磨兩像に向つて右に利休、左に劍仲の小木像あり、其利休像に就ては極めて感興ある傳説あれば、次に之を説明すべし。

六

藪内家の佛壇に飾られたる利休、劍仲兩居士の木像は、高さ五六寸許りの小型にして、双方同時に作られたる者と覺しく、而して兩居士共に五十前後の年輩なるが、劍仲の方は明哲身を保ちて、九十二歳の長壽を享けたる其人らしく、容儀端正なる中に、福徳圓滿の相好あり、之れに反して、利休の方は眉目清秀なる中に、思ひ做しにや剛直の氣外に現はれて、所謂劍難の相とも見るべき者あるは、兩居士の運命を其面貌に暗示したる作者苦心の存する所なるべし、蓋し此像は藪内二代眞翁時代の製作と覺しく、兩居士の時代を距る事程遠からざれば、註文者も製作者も共に兩居士の面貌を熟知する者なるべく、隨つて現存兩居士像中最も其の眞に近き者なるべし、而して利休の方は角形の廣き黒頭巾を冠り、其黒頭巾は無論木製にして、取外し自在なる者なるが、其

裏面に張附けたる白羽二重の袋の中には、利休の遺髪が納まり居れりとなり、劍仲と利休とは生前師弟の關係あるのみならず、其懇親骨肉も嘗ならざる間柄なれば、自然其の遺髪をも相傳せし者なるべく、利休宗の信徒に對しては、佛教家の佛骨にも譲らざる靈的遺品にして、之を納めたる木像は言ふまでもなく、天下一品にして、斯界の本尊たるべき者ならん、抑も利休が太閤の勘氣を蒙り、天正十八年十一月二十七日謹愼を命ぜられてより、翌十九年正月十三日には、堺に於て塾居申渡され、同二月二十六日には、京都葭屋町の宅まで召出され、越えて廿八日切腹仰付けられしまでの内情に就いては、古來揣摩臆測の説多くして、今日に至るまで其真相を知るに由なし、或は利休が我慢増長して、上司の許しを請はず、其木像を大徳寺の山門樓上に安置したるが、太閤の激怒を買ひたるなりと云ひ、或は小説的消息を傳へて、利休の女が萬代屋に嫁して、夫に後れ、其實家に歸り居たるを、太閤が召し寄せんとして、果さざりしを以てなりと云ひ、或は太閤が利休に命じて、徳川家康を毒殺せんとせしに、彼が其命に應ぜざりしを以て、他の理由を以て、彼を自滅せしめたりとも云ひ、當時太閤の無慈悲に對して、内々反感を激したる其結果として、彼の人格を傷くるが如き傳説を流布するに至りたれども、利休門下には有力なる諸大名多かりしが、故に、眇たる一茶博士なるにも拘らず、陰然政機勢力に關聯する所ありて、遂に彼れが如き奇禍を招きたる者なるべし、左れば居士が始めて、譴責を蒙りてより、其切腹を命ぜらるゝまで、約三ヶ月の間に於て、知友門弟等が大に居士に同情を寄せ、太閤の寛典を乞はんとして、内々如何に奔走盡力する所ありしやは、今より之を想察するに難からざるなり。

七

藪内家實に利休の文掛物二幅あり、一を末期の文と云ひ、一をうらやましの文と云ふ、其うらやましの文と云へるは、利休より劍仲に送りたる者にして、其文左の如し、
 御札本望に候、誠に取亂し、茶不申、今午古田殿申候、間晚及候、て御出可被下候、一服可申、あらかきのとくいそかはしき、湯にても茶にても無之、うき世のすきはひ斗に候、貴所の御すまゐうらやましくかしく。

藪中齋

此文は利休が如何なる折に劍仲に送りたる者なるやを知らざれども、蓋し晩年運命の悪魔に呪はれて、煩悶の間に日を送りたる折柄、劍仲が明哲身を保ちて静かに爐邊の松風を聞き、晏然として風流三昧に入りつゝある生涯を羨みたる者の如し、左れば後年茶道の數寄者が當時利休の心中を推察して之を三十一文字に述べたる者あり、即ち藪内三代劍溪紹知の書き置かれたる一軸に左の如き者あり。

利休文のうちにあらいそかはしきのとくや、湯にても茶にても無之、うき世のすきはひ斗に候、

此文章を

忠次

おもへともあみのうき繩それならて

世にひかるゝや心なるらむ

同じ心を

宗甫

かくそとはおもひしれとも世にふれば

心に身をはえこそまかせね

扱末期の文なる者は一にさてもくの文とも云ひ、其中に難讀の箇所あり、又他聞を憚りて明白に事實を書き盡さざるが爲め、了解に苦む所あれども、其原文は左の如し。

一 忠様御札請取申候、忠御心底奉察候、忠公へ御いとまこひ不申候事、我等も〇〇申候、乍去御取合過分實儀先づ以て目出度候。

一 内府様事〇わたくしのなき旨、拙子は別にほすまで参らせ候、扱もくく。

一 皆々明日奉期面上かしく。

此文の末尾に接ぎ足して左の記事あり。
利休は不幸にして秀吉公御旨にたかひ候ふを、上々様御あはれみ御とりなし候ふを、感心ありて、幽齋翁へ参らせ候ふを、末期の文とも申候。

内府様は 家康公

忠様は 秀忠公

此文さき破れたるをつゝりたて侍るなり。
右掛物箱の蓋裏に左の書附あり。

此文細川玄旨法印への返書なる玄旨翁より古紹智へたまはりたるをつぎ合せて軸を附たるなり。

藪内紹智家傳一軸也

二代目眞翁の筆

八

前記利休末期の文一名扱もくの文は難解の處あれども藪内二代目眞翁の書附に依れば利休が太閤の勘氣を蒙りたるを徳川家康秀忠二公が氣の毒に思ひ之を救解せんとして内々盡力せられたる心入を有り難がり細川幽齋に其心中を内報したる文なりと云ふ利休が大閤の激怒に觸れたる其内情として徳川家康を毒殺すべき内命を拒みたるが爲めなりなど云ふ臆説の傳はりたるは當時家康父子が利休に對して大に同情を寄せたる其事實を揣摩したる者なるべく太閤が蒲生氏郷を毒殺したりと云ふ傳説と同様地下の太閤に對して甚だ氣の毒の感なきを得ず左れば當時豊臣方と云はず徳川方と云はず歴々諸大名中に利休の門弟多くして此等門弟が彼の一命を取留めんとして陰に陽に必死の盡力を爲したるや疑ひを容れず乃ち當時太

閤に對して最も勢力ありたる家康父子が利休救助に就き太閤への執成を懇請せられたるは誠に當然の成行なるが如し唯茲に不思議なるは内府様事云々の文句にて此文の末尾に書き添へたる註釋には内府様は家康公とあれども利休の死を賜はりたるは天正十九年二月にして徳川家康が内大臣に任じたるは慶長元年五月なれば當時利休が家康を内府様と稱すべき筈なし尤も歴史上には往々斯かる疑惑を生ずる事あれば是れは更に考證して他日其事實を明解する事あるべし左るにても利休の遺物が其血縁ある表裏千家に少くして却つて多く藪内家に傳存するは千家には種々の事故ありて傳來品の散逸せし場合多きに反して藪内家は代々堅實に其箕裘を守り滄桑變革の際と雖も泰然不動の態度を持続したるが爲めならん是れ彼の利休をして貴所の御すまゐうらやましく候と感歎せしめたる所以にして畢竟家祖劍仲が明哲保身の流風遺烈と謂ふ可きなり。

九

前記利休文掛物二幅を熟覽し終るや拙庵君は露地及び茶席を巡覽すべく庭前に下

り立ちて、先づ利休好み雲脚庵に案内せられけるが、是れは三疊臺目の片隅を斜に切りたるものにて、一風變りたる庵室なるが、藪内家にては茶事の際多くは之を寄附に使用するを例とすと云ふ、元治火災の節、利休筆雲脚二字の木造匾額のみ焼け残りたるは不幸中の幸にて、少しく歪みたる瓢箪形に雲脚の二字を、筆太に認めたる其筆勢剛健にして、利休が斯くまで大字を善くしたるを、今日初めて實見して驚嘆禁ずる能はざりき、扱て此雲脚庵の前に横はる一構は、建築用の残木を以て作りたる腰掛にて、之を寄木の腰掛と稱する由、正客と相客との座所を向ひ合ひに引離して、其中間を通行するやうの構造にして、右正客席の簷端に吊りたる鍍金燈籠は、石川出雲守數正が熱田神社に奉納したる年月日の彫銘あり、大型にして極めて美事なる者なるが、日本全國に於て石燈籠は春日、金燈籠は熱田と稱せらるゝ、其數多き熱田の金燈籠中に、是れが最も名作の燈籠なりと云ふ、此腰掛の正面には、東山義政より遠祖宗把に賜はりたる、雪の朝と云へる銘ある石燈籠あり、蹲踞石の前石は、根府川石にて、小袖三枚に換へたる者なりとて、之れを三小袖石と稱する由、腰掛前より梅見門を潜りて、燕庵前の露地に出づれば、此處には利休の寄石燈籠と云ふ者あり、又古田織部の名残を留むる織部井戸と云ふ丸石井戸側の古色蒼然たる者あり、當邸は古田織部の京屋敷なれば、織部自刃後其婿なる劍仲が之を譲受けたる者と覺しく、面積六百餘坪ありと云ふ、其中央に例の茶席燕庵あり、萱葺屋根にて、其形が燕の翼を張りたるが如くなるに因りて、此名ありと云ふ、元と聚樂邸の附近に在りしを、二代眞翁時代に當邸まで移轉したる由なるが、當時本願寺の良如上人が、宗祖四百回忌を修めんとて、祖殿建築中諸國より多數の人夫が集まり居りしを以て、燕庵の四方に棒を通して有形の儘にて、當邸まで擔ぎ來りたりと云ふ、惜いかな其舊燕庵は、珠光自筆の匾額と、天窗の障子一枚だけを殘して、元治の火災に焼失せしにぞ、舊形に據りて、火災後新に建築せしが、今は早や五十餘年を経て、再び舊茶席とぞ爲りたりける、此茶席の前には、文覺上人の塚石たりし五輪を彫りて作りたる蹲踞石あり、其前なる織部好みの燈籠は、其棹が六角にて世間に有り觸れたる織部型とは異りたる者なるが、是れは織部より當家に傳來したる者なりと云ふ。

十

藪内家に於て古來有名なる茶席燕庵は、其昔し珠光が京都市中に於て醒ケ井と云へる名水を發見し、此水最も點茶に適せりとて其井戸の傍に結びたる庵室が即ち是なりと云ふ、藪内家六代比老齋が寛政年間醒ケ井の邊に建てんとて撰みたる碑文は、最も能く其事實を證し居るが故に今左に之を掲載すべし。

佐女牛井

古傳井底有盤、湧水溢欄、僧珠光愛其甘冽、結廬井傍、手書燕庵二字、而扁焉、當時東山源公屢臨其居、同嗜此水、稱洛下無双、後經百餘歲、元和中織田有樂翁嘆其廢而修飾之、又至天明殆經二百霜、況遇火災、園木已灰、井亦荒圯、水脈變退、無復有罨沸之勢、一二同志相謀營作、而今有樂翁之遺物、只存中欄而已、聊記歲月、且銘曰

鳴者以德

井以茶鳴

千古無渴

每汲每薰

寛政庚戌秋八月

平安竹陰藪宗堅撰竝書

藪内家に在る右碑文石摺掛物の巻返しに左の書附あり。

此碑銘、嘉永二己酉年、比老齋五十回忌、竹倚發起而建焉、于時七月三日落成、右碑文に據れば、燕庵の匾額は珠光自筆との事なるが、燕の字は行體、庵の字は八分體にして、古材の横長き額面に彫たる文字に白き胡粉を施したるが、時代を経て其古色得も言はれず、又此庵の天窓障子は火災の際何人か之を提出して焼失を免れたるに依り、舊庵の形見として今も之を使用し居れりとなり、燕庵は三疊臺目片隅に二枚引の仕切ありて、之を取外せば更に一疊を増す者なるが、此一疊は或は貴賓の來りたる時供人の控へ居るが爲に設けたる者なるやも知れず、床柱は栗のナグリにして、之を前田利家の眠柱と稱するは、利家が參庵の節、此柱に倚りて居眠したりと云ふ口碑あるが爲めならん、燕庵を出て、其傍より元の緝熙堂の庭前に復れば、此處に西大寺の古伽藍蹲踞石あり、是れ亦古色愛すべき者なるが、彼の文覺上人の五輪蹲踞石に就き更に拙庵君に問ひしに、上人の石塔は元當邸より程遠からぬ處に在りしを何時の頃にか取崩して臺石は西本願寺に於て四角の蹲踞石と爲り、中央の五輪は燕庵附屬の圓形蹲踞石と爲り、今は其遺趾に文覺町の名を存するのみなるが、上人は蓋し此邊に

住せし事ありしならんと云ふ、兎に角、藪内家の庭園は歴史的名石を以て飾られ、一步一顧茶味津々たる者あり、平安古都中に在りても他に比類なき名蹟と謂ふ可きなり。

十一

藪内家は西本願寺と密接の關係あり、第十二世良如上人の時より同寺法主は藪内家を茶事の師範役と爲し、同第十四代寂如は不世出の英才にして、傍風流韻事を好みたるを以て、最も厚く藪内家を眷顧せり、本來東西本願寺は六條の十丁四方を其境内と定め、他宗の信者は此境内に居住する能はざる規定なりしが、藪内家は無論禪宗を奉ぜしにも拘らず、二代眞翁時代に於て西洞院花屋町の現住、即ち古田織部の京屋敷に住居する事を許され、其頃より門主は藪内家に對して毎年清酒一樽、鹽鯿一本を贈るを例とし、最近大谷光尊伯時代迄多年此嘉例を繼續して渝らざりしと云ふ、左れば歴代上人中最も茶事を好まれたる者は、藪内家と殆んど通家の交りを爲し、同家の茶器を自由に取寄せて使用せられ、中には其儘本願寺に留置れし者さへありとなり、藪内家が斯く本願寺と親交を結びたるは、蓋し家祖劍仲の遺志にして、同家に對して最も賢明なる措置なりしが如し、余は九月廿五日、藪内家の重寶を拜見し終り、翌二十

日御影の村山龍平君を訪ひて、其所藏名器を一覽しけるが、村山君は藪内流にて最も能く同家の事情に通曉し居れば、談偶々藪内家對本願寺の關係に及びたる時、君の說到劍仲が當時深く本願寺と結びたるは大に意味あり、彼は親しく利休の悲惨なる最期を見、又古田織部の自刃を余儀なくせられたる末路に徴して、當時武門權勢の盛衰常なく長く相頼むに足らざるを知り、三界の教主たる本願寺と親密の關係を結びたる者ならん云々とありしは、大に我意を得たる者なり、後年三井家の先祖が子孫に戒めて、諸大名の金方たるを避けしめたる結果、維新の際大名貸し倒れの危険を免れたると一般、藪内家が本願寺と相始終して俗世の榮枯と其浮沈を共にせざりしは、能く其託する處を選びて禍機に接近せざりし先見の明ありと謂はざるを得ず、今日表裏千家其他各流家元家が盛衰一ならず、或は祖先の衣鉢とも觀るべき傳家の名器すら保存する事を得ざる境遇に陥りたる者、比々皆是れなる其中に在つて、藪内家が四百年間能く其家業を守り、祖先傳來の名器を保護して無事に今日まで持傳へたる所以

の者は、畢竟家祖の賢明なる措置と、歴代宗匠の能く家法を守りて遺緒を失墜せざるの致す所と謂はざる可からず、因つて余は今回藪内宗匠の令弟拙庵君の韓旋に依り、又紹知宗匠の寛厚なる待遇に依り、同家一部の名器を縦覽するの機会を得たるを幸ひ、當日所見の一端を叙して聊か之を同人に紹介する者なり。

追記

本文時事新報に掲載の後、徳富蘇峰君より寄せられたる一書に、利休末期の文中忠様とあるは細川忠興なるべし、又内府様の家康に非ざるは貴説の通りにて、當時家康は江戸大納言と申候云々とあり、藪内家の記録には忠様を徳川秀忠と註釋しあれども、如何様是れは忠興の方然るべく、夫れにて此末期の文が細川幽齋に宛てたる者なる事愈々分明と爲るべし、又内府様と云ふに就き公卿叙任を取調べしに織田信雄が天正十八年内大臣を罷め豊臣秀次が其後を襲ぎたるは翌十九年末にして、利休自刃の頃は内大臣は缺位の儘なり、左れば利休の所謂内府様とは、内大臣辭任の後も慣習に依りて織田信雄を爾か云ひたる者か、他日傍證を得て之を究明すべき考なり。

大口寄人

(大正九年十月十三日)

上

御歌所寄人大口鯛二氏は、去八月十八日信州山田温泉風景館に避暑中、腦溢血に罹り一時危篤を傳へられしが、其後小康を得て長野病院に入院の由聞及びしに、病勢頓に革まり、十月十三日享年五十七を以て白玉樓中の人と爲りしは惜みても猶ほ餘りありと云ふべし、氏は名古屋の産にして、通稱鯛二の鯛の字を分けて周魚と云ひ、旅師又は多比之と稱し、家を白檣舎と號せり、和歌を伊東祐命翁に學び、後御歌所に入りて高崎正風翁に親炙し、最も翁の器重する所と爲る、和歌に堪能にして、勅題寄山祝の一首は當時入選の光榮を荷ひぬ、大抵和歌を善くする者は歌學に精しからざるを常とすれども、氏は博覽強記にして、其歌學に關する知識の古今を貫きて、廣汎なりし事、近世歌人中稀に見る所なりと云ふ、氏は斯く詠歌と歌學を兼ね併せたる其上に、書道に於ても自から一家を成し、平常最も行成風を好み、其源流を同じうするの故を以て殊に

近衛豫樂院の筆蹟を愛重せしが、其他遍なく古筆物を研究して鑑識凡に超え、歌人と
 して殆んど才學識の三長を兼ねたるは、近來其比類を見ざる所なり、氏は此外にも猶
 ほ能く風流趣味を解し、自ら茶會を催したる事はなき様なれども、茶客と爲りては巧
 妙なる辭令を以て、書畫器具を品評し、一會の趣向を觀察して之に對する臨機の挨拶
 を爲す、其客振りの殊勝なる事殆ど専門家を凌ぐ者あり、蓋し氏の先天的才能は此方
 面に向つて自然に發達し居りたる者なるべし、氏は全國に互りて和歌の門弟頗る多
 く、ちくさの花と云へる雜誌を通じて、間接直接に天下の歌學者を薰陶したる其數幾
 萬人なるを知らず、左れば近年御歌所勤務を辭して専ら門下の教導に任ぜんとせし
 に偶たま明治天皇御歌集編纂委員を命ぜられければ、孜孜として其力を盡し、先頃已
 に同編纂を終り、是れより昭憲皇太后御歌集の編纂に取掛らんとするに先だち、明年
 十年回到相當する高崎正風翁の歌集手寫を今年中に完成せんとし、七月頃より頻に
 習字を爲し、山田温泉に於て心靜かに同歌集を手書せんとて、八月十一日東京發彼の
 地に赴き、恰も一週間に溢血症に罹りて遂に起たず、年來の希望を達せずして忽然
 易篋せらしは、斯道の爲め終天の恨事にして一層哀惜の念を深うせざるを得ず。

中

大口氏は和歌に堪能にして、筆札に巧に又能く歌文並に書翰文に長ぜり、今夏余が伊
 香保滯在中、和歌に關して氏に質問したる書面に對して長文の返翰を送られしが、色
 替はり奉書卷紙に例の達筆を揮はれたる其書翰は、氏の絶筆ならざるまでも少くも
 最晩年の筆蹟と云ふべく、其文辭も亦歌學者に對する不朽の訓戒たるべき者なれば、
 今左に其一節を摘録すべし。

伊香保御避暑の由、清涼以何ばかりと想像せられ候、小生は汗とたゝかひて筆硯
 に從事致し居り候、

あつければ暑きまゝにぞ心地よき

此身のやまひいえはてぬらし

元氣可愛と御一笑可被下候、(中略)御歌は一題少くとも五首は御詠みありて、其第
 一首より第三首位までは捨鐘として御取除きの上、第四首第五首位の所を御示し

あらまほしく存じ候、題を得て先づ思ひ寄り給へる趣向は所謂歌臭きものにて、大方古人が言ひふるし、活潑々地の者少く候、此歌臭き趣向を吐き捨て、最早言ふべき種なしと云ふ場合に至りて、更に腦漿をしばり給は、初めて眞正の我物が現れ出で申すべく候、故に一題一首は昔より嫌ひ申候、何故に嫌ふかは古人未だ申さざりしかど、最初の思ひつきは有りふれたる者になりやすく候、まゝ趣向のつき果てたる後に更に趣向をめぐらすに依りて、段々思想を擴張する習慣を養ふ次第と爲り候、事を古人も知りて然か教へ置きしものなるべく候、蟬と云へばしぐるゝ、水鶏と云へばたゝくなど申す事は、先づ捨鐘の部分と御悟りあらまほしく候、歌はをさなかれと言ひし金言は、歌臭き形容を捨て、赤子の言の如く單刀直入なれとの意に外ならず候、此點は一夕膝ぐみにてお話し致し候、は、忽ち釋然たるべく候、云々。

八月一日

周魚

高橋老兄悟下

大口氏は行成様の筆蹟極めて美事なるが上に、離る達文にて千言立ろに成るの概あり、前掲書翰の如き兒童に物を教ふるが如く、丁寧親切に噛み砕きて諄々として倦まざるの一端を觀るべく、和歌の教師としても亦實に得がたき人物なりき。

下

大口寄人が一代に詠み出でられたる和歌中には感吟少からざるべし、其感吟を擧げて氏の歌想の如何に練達し居りしやを標示するは世間自ら其人あらん、且つ其歌集も早晚刊行せらるべければ、余は今敢て蛇足を添へざるべしと雖も、茲に是非共一言せざる可らざるは、氏が京都西本願寺に於て三十六人家集を發見したる事即ち是なり、抑も三十六人家集は、御堂關白道長の息女上東門院入内の節、當代の書家に命じて三十六歌人の家集を手書せしめたる者にして、其手蹟の美事なるは勿論、其臺紙表紙に唐紙、日本紙、砂子、切箔、圖畫模様あらん限りの美術的技巧を盡して調製したる者なれば、何れの點より見るも藤原時代の古筆代表的名物たり、明治廿九年八月の事かとよ、大口氏は西本願寺法主大谷光尊伯の依頼を受け、同寺の古文書類を整理せし事

ありしが、調査約一週間に亙りて僅かに藍紙萬葉の薄片を發見せしのみなれば、失望の餘り限なく倉庫中を搜索せしに、古ぼけたる小箱の中より、天下の至寶三十六人家集が光明赫耀として出現せしに、ぞ大口氏は夢かとはかりに打驚き、早速光尊伯に示して至寶の發見を祝し、其特許を得て一部を東京に持ち歸り、自宅に同好者を會して之を展示せられけるが、余は此古筆帖一覽の爲め氏の宅を訪ひて初めて氏と相識りしなり、斯くて此大發見ありてより、本願寺に於て其傳來を取調べしに、是は後奈良天皇御即位の際、當時王室式微の極、其費用を辨ずる能はざりしを、本願寺が見兼ねて獻金申出でければ、其御會釋として天皇より當時の門主證如上人に下賜せられたる者にして、女房奉書並に附屬の目錄あり、猶ほ證如上人の日記天文十八年正月の條に左の文言ありとなり。

二十日從禁裏、以女房奉書三十六人家集、令拜領、門跡經乘へ、以御書被仰越候、僧正事來二日以前、御申沙汰、有度之由、被仰候

右三十六人家集は古筆物として天下の至寶たるにも拘らず、久しく本願寺の庫中に埋没して何人も之に氣附かず、大口氏が之を發見せざりせば、或は如何に成り行きしやも知れざれば、此家集のあらん限り大口氏が發見の功は決して忘却せられざるべし、故に余は氏の長逝に際して一言之を表白し置くものなり。

大口寄人詠草

(大正九年十月三十日)

余は前掲大口寄人の記事中に、大口氏の和歌を品評する者は世間自ら其人あらん、且つ其遺稿も早晚刊行せらるべければ、今敢て蛇足を添へざるべしと斷り置きしが、先般氏の高足東胤徳君に面會の節、故人の詠草中其記憶に留まる者數首を回示せらるべく依頼し置きしに、此程約を履んで君より左の八首を回送せられければ、今之を左に掲げん。

春朝

窓の戸をあけはなちても寒からぬ

あしたとおもへは鶯のなく

月夜看花

ねむといふ子らをも庭にいさなひて

花のかけふむ春の夜の月

春雨

庭見れば松のかけまでぬれたれと

いまた音せぬ春の雨かな

合歡花

夕されはたちまちねふるねふの木は

しらてやあかすかゝる月夜を

早苗

みつしほにうかふ白帆のかけ見えて

いそ田のさなへ風わたるなり

松間の月

山松のかけふむみちのつゝらをり

をりく月つきにそむきけるかな

魚

いくそたひおしなかされて山川やまがはの

はやせを魚うをののほりゆくらむ

山家

あるものゝ外ほかにもとめぬ山やますみは

たよりあしともおもはさりけり

大おほ口くち氏しが生せい前ぜん詠よみ出いでたる和わ歌かは其その何なん萬まん首しゆなるやを知らざれども氏しは天てん才さい肌ひだにて興きように乗のりじて即そく座ざに數すう首しゆを詠よまれし事ことさへあれば近きん代だい歌か人じん中ちゆう詠よ草そう最さいも豊ほう富ふなる方かたなるべし古こ來らい歌か人じん中ちゆうには詠えい草そう萬まんを以もつて算かぞふ者ものあり古ふるきは家か隆りゆう卿きやうの歌うたが三さん萬まんに達たつせりと言いひ傳つたへられ徳とく川がは時じ代だいの歌か人じん中ちゆうには六む七しち萬まん首しゆ詠よみたりと云いふ者ものあり左されど專せん門もん歌か人じんは處しょ女にょ作さくの原げん稿こうを留とどめず洗せん練れんを重かまねたる者もののみを存ぞんするが故ゆゑに歌か集しゆとして出しゆつ

版する場合には其數一萬首を踰ゆる者極めて稀なるが如し、大口氏の如き其歌集成の日、果して幾何首を収録するや今より之を推知する能はざれども、其歌數の豊富なるべきは固より疑ひを容れざるなり而して前記八首の如き果して其代表的詠草なりや否やは余の判知する所に非ざれども、故人の清新流麗なる句調は、此片鱗に由りて略大體を窺ふ可しと思はるれば、茲に掲げて同人に示し、併せて之を寄送せられたる東君の好意を謝す。

小田原狙庵

(大正九年十一月八日)

狙庵は益田鈍翁が三井壽太郎男より贈られたる先考松籟翁の遺物二疊中板の茶席を、小田原の別業掃雲臺中に移築した者で、狙庵と云る新席の匾額は即ち壽太郎男の揮毫である、扱も狙庵とは不思議の名稱なれば先此庵名の由来より語らう、益田鈍翁秘藏の茶入に真中古野田手銘猿若と云ふ者がある、是れは小堀遠州の茶友澁紙庵清

水道閑が、仙臺侯の招聘に應じて奥州に下らんとする時、遠州が裂短冊に

と、めさる別れよ君の袖のうちに

わかたましひを入れてこそやれ

と云ふ一首の中に、さるわかと詠込みたる歌を認め其魂とも思ひ做したる者なりとて道閑に贖けしたる茶入であるが、贈りたる者も贈られたる者も皆一代の大茶人なれば、忽ち名高い名物と爲り、其後仙臺家に傳はり、更に松平周防守の手に入り、屢轉傳して數年前鈍翁の秘藏と爲つたのである、然るに今年申年なれば、鈍翁は必ず此茶入を使はるゝだろうと余は竊に待ち設けて居つた處、去る六月中鈍翁は御殿山幽月亭で遠州が扇面に澁紙庵の三字を題し、其傍に一首の歌を書附けた掛物を掛けて茶事を催されたので、テツキリ茶入は猿若を使はるゝよなと思つたのに反して、猿が一向顔を見せぬので余は聊か案外して之を亭主に問へば、亭主は即座の機轉にて、今月は六月なり、庚申の年はまだ六月餘つて居りますぞと言はれたから、余は一本参つた姿であるが、亭主の此一言は今年中に如何にしても猿若披露の一會を催さな

くてはならぬ事になつて、聊か自繩自縛の體であつた、余は此時猶ほ附加へて扱は今年
 の口切などに猿若を使はるゝ事ならんが、彼が如き名物茶入をお使ひなさるには、
 是非共此茶入の爲めに新庵室を造られずばなるまいと注意して置いたが、其後鈍翁
 は小田原掃雲臺に於て、果して一席を造らんと思ひ居る處に、三井壽太郎男より先考
 遺物の二疊中板茶室を贈られければ、是ぞ大佗の茶席にて、以何にも猿若に相應しく、
 故人の靈が指圖して態々我に贈られたるならんと、鈍翁は富士見町の三井邸より早
 速右茶室を小田原掃雲臺に移築し、猿若茶入披の庵室なれば、狙公の縁にて之を狙庵
 と名け、記念の爲め壽太郎男に其匾額の揮毫を乞はれたと云ふ事である。

二

狙庵開席茶事は十一月七日に始まつて十二月まで繼續したさうである、余は其開庵
 二日目の八日に參席したが、二疊中板の小間なれば、相客は三人で、野崎幻庵、益田紅艶、
 大阪の戸田音一であつた、小田原掃雲臺の入口を爪先上りに登り行けば、時代を経た
 る瓦葺の古門がある、此處で露地草履を穿き替へ、老人の爲に用意されたる竹杖を突

き、木立茂り水音幽かなる箱根八里的の石組長露地を辿り行けば、屋根に草蒸したる
 一構の小屋があつたが、是れが當日の寄附で、何人の筆にや休と云へる一字の額が其
 入口に掛けられ、土間に續く二疊敷の中に長爐を切り、杉皮葺に竹及び黒もじを棧に
 した屋根裡を見せて居たが、彼の長爐には煤竹の自在に光悦好み、葛屋形の釜を掛け、
 席上に緞通織を敷き、天然木の煙草盆に備前耳附火入を置き、茶盆には高臺寺焼新茶
 碗と、唐津躡り香煎入と竹の蓋置を取合せ、隅棚には時代竹製矢立を載せ、小色紙の
 上に布袋古銅文鎮を置いて、壁床に左の文句がある、遠州の文を掛けられた。

道閑 勘兵衛 本二郎

三十日

小遠州書判

右三衆明日御同道まち申候、如何にもゆるくと

竹筑州様

今日は遠州が道閑に贈つた猿若茶入披きの茶會であるのに、其寄附に遠州筆道閑名
 入の文を掛けられたのは、何たる適役であらう、夫れに附けても庵主が平常數寄道の

心掛深く、斯かる珍幅を所藏されたのに敬服せざるを得なかつた。斯くて程なく庵主が出迎はれたので、相客より推し出さるゝまゝ、余は正客を引受けて、此寄附より本席の方に歩み去れば、此處に柿茸船底形の屋根を頂いた小さき露地門があつて、遠州筆丸に立の一字ある額が掛けられてあつた。此門を入つて、狙庵の前に出づれば、掃雲臺の木の間より、送り落つる遣水は潺湲として人の心耳を澄ましめ、此流れの向側に半滑り落ちたるが如き蹲踞石があるのは、兩三日前庵主がヤツと箱根仙石原の水門野より移し來られた者で、水溜りが二段で、青竹の笈より傳はる水が一段より二段を経て、流れの中に注ぎ落つる其工合如何にも無理のない自然の趣を現はして居たが、余は之を一見した刹那に、此蹲踞石に田毎と云へる銘を附けたいと云ふ考へを起したのである。

三

小田原狙庵の入口には三井壽太郎男の筆に係る庵名匾額が掛けられたが、雅味ある筆蹟で眞に好く、此茶席に取合つたのは感服の至りである。扱て庵室に入りて其床を見れば、遠州藏帳の名物で、江月和尚が正月牡丹新吐薬の七字を達筆に認め、其傍に欠伸子書と云ふ落款を署した者を掛けられ、其文句は季節に不相應であつたが、同時代の茶人の作品を一席に集めやうと云ふ趣向と見れば別に無理とは思はれぬ。頓て庵主立出で、挨拶の後直に炭手前に取掛られたが、其器物は左の通りであつた。

- 古蘆屋縁口尾垂釜
- 明應三年正月廿八日
- 石阿彌とあり
- 炭斗
- 瓢、啐啄齋利休二百回
- 香合
- 交趾柘榴

- 羽帚
- 替鶴
- 灰器
- 梁川燒
- 灰七
- 銀小判形

- 五徳
- 興次郎
- 火箸
- 桑柄棒卷
- 銀
- 銀象眼入

蘆屋釜も固より結構であつたが、交趾柘榴の香合は大坂磯野氏舊藏で、其黄襷は一段美事であつた。又此席の中板は大徳寺五老松の枯木を挽割つた者で、同寺の烙印のあるのが奥床しく思はれた。斯くて炭手前が濟むや、黒半月形胡桃足附の膳に、遠州好みの絲目道惠作の椀を取合せて左の通り懷石を出された。

- 汁
- 三州味噌、大根、しめぢ
- 向附
- 志野四方、入平、鯛昆布、いり酒、岩茸、濱防風
- 椀
- 海老しんじよ、生湯皮、水前寺菜

- 燒物
- 鵝、海老芋
- 吸物
- 燕巢、土筆
- 八寸
- からすみ、百合根、革茸

小田原狙庵

強肴 唐津大猪口
越後産鮭の子

香物 小蕪、淺漬大根

酒器 粉引德利、刷毛目皿

菓子 黍饅頭

庵主が食物博士だけに懷石の結構は言ふまでもなく、食器も志野四方入平向附など頗る珍品であつたが、粉引德利は故あつて庵主が馬越化生翁の愛藏を分捕つた者で、天下粉引德利中屈指の名品たるに背かず、其大ききの頃合と云ひ、浸模様の面白さと云ひ、下戸も上戸も一度手に取れば容易に放す事の出来ない者で、舊持主化生翁も此茶會の客と爲らるゝであらうが、久方振りて此德利を見たらば定めて感慨無量であらう。

四

狙庵の腰掛は庵室に續いて建てられてあつた、合圖は磬で斯かる場所柄には相應しく聽き取られた、後座の床には遠州作銘女郎花と云へる二重切花入が掛けられて、名古屋地方より遠來の太郎庵と云ふ銘ある白椿が活けられ、斯くて庵主の濃茶手前があつたが、其器物は左の通りであつた。

茶入 野田手銘猿若
袋望月廣東

茶杓 津田宗及作共筒

茶碗 鳥の子手、遠州藏帳品

水指 南蠻繩簾

建水 本地曲

蓋置 青竹引切

茶 銘碧雲、松柏園詰

扱て濃茶器物の中で當日の主品は無論猿若茶入である、是れは二代藤四郎作で、世に真中古窯と云ひ、銘野田と云へる名物茶入と同手であるが、本來野田手に屬する茶入は、同じ窯でも作行に非常の變化があつて、面影月迫、宮城野、三國など、釉色も形状も景色も皆夫々變つて居るが、中にも此猿若は彼の紙くゝり猿の如き形で、黃釉青釉など相交錯して景色の變化は到底筆舌の及ぶ所でない、打見たる所首が少しく前の方に俯いて、尻が張つて底廻りの作行が頑丈で雅味があつて、何とも云へぬ面白い出来であるが爲め、遠州の鍾愛一方ならず、其茶友清水道閑が仙臺家に聘せられた時、遠州は君の袖の中に我が魂を入れて遣るぞと云つて、一首の歌を添へて之を贖した者であるから、風雅の骨髓は此一茶壺に籠つて居ると云つても宜からう、左れば今度此茶入披きに取合する器物に就ては庵主も非常に苦心せられた容子で、到頭餘りに

景色もなく又他の邪魔にもならず、そして遠州に縁故ある同藏帳物の鳥の子手の茶碗を使はれたのは千思萬考の結果であらう、或は猿若程の茶入に此茶碗を配するは權衡上少しく不倫である云ふ異論もあらうが、此度の處は先づ茶入に重きを置き、て、此一品に花を持たせやうとした庵主の趣向を是認して置く方が至當であらう、又薄茶の時此茶入に縁故深き小猿動閑作の茶杓を使はれて、濃茶の方に津田宗及のを用ひられたのは、目下の人の茶杓を猿若の上に載するは不穩當であると云ふ庵主の懸念でがなあらうが、是れも尤も千萬と首肯された。

五

狙庵の濃茶一巡し終るや、同席にて薄茶を出されたが、其器物は左の通りであつた。

茶入 唐物紅菊

水指 高取口締

茶碗 青井戸銘筆

替茶碗薩摩焼片身替

茶杓 小猿動閑作共筒

建水 砂張合子

蓋置 前同斷青竹

菓子 小原木松葉菊打物

茶 極昔

濃茶々碗の比較的輕きを補はんが爲め、青井戸銘筆と云へる小服の名茶碗に面白

き薩摩焼片身替の茶碗を出されたのは、前後對照して庵主の大に意を用ひた所であらう、斯くて新席狙庵の猿若茶入披きの茶會は目出たく大成功を以て終結したので、歸路狙庵より少しく上の臺にある故三井松籟翁繩張に係る心曠亭に立寄り、庵主が故人に對する追善の飾附を一覽したが、床に掛けられた澤庵和尚薦の細道の自讚畫歌は左の通りであつた。

夢かとは夢ならていつをうつゝとて

うつゝをたとる薦の細道

此掛物の前には唐物木瓜盆の上に、銘回雪と云へる長次郎作の香爐を載せ、名香碧雲を薫ぜられたが、其の傍に置かれた香合は、甲に觀音大士の像がある存星であつた、又松籟翁好み古材棗、心曠亭と云へる印二個、其他同翁好みの釜、煙草盆、水屋道具、附屬品一切を飾られて、此席を造られながら遂に之を披くに及ばずして遠逝せられた故翁の好事を來客に展示せられたのは、庵主が故翁に對する深厚なる情誼の表章として、誠に奥床しく思はれた、是れより更に一段高き掃雲臺の母屋に歩を運べば、羅漢二

幅對の掛物の外數々の書院飾りがあつたが、茶席外なれば其説明を省いて狙庵開席の記事は先づ此邊で打止めやう、猶此猿若茶入に就ては種々面白き珍談逸話があるが、是れは他日之れを披露するの機會があらうと思へば、今は唯此猿若茶入が所持者其人を得て、三百年振にて遠州も道閑も是れならばと満足するやうな同茶入披きの茶會が首尾克く終りを告げた事を祝するに止めて置かう。

新席樂庵

(大正九年十一月十日)

上

當夏以來茶界の不況は財界の不況よりも猶ほ一段甚しかつた、茶人の命とする名残の茶會さへ一度も取り出す者がなかつた、然るに十一月八日益田鈍翁は小田原掃雲臺新席狙庵に於て、逸早く猿若茶入披きの口切茶會を催された、續いて京都の古門前に於て林新助氏が新席樂庵を開かれた、是れが天の岩戸の開かれたやうに、忽ち茶界の暗黒を破つて赫耀たる光明を東西の斯界に放たれた、狙庵茶會は今猶ほ繼續し

居るやうなれば先づ樂庵の方より書き始めやう、余は十一月十二、十三兩日、例年鷹峰に催される光悅會に出席するが爲め、九日夜行汽車にて入洛し、十日正午に林氏の新席に參會した、相客は馬越恭翁、野崎幻庵、益田多喜、梅澤鶴叟で、余と共に五客であつた、檜の香新しき古門前の林氏新宅の門を入れば、玄關の手前に寄附の入口があつて、罷り通れば三疊敷の床に北齋筆、神苑紅葉の圖一軸を掛けられたが、楓樹の下に仕丁が箒を把つて落葉を掃ひ居る圖であつた、席上を見廻せば、其飾附は左の通りである。

瓶掛 丸爐に銀瓶

茶碗 古赤繪花鳥

振出 祥瑞吉の字共蓋

煙草盆 宗旦好み手附丸形

火入 備前寫慶入作

手焙 高臺寺時繪小判形

敷物 古渡松竹梅繪段通

庵主の痲性は寄附より先づ現はれて、祥瑞振出、時繪手焙段通敷物など皆茶人の目に留まるべき者であつた、恭翁を正客に推して先づ腰掛に立出づれば、廣間と樂庵との間に手狭い庭があつて、腰掛の前に据る置かれたる蹲踞石は、先年まで、京都有樂館の茶席如庵に附屬してあつた、織田有樂齋所持、釜山海と云へる彫銘ある名物洗手鉢で、

如庵が三井八郎右衛門男の手に入る前に、蹲踞石一つ先づ抜け出して當庵主の掌中に歸したのである。此蹲踞石を前にして幅九尺許りの腰掛には、左の道具が夫れく備へ附けてあつた。

煙草盆松尾好み木地

火入

寄附のと一對分
慶入寫

手焙

宗全好み黒

圓座 讃岐

中

樂庵は表千家の不審庵と同型にて、唯茶道口の趣向が變つたのみである。床には烏丸光廣卿の短冊を掛られたが、其歌は神祇と云ふ題で

仰くなりこゝに宮居のふた柱

國富み民をいくよ守りて

とあり、言ふまでもなく今月は神無月で、然も此程明治神宮鎮座祭があつて、二柱の神の宮居を仰ぐ今日此頃、何と云ふ時節に適つた掛物であろう。新席とて有職菊橙盆に俵熨斗が飾られてあつたが、爐邊を見れば久以作澤栗爐縁に名越善正作寸松庵傳

來の桐地紋丸釜が掛られ、五徳は薩摩屋形と云ふ與次郎作であつた。頓て庵主立出て余等が遠來を犒ひたる後、早や一廉の宗匠然と落ち付き拂つた炭手前があつたが、其器物は左の如くである。

香合 志野一文字菊繪

香 銘數妙

炭斗 唐物底四方白さび

羽箒 白鶴

火箸 松花堂好み櫻皮卷

環 鐵銀象眼

灰器 了入燒貫

灰七 利休形桑柄

志野一文字菊繪香合は、白釉の中にホンノリと赤味を帯び、菊花模様を蓋の甲に無造作に描きたる作行、席上に白毫の光を放つて居た。炭手前が濟むや直ちに懷石を出されたが、一閑作丸折敷に長寛作利休形小丸椀で、其獻立は左の通りであつた。

向附 九谷八角赤繪、若狹鯛

繪 保全作壺

汁 赤味噌、頭芋角切、黒胡麻

燒物 染附結文鉢、緋罌、醉入

煮物 つむぎ丸、しめぢ茸、は

香物 黄瀬戸、鉦鉢、千枚漬、鹽漬茄子

酒器 金欄手、桃蓋、鐵銚子、備

菓子 玄猪餅、虎屋製

御手の物として雜器は悉く結構であつたが、中にも強肴を盛られた刷毛目鉢は無論

無疵で、頃合も好く近頃見掛けぬ名品なり、又銚子の金欄手桃蓋は元筆架などに生れたる者ならんか、又なく銚子と取合ひて是れも頗る珍品であつた。

下

後座の床には水戸徳川家舊藏江月和尚直書附古瓢銘風流と云へるに、斑入の白玉椿を掛け、濃茶の器物は左の通りであつた。

水指 南蠻繩籠

茶入 盛阿彌尻張黒棗 袋糸屋製

茶杓 利休共筒

茶碗 古萩縷目

蓋置 青竹引切

建水 緋襷

茶 千代の松、三丘園詰

掛物が短冊なれば茶器の取合せも之に準じて、サラ〜と何れも手輕き者を使はれたが、古萩茶碗は流石に一段優れた者であつた、濃茶が濟むや庭を隔て、樂庵と向ひ合つたる廣間殘月に案内されたが、床には清巖和尚筆松無古今色と云ふ五大字横物を掛けて、古銅耳附花入に寒菊とはしばみを掛け、書院には賣茶翁所持竹筒硯箱を飾られ、席上に排置されたる器物の重立つた者は左の如くであつた。

釜 光悦好み淨味作 茶巾釜

香合 仁清作色繪重扇

炭斗 時代油竹

羽箒 雉子

灰器 了全作金筋

灰七 少庵形銀

棚 寸松庵傳來 唐桑青貝戸

水指 染附寶蓋し手桶

薄茶器 高取耳附鉸鎌

茶杓 藏内透月作銘代々木

茶碗 繪御本雜に菊

替茶碗 唐津石ハゼ

蓋置 樂吉左衛門作太鼓胴

建水 木地曲

以上飾附の處に無地黒輪花盆に長生殿の菓子を盛り、宗哲作舟形煙草盆に吳洲水鳥の火入を置き、名器は愈々出て、彌振るつた中にも唐津石ハゼ茶碗は舊赤星家所藏にて、其石ハゼ工合の面白さ取り分け一座の人氣物であつた、今度の茶會は後段に淺酌の催しあり、長寛作伊勢物語模様椀にてゴリの吸物、青磁栗鉢、右衛門杓鉢、呂宋飯櫃に染附魚の手五人揃の酒吞等、數々の名器で珍味の御馳走を取り出す筈であつたが、東京流を呑込み居る當庵主は大抵之を小間懷石の間に出して、廣間は薄茶のみでお披露と爲し、客を見計らつた活作略誠に感服の至りであつた、扱て今度の如き名器揃ひの茶會で、一々其品評を爲さんとすれば殆んど際限なきが故に、以上道具組を

見て讀者の自ら判断するに任せ、余は樂庵主人が茶臘未だ淺きにも拘らず、舊來の關西茶器商を追ひ越して、優に京都茶壇の一重鎮たるに至つたる其成功に對して、唯一言偉いと讚辭を呈して引き下がらうと思ふ。

洛東無隣庵

(大正九年十一月十一日)

一

洛東無隣庵は山縣老公の別業である、老公の之を造られたのは明治二十八年頃であらう、南禪寺松原通の北側で瓢亭と云へる旗亭と道路を隔て、相隣して居る、東山と大文字山を背景にし、琵琶湖疏水の分流を庭前に引き、泉石の布置結構は總て老公自身の指圖である、但し老公の築庭としては其處女作に屬する者だが、爾來幾分の修正を経て居るし、且つ場所と遣水と背景の三拍子が揃つて居るから、面積も餘り廣からず規模も至つて小さい者であるが、確に洛東の一名園である、殊に此庭前には明治大帝より公に賜はりたる京都御所の稚松二株が植られて一段光彩を放つて居るか

ら、老公は此松に對しても此名園を荒廢に歸せしむる譯には行かぬのである、處て京都市に寄附しやうか、又は去やんごとなき方に獻納しやうかと考慮を廻らされたが、心なき人の手に扱はれたり、又は何かの返禮などを受けるのは不本意であると思はれてか、遂に當園保存の財團法人を組織して之を永遠に保存すると同時に、或る方法を定めて或る程度まで風流雅客の縦覽を許さるゝ都合であると聞及んだ、然るに余は十一月十一日午前偶々三條通り白河筋の橐駝師小川治兵衛通稱植治方に赴き、庭石を検分する序があつたので、植治を伴ひ久方振にて無隣庵を訪れた處が、當庵築造當時より庵守を勤め居る瀧本増藏と云ふ老人が余等を迎へて、先づ玄關の方より案内して呉れたが、當庵の建物に至つて手狭で玄關より突當つて次の間附の八疊は令室の居間、是れより鍵の手形に庭前に突出でたる次の間附十疊の座敷は老公の居間兼客座敷なり、又玄關より廊下傳ひに南方に離れて建ちたる西洋館は老公の防寒室とも云ふべき者である、此外には南手に離れて水屋附三疊臺目の茶室があるのみである、今先づ客間に罷り通れば、東山を背景としたる奥深き庭の遙向ひの大樹の間に、

三段に屈曲して幅廣き大瀧が琴々として流れ落ち、其下水は最初真直に座敷の方に向つて流れ來り、中途より一方に折れて樹木の間に奔り込み、石を抱き笹を潜り、或は廣く或は狭く、座敷近くに流れ來るものと、他の一方には南禪寺の裏手の駒ヶ瀧の下流が別に庭の南方に流れて入るものと、兩水相合して幅廣き流れと成り、是れより庭外に出て道路を隔つる瓢亭の庭に注ぐ趣向であるが、平常最も水を好み、水なき庭は庭に非ずと宣言し居らるゝ老公の築庭的理想は、此無隣庵に於て遺憾なく實現せられて居るのである。

二

山縣老公は平安山水の明媚を愛し、明治二十四年頃先づ木屋町の二條橋近き舊角倉邸を購はれたが、其後今の無隣庵の一部が或人の住宅で、他の一部が水田と爲つて居たのを見て、此地以て我が築庭の理想を試むるに足るとや思はれけん、木屋町の方をば故川田小一郎男に譲り、南禪寺門前通りの北側に新に無隣庵を經營せられたが、繩張は一切老公自身の指圖で、その指圖に従つて築庭の事に當つたのは今日余が同伴

したる植治である、左れば植治は最も能く無隣庵の今昔を知り、今日も其築庭の際に於ける種々の出來事を物語られたが、無隣庵庭前には二つの名物がある、即ち客間の南面に根幹蟠屈する楠の老大樹が其の一つであるが、往昔延元帝が紫宸殿の南に大木あるを夢みて楠氏を召出し給ふたと云ふ勤王歴史に縁故ある其の楠の木が、然も客間の南面に亭々たるは、庵主が庵主だけに一段目出度く思はるゝのである、又他の一つは庭の東北方に巍峨として峙立する目方一萬貫と註せらるゝ大石である、此大石は無隣庵庭前の主人公とも見るべきもので、之を此庭前に拉致するに就て一場の物語りがある、初め山縣公の無隣庵を築造せらるゝや、一日豊太閤の經營に係る大佛殿の石垣を見て、其大石は何處から運ばれた物かと問ひ質された處が、是は其當時醍醐の山奥より引かれた者で、山科の谷間には今でも其取残しの大石があると言ふ事を聞かれて公は俄に興味を催し、實地檢分の上遂に此石に着目せられたが、固より非常の大石なれば牛二十四頭を以て牽き來るに、道路がメリ込めて運搬上非常に困難を感じしも、今日と違ひ其頃は道路に障害物が少かつたので、首尾克く庭前に引入る

る事が出来たさうである、兎に角一萬貫の大石で、然も豊公の取残しと云ふ處が面白く、庭前に楠豊二公に縁故ある名物があるのは真に興味ある對照である、植治の談に老公が此庭を造らるゝ時、自分を座敷に呼び上げて、お主は正客と爲つた積で床の前に坐つて能く庭を見るが宜い庭の隅から庭を見るやうでは眞の庭は造れぬぞと仰せられたが、是は如何にも尤もなる事で、此教訓は今でも肝に銘じて居りますと言はれたが、庭は正客を主眼として作るべきものであるから、此邊の注意は築庭上最も必要であらうと思ふ。

三

山縣老公が長州に於て最初に造られたる無隣庵、次ぎに京都木屋町に構築せられたる同庵の由來及び無隣と云へる名稱に就ては、明治二十四年長三洲の撰並に書に係る無隣庵記に盡されてある、此記文は匾額として無隣庵書院の次の間の楣間に掛けられてあるが、前に無隣庵の三大字を書し、次ぎに庵の由來を記した者で、其文は左の如くである。

文久慶應間、山縣伯相總管騎兵隊、是時内外患難相踵、公奔走砲石間、不遑寧居、丁卯歲四疆之事稍息、公於吉田山營之南、築小屋、命曰無隣庵、其地泉清砂白、繞以松竹、幽邃深窈、四無隣、並有詩曰、清水山前遠市囂、疎松寂々竹蕭々、有人若問吾茅屋、一逕斜通獨木橋、然京師關東之事、殷憂未已、明年國勢大變、天日再明、其後公位在內閣、孜孜求治、未嘗得後樂之境也、今茲辛卯、卜別業於京師鴨川西涯、高瀨川分流處、老樹重陰、水行其際、苔翠之色、潺溪之聲、殆日洗耳、怡忘在都門塵中矣、公後以舊號名其居、蓋追憶往事、不能忍懷、故以明不忘舊之意也、命余書其扁、因再記其由爾。

長三洲の印に辛卯三洲とあるのを觀れば、三洲は年々其干支を彫りたる印を使用された者であらう、此干支で觀れば三洲が此額を書いたのは明治二十四年である、而して此無隣庵は老公が京都に於て最初に獲られた別業で、木屋町の二條橋際にあつたが、其後公は現今の無隣庵に引移ても猶ほ舊庵名を存せられ、明治二十九年公自ら文を撰み、高嶋九峰氏が之を書して、右匾額の末尾に添へられた其文は左の通りである。

予嘗卜地于鴨厓、結一小廬、囑長三洲、書無隣庵舊號、以爲匾、卽此額也、蓋距今七年矣、後

三歳、厭其地稍闊、更相山幽水淨之處、定爲今居、將再煩三洲、而會其沒、因揭舊匾於楣間、顧三洲、嘗同余竭力於國家多難之時、今也則亡、每對此匾、未嘗不想起其人也。

明治二十九年小春含雪居士識

九峰高嶋張書

四

無隣庵の庭前には明治大帝より老公に賜はつた二株の稚松があつて、其傍に老公自撰の御賜稚松の記を彫附けた石碑が建てられてある、而して其記文は眞に優雅なる文章で、之れを一讀すれば無隣庵の風景並に稚松拜領の顛末が明瞭するから、今左に其全文を掲げよう。

御賜稚松の記

遇人休問南禪寺、一帶青松路不迷、と頼山陽の歌ひたる並木のかたほとりに、たなそこばかりの土地あり、その中に細き流れあり、草川と云ふ風趣の幽潔なるは此れにまされる處やある、此松陰とながれとを友として老を送らばやと、年ごろ草廬を結び無隣庵と名けぬ、自然の風致には富みたれど、ながれの細きがいさゝか物たらぬ

心地すれば、琵琶湖の疏水を松杉深きあたりに引入れしに、落る瀑の音のはげしくてみやまのおくもかくこそあらめと思ふばかりなり、又ながれのゆるやかなるは、砂白く底すみて魚のひれふるさまなど見ゆ、巖のふしたるも立てるもあり、又ふたつみつかさなりたるもをかし、苔の青みたる中に名も知らぬ草の花の咲き出でたるもめづらし、水に横たはれる楓の枝にかはせみの來りて、魚を窺ふさまなどいと見所多し、春はあけはなる、山の端のけしきはさらなり、夏は川どのにすみわたる月の涼しさ、秋は夕日はなやかにさして紅葉のにはひたる、冬は雪をいたゞける、比叡の嶽の窓におちくる心地して、折々のながめいはむかたなし、中に一きは目たちてあはれふかきは雨のけしきなり、此狭き園に萬象をこめ、幽邃の中に豪壯を含まみ、風雅の間に快濶を帯びたる趣あり、晨には文をよみ夕には歌を詠じ、あるは茶を品し、碁を圍み、又は酒を酌み、時に今古を談論するなど、たゞに世の塵洗ふのみかは、さるに此草廬の成りたる事おもほえずも、かしこき御あたりにもきこしめさせたまひて、禁苑の稚松二株を賜ひければつゞしみてこれを園の中にうゑ、朝な夕な

養ひたてたるに、あまたの日數もへざるに緑の色うるはしくおひしけりて、雲を凌ぎ龍となりぬべき勢ひあれば、之を寫して奉りけるに、御製一首を賜ひぬ其御歌は、

京都の宮庭の松をいぬるとし山縣有朋におくりけるに、かく生しげりたりとて寫真を見せたるによめる、

おくりにし若木の松のしげりあひて

老のちとせの友とならなむ

あはれ今より鬱蒼たるみどりの陰は、長く此園をおほひ千年をよばふ松風のもとにおきふす身のたのしさはいかばかりぞや、限りなきよろこびのあまり、よみてたてまつりたるえせうた、

みめくみのふかきみどりの松かえに

老もわすれて千代やへなまし

おいしけれ松よ小松よ大君の

めくみの露のかゝるいほりに

この得がたきみめくみを蒙りたることのもとするゑいさゝかかいつけこの庭の記念とはなしぬ。

明治三十四年十一月

天長節前一日

無隣庵主有朋

五

無隣庵の地形は正門のある西側の方が廣く、東側なる南禪寺の方に展るに隨び、次第に窄まりて半開きの扇形と云はんより、寧ろ楔形の尖端に當る處即ち庭の突き當りに杉や松の太木があつて其下から例の大瀧が流れて下流が庭一面に廣がると云ふ趣向であるから庭は東山を後に背負つて、否寧ろ東山其物と合體して居るやうに見受けられて、一段奥深く極めて雄大ななる景致を呈して居る、夫れで座敷より庭前を眺むれば、平面の芝生を瀧の下流が蜘蛛手に流れ廻つて庭の全面が一目に眺め盡されるので、是が普通の庭園であれば、一所に坐して全庭を見渡し得るが爲め庭に立出づる必要もなく、隨つて大きな庭も小さく見ゆる譯であるが、此無隣庵に於ては獨り然

らずと云のは、庭前に立出づれば、東山、大文字山、其他の光景が、一步毎に變化し行くので、庭外の景色を利用せざる庭と同様の筆法を以て論ずる事は出来ないのである。處で余等は、今や秋色の満ちたる庭を、隈なく拜觀したが、此庭は如何にも經濟的であつて、庭の奥なる東方が、楔狀に窄まつて居るから、面積の狭い割合に、外面の景色が手傳つて、際限なく廣く見ゆるのである。老公が最も信賴せらるゝ東京の豪腕師勝五郎と云へる老人が、或る時無隣庵を拜見して、此庭は先が尖つて居るのでお仕合せである。若し是が四角であつたならば、御前が如何に骨を折られても、箇様に旨くは參り、ますまいと言はれたので、公も如何にも尤もと感ぜられたさうだ。斯くて余は庭中を徘徊して、到頭彼の御賜稚松の邊に至り、彼の記文を寫し取り、夫より更に此庭の南側にある茶室を拜見したが、此茶室は珠光の好みで、彼の藪内紹知の家に在る燕庵を寫されたるもので、是は丹波の古望某氏方にあつた古席を、蹲踞石、石燈籠諸共に當處に移されたと云ふ事である。

六

無隣庵中の燕庵寫茶席は、庭に面したる處に、勾欄附きの月見臺を作つて、庭越しに大文字山の方を眺むべく工夫せられたが、是れは無論老公の物數寄である。而して此席には、水屋若くは庵主の控所まで附屬して居つて、茶事を催すに十分なる用意がある。此茶室が出来た頃、老公は京都の老茶人兼道具商で、松岡嘉兵衛と云ふ老人を招ぎ、折角茶席が出来た上は、乃公も一度茶會を開かうと思ふから、其方見計らつて、入用の道具だけを持參せよと命ぜられた。松岡は至つて物固い老人で、年來三井家だけに出入を爲し、其他より何を注文されても一切其需めに應ぜぬと云ふ流儀であつたが、公の御沙汰であるから、委細畏まつて稽古道具に毛の生へた位の茶器を取揃へ、使用の作法まで萬端残りなく言上に及んだので、公は當時京都の茶人であつた故、伊集院兼常若くは望月宗匠など云ふ老茶人を招ぎ、一夕茶會を催されて、扱て當庵の客と爲つた。伊集院等が席中に於て何事を語り居るか、と耳を敬て、之を聞けば、某の家の茶會に招がれたる時、何々と云ふ名物茶入茶碗があつて、如何にも結構であつたとか、若くは何日京都の美術俱樂部で、何々の茶器の入札があつて、其品を誰某が需めて、其代價

は何程であつたとか云ふやうな他家の茶會若くは茶器の品評を専らにして今日の茶會に出でたる道具に就ては殆んど何等の品評も試みざる様子なるにぞ老公も大に悟る所あり成程茶事には茶客の心を動かすべき名器を使用するの必要あり唯平凡の茶器を並べたるのみにては事實他の茶會若くは茶器の尊を爲すべく彼等に席貸すると同然にて何等の感興をも生ぜざる者なりと一度で懲々したりとて公は或る時此事を語り出で、呵々一笑せられた事があつたが是れは近頃世間で往々聞く所の茶事を爲すに名器を集めずとも有り觸れた道具で澤山ではないかと云へる疑問に對して最も適切なる答案である、そして公は此茶會以來吾等の如き貧乏人に茶事が出来る者かとて、其後茶會を催せられぬさうである、併し無隣庵中の茶席は露地と云ひ間取と云ひ申分なき結構であるから、他日數寄者が拜借して折々茶會を催す事が出来るやうになつたら、其風趣も一段の事で、必ずや天下數寄者の風雅心を満足する事であらうと思はるゝのである。

七

京都は千年の古都で山紫水明の場所柄だけに古來名家の手に成つた庭園が少からず現存して居る、今其最も古い者で作者も年代も分らない者は姑く措ぎ、其來歴の分明なる者では夢想國師の天龍寺、相阿彌の銀閣寺及び大徳寺塔頭大仙院、石川丈山の六條枳殻御殿、小堀遠州の桂離宮及び太徳寺塔頭孤蓬庵、金森宗和の修學院離宮及び曼珠院等の庭園が最も有名なる者であるが、此處に最も珍らしいのは醍醐の三寶院の庭である、三寶院は豊太閤が最も厚く庇護された寺院で、其晩年に有名なる醍醐の花見の一幕を演じた處であるが、太閤時代に醍醐寺住職であつて、最も彼れの信任を受け、時に其帷幕に參じて非常の勢力があつたと云ふ義演僧正の日記中に、今も猶ほ同院の庭にある彼の二段の瀧は、太閤自身の指圖で造られた者であると云ふ事が記されてある、何事にも趣味多く又無遠慮に我流を發揮する太閤自身の指圖に係る庭園が、今日三寶院に現存するのは頗る興味ある次第であると云ふのは、古來誰々作と云へる庭園にして事實其通りであるや否が疑問である者が甚だ多いからである、京都若くは東京に於て、時代の古い名園があれば必ず小堀遠州作と云はるゝのは、佛畫

が兆殿司彫刻が古くて運慶近くて左甚五郎刀剣が正宗で茶杓が利休と云ふのと一般で中には頗る疑はしい者が多いのである、故益田無為庵(克徳)が築庭を以て鳴らした時分、或人が余に向つて其庭園は一切益田君の設計であると言はれたけれども見れば甚だ不細工な處があるから、或時余は無為庵に向つて此事を尋ねたるに、無為庵は阿々と笑つて、彼の男は到底僕に手腕を揮はせるやうな好事がないから、唯一度見て愛想を盡して這々の體で逃げ出したのであると言はれた事があるが、世間傳ふる所の遠州の庭と云ふ者にも定めて斯る類例がある事であらう、然るに無隣庵の如きは山縣老公が一草一木にも心を籠めて作られた者で、處女作ではあるが全庭悉く其慘澹たる意匠を経たる者であるから、後代までも公が此方面に於ける風雅を偲ふべき者で、今度法人團體組織として長く之を保存せらるゝ事になつたのは、京都に一名所を残すと云ふばかりでなく、明治大帝恩賜の松の拱と成り抱と成り重陰天を蔽ひ、長く明治時代の記念物と爲ると同時に、又自ら明良相遇の盛事を傳へて後の此園に遊ぶ者をして大に觀感興起する所あらしめ、最も意義あり雅致ある名園と爲るであらうと欣喜の餘り、聊か所感を記した次第である、猶ほ或る年の冬無隣庵を訪ひて詠み出でた腰折二首があるから、序ながら左に之を掲げやう。

おく庭の杉苔しろく雪ふれと

そめてのこれる櫺も見えけり

あるしたに冬はきまさぬさひしさを

かこつに似たる水の音かな

庚申光悦會

(大正九年十一月十一日)

今年も早や蘆白楓紅の時節となつた、近年京都の年中行事となつた光悦會は十一月十二、十三兩日、洛北鷹峰光悦寺に開かれた、例年の事であるから干支を頭に冠して本年のは庚申光悦會と名けやう、今回は殊に故會長三井松籟翁、其他光悦會の功勞者で已に故人と爲つた人々の法要を修め、昨年境内に新築せられた瓦葺休息室に於て表

千家宗匠千宗左氏が獻茶を營まるゝ事と爲り、騎牛庵は藤田江雪平太郎男大虛庵は
 大村梅軒(彦太郎氏)本阿彌庵は林樂庵(新助氏)が受持て、思ひ思ひの飾附を爲す筈なれ
 ば、京阪神は云ふに及ばず、奈良、名古屋、金澤等より千客萬來して、非常の盛況を呈する
 だらうと豫期せられた、是に於て余は當日の雜沓を避け、十一日の午後各庵の飾附け
 が漸く成りたる處に押掛けて、緩々巡覽を遂げたものゝ、斯かる大茶會に於て受持諸
 氏が數々陳列されたる名器を、一々品評せんとすれば、殆んど際限なきが故に、各庵懷
 記の大略を列記して、讀者の自ら比較研究するに任せ、其中殊に重立ちたる者のみに
 就いて短評を試むる積りであるが、順序として先づ千家獻茶の席より書き始めやう。
 表千家現宗匠千宗左は號を惺齋と云ひ、至つて謹直な人で、平常光悅の爲人を欽慕し、
 又三井松籟翁とは多年淺からぬ交誼があつたので、今度奮つて獻茶席を引受けられ
 たのだが、其獻茶器具は一切自身の好みを以て新調した者で、桐臺子に附屬する茶器
 一切を十三通り調製して、中にも竹花入には鷹峰の名勝十三ヶ所の名を冠し、自家に
 は一組を残して、其他の十二組は夫れ々之を縁故者に分配する筈だと云ふ、眞に近
 來珍らしき趣向なれば、左に其獻茶器物の名稱及び其作人等を掲げて、同好者の一覽
 に供へやう。

- 御香 銚小倉山 善五郎造
- 香爐 鹿つまみ紫 善五郎造
- 花 白玉椿、様
- 花入 一重切銚鷲ヶ峰 清左衛門造
- 釜 光悅形鹿地紋 宗哲造
- 爐縁 黒布張 善五郎造
- 香合 紅葉重 一閑造
- 炭斗 鷹峰落葉吹 吉左衛門造
- 灰器 素焼に吹寄彫

二

表千家宗匠千宗左氏の獻茶式は、十二日午前九時に舉行されたさうであるが、余は當

日正倉院拜觀の爲め奈良に趁いたので之を目撃する事を得なかつた併し宗匠は齋戒沐浴して新調の時服を着し極めて嚴肅なる態度を以て之を勤められ列坐の人々に對して大に宗匠の威嚴を示されたさうだが當日使用された自身の好みの什器は左の通りであつた。

風爐先 光悦紙薄畫

吉兵衛造

桐臺子 吹寄畫置上

利齋造

水指 吹寄蒔繪手桶

宗哲造

火箸、蓋置、建水

淨益造

茶杓 眞

宗左自作

茶入 鷹峰土肩衝

善五郎造

袋 吹寄裂

友湖造

天目 黒

吉左衛門造

同 白

善五郎造

臺 木地

利齋造

薄茶器 折溜形 甲に松笠畫

閑造

茶 初昔

菓子 光悦饅頭

虎屋製

菓子器 菊花形食籠

善五郎造

千家宗匠は以上自身好みの茶具を以て、首尾能く獻茶式を修められたる後、更に左の同好み品を以て參列の人々に薄茶を侷められたさうである。

茶杓 楓木に吹寄蒔繪

利齋造

茶碗 光悦作銘都富士

吉左衛門造

替茶碗 吹寄畫

善五郎造

干菓子 初時雨、松葉

伊織製

菓子器 吹寄蒔繪四方盆

宗哲造

千家宗匠が其好みを以て、茶入茶碗茶杓等を製作する事は別段珍らしい事でもない

が、今度の如く多数の茶具を同時に好んで、其皆具十三組を好事家に分配すると云ふ事は極めて稀有の事であらうから、庚申光悦會に於ける惺齋宗匠好みの一揃ひは、永く後代に傳はつて好記念物と爲る事であらう。

三

鷹峰光悦寺境内大虚庵に陣取つた白木屋吳服店社長大村梅軒氏は、故光悦會長三井松籟翁の親戚で、當庵に於て松籟翁追善の一會を催さうと云ふ次第であるから、ウソと其力瘤を入れたのも道理である、先づ本坊の座敷を待合とし、床に古法眼筆秋景山水の一軸を掛けて、其前に大虚庵本席にて使用した茶器の箱及び書附類を陳列し、參會者に對して觀覽の便利を計られた本席には三井松籟翁が今上御即位御大典の節に揮毫されたと云ふ、目出度き祝辭の一軸を掛け、其前に常慶作阿古陀形香爐を埴田作四方盆の上に載せて飾り、床柱には光悦作銘子路と云ふ二重切花入に寒菊を活けて掛けられたが、其他一座の飾附器具は左の如くであつた。

釜 興次郎作妙喜庵形霰 香合 宗入作原叟書附踊桐 香 銘落葉

爐縁 南都三月堂古材 五徳 初代寒雄作法蓮形 炭斗 唐物籠

羽帚 青鸞 鐙 徳元作大角豆 火箸 桑柄

灰器 宗品作雲華燒 灰七 仙叟時代大判 水指 仁清作耳附

茶碗 光悦作赤同箱書附 替茶碗 釘彫伊羅保銘三味 茶入 利休棗銘面壁

茶杓 空中作共筒 建水 木地曲 蓋置 祥瑞夜學

菓子 銘菊の香光忠製 菓子器 御本飯櫃 干菓子 七寶押物有平松葉

干菓子器 堆朱六葉 手焙 時代桐蔭繪 煙草盆 一閑作

火入 赤繪唐子 茶 銘白昔、柳櫻園詰

以上大虚庵飾附は三井松籟翁追善を主題とし、翁が遺筆の一軸より割出した者で、徹頭徹尾追善の意味を現はし、品柄も銘柄も本題を離れざるやう注意周到であつた事は、前掲會記に依つて讀者の容易に會得せらるゝ所であらう。

四

大村梅軒受持大虚庵前の松の木の間、に黑白市松の大傘を差掛け、其昔北野大茶會

にノ貫と云へる佗茶人が豊太閣に一驚を喫せしめたと云ふ趣向を其儘利用して、各席巡覽客に休息の便宜を與へたのは集翠庵服部七兵衛老の機轉で、老練々々と褒めずばなるまい、大傘の下には枝附きの青竹に、三井松籟翁より贈られたる銘送りものと云へる竹花入を掛け、白龍膽とれんぼうを挿み、同翁手筒張交ぜの風爐先を立て、古天貓手取釜を時代朽木の瓶掛に掛け、其他備附の器具は左の通りであつた。

茶碗 染附極樂の繪

香煎入松籟翁手造赤樂

茶盆 長寛作松生節竹縁

蓋置 古銅蓮蛙

菓子 笹結び、歌仙松風

菓子器 長嘯子好み一物三角

服部老の談に此度は故會長松籟翁に對して千家宗匠の獻茶あり、大村家に於ても亦大虚庵に追善の釜を掛けらるゝに就ては、多年恩願を蒙りたる愚老とて、何をかな一趣向と存ぜしに、幸ひ故翁より賜はりたる銘送りものと云へる竹花入ありたれば、之を本尊として御覽の如くお笑ひ草の茶番を仕組たる次第なりとて、呵々一笑せられたが、手輕き趣向で大喝采を博したのは、大正のノ貫と謂つて宜からう、是れより今年光悅會の花形たる藤田江雪男受持の騎牛庵に押寄する道順にて、先づ其寄附に當てられた彼の萱葺休息所に立寄れば、光悅筆金泥竹の繪地紙に同人が左の古歌を書きたる一軸を其床の間に掛けられた。

和泉 式部

秋來れはときはの山のまつ風も

うつるはかりに身にそしみぬる

好 忠

秋風の四方に吹來る音羽山

何の草木かのとけかるへき

德祐齋光悅書判

地紙の竹の繪の結構なのは言ふまでもなく、其古歌さへ時節相應なり、書も亦無類の上出來である、然るに此一軸を寄附に掛けらるゝ所を觀れば、本席の一軸は何であらうと胸を轟かさざるを得なかつた、此一軸の前には籠地丸牡丹彫唐物盆に、光悅作向獅子銅透し火屋の香爐を置き、名香白菊を薰じ、席上には左の備へ附があつた。

煙草盆 松木地合利蓋

火入 古備前栢壺

手焙 鎌倉彫菊桐

此寄附の鷺が峰に對する長窓の肱掛臺の上に野崎幻庵が時代扇蒔繪手箱と光悦自筆細字謠折本とを出陳した此謠本は旅行用の袖珍とした者であらうか、兎に角光悦が筆まめで氣根強かつた事を證するものであつた。

五

藤田江雪男受持騎牛庵は、床に俊頼卿色紙を掛けられたが、其歌は左の通りである。

素性

いまこんといひしはかりになかつきの

ありあけのつきをまちてつるかな

表具は一文字風帶花色地鳥入古金襴白地牡丹古金襴上下茶地印金で結構言はん方なく、其道の達人田中親美氏の談を聞くに、此色紙は十五番歌合で、元卅枚あつた者が、前田利爲侯家に九枚あつて、同家では筆者を公任とし、藤田家では俊頼として居るが、名古屋關戸守彦氏が今一枚所藏し居るので、今日天下に知られた者は唯一枚のみである、而して近頃古筆研究家間には、此筆者が俊頼でも公任でもなく、實は世尊寺伊房である事が定論と爲つて動かす可らざる證據があるさうである、余は十日程前東京にて藤田男に面會の時、鷹峰の掛物は何でありますかと尋ねしに、當日までは秘密々々と言はれたので、藤田家の藏幅に就き余の智識の及ぶ限りでは、寸松庵色紙に紅葉の歌ある者を掛けらるゝならんと思ひしに、お藏は何處まで奥深きにや、狙ひは稍近傍に届きたれども、中的の中の名譽を博する事を得なかつた、當日騎牛庵で余は此事を言ひ出たるに、藤田男は得意の微笑を湛へて、寸松庵色紙は一昨年三井松籟男に先を越されたから、今度は變つた色紙を用ひたのであると物語られた、今日は藤田令夫人も同席で、飾附を檢分せられ、又明日を待たず三井華精翁馬越化生翁などの珍客が見えられ、藤田家茶道江村嘉一郎翁が薄茶手前を擔當せられたが、席上の珍什名器は左の如くであつた

花入 雲鶴細口下蕪、花初嵐、榛

香合 祥瑞在銘蜜柑、唐子遊、香柴舟

釜

光悦好み朝日、淨味作

爐縁

鳴柿、清巖和尚書附、承應五年云々

炭取

宗全作藤組達磨

釜敷

千家傳來原叟張紙

灰器 南蠻内澁宗旦箱書附 火箸灰七鏡 宗及所持江月和尙看松庵傳來

羽箒 野雁 水指 空中作手桶 本阿法眼空中在銘 茶入 銘物利休再來町棗

茶杓 長嘯子共筒 神無月彫銘 茶碗 御所丸黒刷毛銘緋袴 替茶碗 乾山作 客來一味圖

蓋置 青竹引切 建水 木地曲 茶 初摘の白竹田紹清詰

菓子 時雨鯁頭、松屋常盤製

六

藤田江雪男受持騎牛庵の飾附は、珍什名器數多くして一々之を説明する事は不可能であるが、其中殊に目立ちたる者に就きて短評を試むれば床中の雲鶴細口蕪花入は長き頸にうねりを見せ、青色と玉蜀黍色と入交りたる中に白き雲鶴模様の現はれたる作行言ふまでもなく此種の逸品である光悦好み朝日釜は圓山の肩先に大きな日輪を鑄出したのが、真向ひの鷹峰の景色を其儘寫したやうにも思はれる祥瑞在銘蜜柑唐子遊香合は形と云ひ色と云ひ、此形物中の見本とすべき者であつた、空中作手桶水指は少しく縮り過ぎたれど、底に本阿法眼空中の銘があつて、此席より十歩を隔てぬ處に彼の骨が埋つてあるかと思へば、當庵の水指にヨリ以上の適役があらうとも思はれぬ、利休の再來町棗は名物とて數々の折紙が附屬し、其袋は利休廣東利休緞子の外に、利休の妻宗恩が豊太閤の腰の物袋の裂を以て、手づから縫つた者で一段奥床しく感ぜられた、木下長嘯子共筒銘神無月の茶杓は長嘯と云ふ彫銘があつて、彼が晩年西山翁と號して洛西に閑居した緣故を思へば、今日の席には至極尤もの組合せてある、御所丸黒刷毛茶碗銘緋袴の結構なのは今更言ふまでもない、形は沓で黒刷毛の中に白地があつて、其白地の中に單純なる墨繪模様のあるのが一段珍らしく、余の知る所では御所丸黒刷毛は井上勝之助侯、三井八郎右衛門男、益田孝男と今度藤田男の使はれたのと、共に天下唯四個であつたが、最近岩崎小彌太男家に一個所藏せらるゝ事を發見したれば、今日まで世に知られた者は五個あるのみで至つて稀有なる茶碗である、此名茶碗の替として乾山茶碗は少しく位負けの氣味があつたが、圖柄が客來一味で光悦との緣故上之を採用せられた者であらう、又祥瑞蜜柑香合の結構なるは言ふまでもないが、宗全籠炭斗とは少しく不釣合の感があつた、併し器量好き婦人は

庚申光悦會

所謂七難隠すて別に目障りにもならなかつた、兎に角鷹峰光悦會開始以來空前の名器揃ひで、來會の好事家は一時に此名器を拜見するの眼福を得たれば、態々遠來した甲斐ありと大に満足した事であらう。

七

鷹峰光悦寺境内本阿彌庵は林樂庵の引受であつた、樂庵が古門前の新席樂庵に於て口切茶會最中に、猿臂を伸ばして此本阿彌庵まで同時に引受けた其大力量には只管感服の外ないと云ふのは、本庵の飾附が彼の樂庵開きの道具組にもさらさら、劣らな^い爲めてある、即ち床には角倉傳來小野道風の歌切を掛けられたが、是は世に本阿彌切と稱する者で、本阿彌庵に本阿彌切とは何と云ふ適品であらう、歌は夏季であつたが夫等を問ふの違はない、花入は古銅細形で白玉椿を活けられたが、掛物に對して恰好な取合せであつた、斯くて席上の飾附は左の通りである。

- 釜 古蘆屋眞形 蘆に鷺地紋
- 香 銘落葉
- 炭斗 南部籠
- 羽箒 野雁
- 爐縁 金閣寺古材 百拙和尚常用
- 香合 古萩鹿、金森宗和箱

火箸 桑柄

環 明珍作大角豆

灰器 南蠻

水指 備前種壺ハンネラ蓋

茶入 青貝六角内朱

替茶入 高取割蓋

茶碗 一入黒如心齋銘面影

替茶碗 三作三嶋

茶杓 宗和作寂び竹

蓋置 空中作彫銘

建水 木地曲

茶 松籟好み松の光

菓子 串團子

干菓子 光悦好み紅葉

菓子皿 松籟筆及び乾山繪替

煙草盆 一閑船形

火入 吳洲水玉

手焙 ふくべ

本阿彌切の掛物で先づ來客の膽玉を拉ぎたる此席には數々名品が並んで、青貝六角内朱の茶入は遠州箱書附にて精作である、三作三島茶碗は此種中の逸品と見受けられた、宗和箱の古萩鹿香合は奇抜なる作行、光悦手捏ではないかと思はる、程で、場所と時候に相應した珍器であつた、道具界不景氣の眞只中で二ヶ所に此堂々たる茶席を開きたる樂庵は歳寒うして松柏の後凋を知ると云へる古語に違はず、茲に大に平生の實力を發揮したのであるから、余は此處にも亦重ねて偉いと云ふ讚辭を呈しやうと思ふ。

九

庚申光悦會は藤田江雪男の出陣に依りて、陣容堂々當會空前の盛觀を呈し、又大村梅軒、林樂庵の奮發、千惺齋宗匠の獻茶等が大に斯界の人氣を集めたので、參會者が例年に倍加したる次第である。扱光悦會は已に數會を重ねたるに、會一會益々盛況を呈するの固より、光悦其人の遺徳に依る事ではあるが、一つには鷹峰と云へる地勢が晩秋紅葉の候、茶醺雅會を催すに此上もない好位置であると云ふ事が與つて力ある事であらう。斯くて年々末廣がりに成り行くのは眞に目出度い事ではあるが、餘りに雑沓してお祭り騒ぎと爲り、折角來會する好事家に緩々各席の珍器を賞玩せしむる事が出來なくなつては、到頭當會の衰微を來すであらうと云懸念より、十一日夜分圓山左阿彌樓に光悦會關係者の相談會を開き、來年より會員數を三百人に限り、其會員より若干の入會金を徴收するに決し、又從來同會の世話方京阪道具商七名に、更に東京より三名を加へ、此世話方は毎年順番に一席を受持つ事と申合せたのは、當會永續の爲誠に適宜の處置であらう。猶又當會に若干の資金を作りて之を財團法人と爲し、他年廢會の節には其剩餘金を光悦寺に寄附するやう、豫め規定を立て置くも當節柄必要條件なるべしと言ふ者あり、斯かる場合に奇智湧くが如き名家家の土橋無聲老は、近年立枯れと爲りたる光悦寺の老松を以て記念の煙草盆數十對を造り、或は松の木棗を好みて之を好事家に分配し、瞬く間に二萬金を作り得る計畫を立てられたから、光悦會は頓て財團法人と爲り、故會長三井松籟翁の相續者たるべき新會長も程なく定まり、來年は東京より馬越化生翁、大阪より村山龍平翁の出陣を乞ひ、錦上に花を加ふるの腹案であるさうだ。此順で進めば、光悦會は昔に京都の年中行事たるのみならず、三都聯合の大茶會と爲り、大正聖代の勝事として、天正の北野大茶の湯に接踵し、永く傳へて後代の語り草と爲るであらう。

永坂茶會

(大正九年十一月二十三日)

三井守之助君は、十一月下旬、永坂邸の新席に於て、口切茶會を開かれた。君は號を泰山

と云ひ、平常各種風雅の嗜み深く、茶事に於ては三井家壯年主人中故松籟翁唯一の後繼者と目されて居る。數年來麻布永坂臺に新築中で、茶事も中絶の姿であつたが、今度藪内拙庵と相談の上、三疊臺目小間六疊廣間を造り上げ、久方振にて口切茶會を開かれた。余は十一月二十三日正午の客組に加はつて參會したが、相客は大阪の村山龍平翁と三井物産の小田柿捨次郎、それに末客が梅澤鶴叟で、余と共に四客であつた。寄附は三疊で床には掛物を掛けず、時代菊水蘆手蒔繪硯箱を飾り、丸爐に南鐮尻張銀瓶を掛け、茶盆には南京赤繪茶碗祥瑞四方共蓋鳥摘みの香煎入を置き、松木地桑手附煙草盆に志野四方入角火入を取合せ、鬼更紗の敷物の上に時代桐秋草蒔繪の火鉢を置き、たる有様眞に目覺ましき飾附であつた。頓て腰掛へ出られよと云ふ案内を受け、遠來の珍客村山翁を正客に推して新席の露地に立出づれば、一閑木瓜形煙草盆萩焼三足の火入を置き、了入作鮫鯨の手焙が備へられ程なく庵主泰山君の出迎へがあつた。露地は無論出來たてのホヤ／＼で、青苔日に厚くしてと云ふ譯には行かぬが、腰掛前の柴折戸を開きて小間の庭に出て、飛石傳ひに廣間の方に通ずる趣向で石燈籠蹲踞石など何れも名石揃ひなれば、年經りて寂が附くに隨ひ一段の風趣を添ふるであらうと思はれた。扱て新席は利休好み三疊臺目で、床に隆蘭溪の細字大幅が掛けられたが、古人閑言伏言包作一肚皮と云へる書出しで、本文ばかり二十五行あり、最後に蘭溪道隆爲榮禪人書と云ふ長落款がある。其落款の前に豫讓吞炭子胥報冤など云ふ文句もあつて、極めて面白く、表具も亦頗る結構な者であつた。頓て庵主は一禮の後、直ちに炭手前に取掛かられたが、其器物は左の通りであつた。

- | | | | | | |
|----|-------------------|----|-----------|----|----------|
| 釜 | 細川紹好、好姥口、
茄子鑲附 | 香合 | 吳洲臺牛、香千種 | 炭斗 | ふくべ不昧公在判 |
| 炮烙 | 宗四郎作、
内澁種保全補 | 羽箒 | 鶴 | 火箸 | 利休所持桑柄 |
| 鑲 | 徳元在銘 | 灰七 | 宗旦所持、宗偏傳來 | 五徳 | 興次郎作 |

二

前記永坂茶會の炭手前器物中、吳洲臺牛の香合は所謂形物であるが、至つて稀有なるもので、余の知る限りでは雲州家に一つ、加賀に一つ、其他東京大阪の數寄者中に二三個あるのみである。其中でも今日のは極めて美事なる者で、隆蘭溪墨蹟幅及び細川紹

好蘆屋姥口釜に對して眞に好き取合であつた、斯くて懷石は利休形黒不角切折敷と小丸椀で出だされたが、其獻立は左の通りである。

汁 しめぢ、水からし

向附 染附開扇、鯛昆布、岩茸、山葵、甘酢

椀 原叟好端反り椀、鴨子身、堀川午芻、軸菜、柚子

燒物 利休形溜引重、甘鯛鹽焼

吸物 芽獨活

八寸 豆からすみ、鷲しらず、黒

酒器 青磁獅子蓋鐵銚子、染附芙蓉手小徳利、魚の手盃

菓子 千代の蕪、黒川製

以上懷石終り暫時腰掛に中立すれば、合圖はなくて庵主自ら出迎はれた、後座の床はと見れば、松平周防守舊藏古銅大そろり花入を唐物無地盆に載せて、京都大徳寺龍光院より到來の初嵐と云へる白玉椿を挿まれたが、初座の隆蘭溪墨蹟に對する花入は如何様斯くこそあるべけれと一同感服の外なかつた、斯くて庵主の濃茶手前があつて其器物は左の通りである。

茶入 中興名物古瀬戸林肩衝、袋井筒製

茶碗 稻葉家傳來大三嶋

茶杓 利休共筒上林宗三郎へ送る

蓋置 青竹引切

建水 染附雲堂

茶 好の白横井詰

見渡す限り名品揃ひである、其中で先づ大そろり花生より説明すれば、是れは松平周防守遺愛で其後裔なる松井康昭子方に傳はつた物であるが、其箱蓋裏に周防守自ら書附けた文句は左の如くである。

むかし紹鷗所持天下無双の名物古銅四方盆に乗る、又京施藥院、曲庵此兩人も所持、外に七つ八つ有るべし、塚の宗甫も所持せるよし、無双と云ふにわけあるなり。

此古銅花入を載せたる唐物黒無地盆は低き足附にて、庵主が此花入を得たる後に偶然京都で手に入れた者だが、元來此花入に附屬して居つたやうにシツクリと好く取合つたのは、不思議にも亦有難く思はれた。

三

永坂茶會の濃茶器物は如何にも正々堂々たるもので、斯る名器揃の茶會は近年殆んど無類である、或人が泰山君は未お若い、併し今度の茶會は一世一代と云つて宜からうと評されたのは、甚だ失禮のやうだが、其實最も巧妙なる茶交的辭令であるのである、彼の林肩衝茶入、大三島茶碗は共に稻葉子爵家傳來品であるが、是は故稻葉正繩子が泰山君の親友であつたので、子爵が彼の有名なる曜變天目を入札會に出さる、

以前直接に君に譲られた者である、扱大三島は名の如く大振の茶碗で、外部は青地に白刷毛廻り、内部見込の白釉は粉引を見るが如く柔かて真に結構な作行である、又林肩衝は古瀬戸肩衝としては稍締りたる方で、景色は左迄華美ではないが、ドツシリとして貫目ある所に自然と名物の威嚴が具はつて居る、而して水指蓋置を新物にし、建水に美事なる染附雲堂を使はれたのは、練りに練つた組合せと肯首れた、斯て濃茶の終りを告ぐるや、廣間へとの案内があつたので、小間を出て、飛石傳ひに六疊廣間に打通れば、床には伊達宗曜男舊藏秋月筆眞山水二幅對の一幅が掛けられ、青貝樓閣山水中に丸福壽の文字ある唐物卓の上に青磁一重口竹の節の香爐を載せて、昔といふ名香を薰じ、床脇棚には後京極良經筆和漢朗詠集二卷を飾り、爐中に短冊の模様ある淨久作霰釜を掛け置かれたが、三枚ある短冊中に例の定家卿の、

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苦屋の秋の夕暮

の一首が見えたのは、時節柄廣間用に最適役の釜と思はれた、此處に當庵並びに露地の

の設計者たる藪内拙庵宗匠が立出て、代點の役を勤めたが、一座の飾り附は實に左の通りであつた。

- | | | | | | |
|-----|-----------------|----|----------|----|----------|
| 風爐先 | 仙鶴好み引船、
惺齋書附 | 棚 | 藪内家紹鷗棚桑寫 | 水指 | 古高取一重口 |
| 茶器 | 鈍翁好み松、銘たゆふ | 茶碗 | 長次郎黒銘彭祖 | 替 | 祥瑞口紅胴紐詩入 |
| 茶杓 | 象牙 | 建水 | 合子 | 蓋置 | 銅三羽鶴 |
| 炭斗 | 唐物底六角 | 灰器 | 了々齋好み | 火箸 | 唐物象牙頭 |
| 灰七 | 南簾 | 釜敷 | 時代なよ竹 | | |

四

永坂茶會の廣間は、小間に對して強弩の末勢とならざるやう大に馬力を掛けられて、力瘤の這入つた道具組みであつた、秋月山水の結構なるは言はずもがな、其前の香爐も卓も皆結構な者であつた、殊に茶碗の祥瑞口紅胴紐詩入などは、小間の大三島に顔顔して押しも押されもせぬ逸品であつた、今回は新席披きの事とて、後段に廣間を使はれたのは固より其所で随つて、此廣間の御馳走は薄茶ばかりではなかつた、堆朱五

瓜龍丸盆に鶴屋製菊紅葉の干菓子を盛り前記の器物で拙庵宗匠の薄茶手前があつた後引續きて裂模様膳墨繪若松見返寶珠の椀でアツサリと淺酌を侑められたが其献立は左の通りであつた。

吸物 鱈昆布

強肴

雲鶴小鉢、乾山繪替小皿、こはだ、うの花

同 吳州赤繪和の字鉢、金襴手

同 染附鷄繪小鉢、吳洲角小皿、よめ菜ひた

今回の茶會は廣間小間とも道具の結構なるばかりでなく其組合せが權衡を得て、近來稀なる口切茶會であつた、抑も三井家は宗壽居士創業より殆んど三百年に亙る舊大家で、維新前は祖先の遺訓で本宅を京都に置き、主人は勤番を以て大阪及び江戸の商店に勤務する定めであつたから、其勤番外京都在住の間は風雅の道を樂しんだ主人が多く、隨つて數々の名器を所藏し、古來名物帳に三井何々所持と書上げられた茶器の少からざるは人の能く知る所である、然るに維新前後天下多事、三井家は勤王御用金の才覺に忙しかつたが爲め、已むなく傳來の名器を手放された家もあつたが、維新後になつては昨年故人になつた松籟翁、又古稀を越えて鏗鏘たる華精翁など、少

壯より家業に出精して其傍に茶事を嗜み、東都に於ける斯道の重鎮と仰がるゝに至つた、然るに昨年松籟翁を失つて將星地に落ちたやうに感ぜられた今日、泰山君が此名茶會を開かれたのは眞に人意を強うする次第で、松籟翁在天の靈も之を降鑿して、我は後繼者を得たりと定めて満足せらるゝ事であらう、而して彼の世評の如く今度の茶會が泰山君の一世一代であるや否やは、今後同君の手並を見て之を判定するの外ないから、今日の處は永坂茶會が近年無類の大出來茶の湯であつたと云ふ事だけを報告して置かう。

大畫伯桂谷翁

(大正九年十二月一日)

一

五百年間出の大畫伯、下條桂谷翁は十二月一日享年七十九歳を以て大往生を遂げぬ、翁は米澤藩士下條半兵衛の嫡男にして、諱は正雄、桂谷又は雲庵と號す、少小同藩の目賀多雲川に就て繪畫を學び、天性の嗜好に加ふるに不斷の練習を以てし、寅年生れの

剛邁なる氣性に任せて其健筆を揮はれければ、一點一畫氣魄生動して絶えて卑俗の習氣を止めず、晩年殊に宋元の筆法を意會して頗る高雅の趣を出し、明治時代は言ふに及ばず、徳川三百年を空しうして直ちに雪舟に接踵するの概ありしは、余等の常に敬服して措かざる所なりき、翁は夫人ヨシ子と共に長壽にして、大正四年金婚式を挙げられしかば、同人之を祝して純金印を贈りたるに、翁は自ら壽比金石の四字を彫刻して其記念と爲せしに依り、余は當時金印桂谷と題して、翁が明治時代の日本美術發達に就き、先覺者として、鑒賞家として、將た藝術家として、如何に多大の貢獻を爲したるやを、東都茶會記に詳記したることあり、左れば、翁の經歷に就き、余は今勉めて重説を避くべしと雖も、嘗て翁が親からその履歷を余に語りける時、後日の爲めと思ひてこれを筆記し置きたるものあり、即ち翁の自傳にして、その少年時代に於ける繪畫研究の志望が如何に熱烈なりしかを示し、近代の懦弱行なる藝術家の興奮劑と爲るべきものなれば、今翁の總評を試むるに先だち、これを左に掲載して讀者の清覽に供せんとす。

私は天保十三年七月二十四日、羽前國米澤番匠町に生れ、父を半兵衛、母をみな子と云ひ、私は其の長男で幼名を芳太郎と稱しました、私の家は上杉藩士でありましたから、其の頃士族の慣習として、早朝より劍術やら漢籍を稽古し、朝食後は手習ひの稽古をする、と云ふ風であつて、私も九歳の時から漢籍は南雲宅藏、鮎川佐兵衛、劍術は須藤兵八、又習字は本藩右筆頭桐生丈右衛門に就て學んだのであります、處が私は幼少より畫を描く事が大好きで、畫を描く人があれば何か描いて貰つて之を樂しんで居ましたが、丁度其頃近所に角屋雪窓と云ふ畫家が住んで居ましたから、内證で其人に就てボツ／＼稽古を始め、何うも面白くて堪らないので、兩親に對つて畫の稽古に遣つて貰ひたいと乞ふたけれども、兩親は畫などを稽古する必要はない、學問、劍術、其他藩士相當の藝術を學べば、夫れて澤山であると言つて容易に許さなかつたのであります、併し私は猶も竊に角屋の家に參つて稽古を續けて居りました、處が次第々々に面白くなつて來たので、家を出る時、畫辨當を持つて習字の稽古に行くと云つて、其實は角屋方で畫ばかり稽古して居つたのが殆んど十

日餘りにもなつたのであります。

二

彼の習字の師匠桐生丈右衛門の夫人は、私が常に叔母さんと呼んで居た人でありますが、一日突然私の宅へ参られて、近來芳太郎が一向お稽古に見えないので、師匠が大變心配して、若しや病氣に罹つたのではあるまいか、兎に角行つて見て來いと言はれましたから、今日お尋ねしましたと云ふ事であつた處が私の母は何も知りませんから、イヤ忤は毎日辨當を持つてお宅へ伺つて居りますと答へたので、ソロ／＼露顯し掛けた所へ、其頃角屋雪窓の實父で私の父の碁打友達であつた降旗利喜馬と云人が例の通り宅へ來て、芳坊は毎日雪窓の處へ往つて畫を稽古して居る様子だが、雪窓も非常に手筋が善いと云つて賞讃して居るから、雪窓などに就けて置かずに目賀多雲川の處へでも遣つて稽古させたら、立派な畫家になるだらうと私の父に注意しましたが、此目賀多雲川と云ふ人は、其頃米澤で畫の名人と云はれた人でありました、處が父は私が角屋雪窓方で畫を習つて居る事を一向知ら

なかつたので、此時始めて事實が暴露するに至つたのであります、是に於て私は兩親から大に叱られたが、扱て已に遣つて仕舞つた事で仕方がない、其善後策として近所の心安い人々又は親類が寄り合つて相談した處が、畫を描かせたら宜からうと云ふ人もあり、又畫などは描かせぬが宜しいと云ふ論もありました、此時私の母は夫れ程好きなら畫を描かせたら宜からうと言ひ出したが、父の方は絶対に罷めさせねばならぬと云ふ事でありました、夫れから又斯う云ふ話もあつた事を覺えて居る、畫を描いて名人に爲ると國內に居る事を好まぬやうになる、即ち俗に云ふ米一(米澤一番の意なり)の藝術家になつた者は、今迄國に居た者がない、夫れは米澤が狭くなつて仕舞ふのである、夫れだから縦令名人に爲るにしても決して畫は描かせない方が宜いと云ふ論もあつて頗る面倒な事に爲つて、父と母との意見が一致せず、遂に父の説が勝を制して畫は罷めさせると云ふ事になりました、處で其頃藩地の習慣で子供が長者の意見に従はぬ時は寺の小僧にすると云ふ事があつて、懲戒の爲めに坊主にすると云ふのであるが、此小僧になるのは極く嫌なものであ

る、夫れて懲罰の爲めに寺院に遣つたら宜からうと云ふ事に爲りましたが、城下の寺では直様家に歸つて來るだらうから、城下より約そ四五里を隔てた漆山と云ふ處の珍藏寺と云ふ禪宗寺の和尚が名僧であり、且つ距離も丁度適當であるから、其處へ頼んで小僧にしようと云ふ事に評議一決して、程なく父が珍藏寺へ行つて、和尚に頼んで私は到頭同寺へ遣られたのであります。

三

私は寺に参りましてからは境内の掃除をしたり、御經の稽古などをして居ましたが、暇さへあれば畫を描く、描けば必ず和尚に叱られたけれども、兎に角好きだから仕方がない、誰も居ない時とか他の小僧が寝て仕舞つた折とか、機會だにあれば私は起き出して畫を描くのが樂しみてありました、夫れて私は竊に考へて小僧にされ、ば甚だ結構である、昔の雪舟とか周文とか其他本朝繪畫の名人は多くは僧侶である、僧侶は家事の世話もなければ妻子の煩ひもなく、一心不乱に勉強が出来るから、名僧に名畫が出來たものである、是れは何うしても僧侶でなければ畫の名

人には爲れない、私は幸ひ兩親が僧にしやうと云ふのであるから、長男ながら家を繼ぐにも及ばぬ畫を習ふ爲めには是れ程結構な事はない、此機を逸せず僧侶に爲つて畫を描きたい者であると斯う決心したので、中々畫を罷める處ではない、朋輩の小僧が寝て仕舞へば一人起きて直に筆を執る、明間があれば其處へ入つて畫を描き續けると云ふ始末で、私は何うしても和尚の言葉を用ひず、却つて寺に居るのを好都合として、中々畫を罷めないから、和尚は態々私の宅へ出掛けて、其事を兩親に報告し、是れでは一向戒めにならず、本人は寧ろ早く髪を剃つて呉れよと頻りに請求する勢であるから、本當に僧侶にする積りでなければ、愚僧がお預かりしても御趣意を達する譯には行くまいと言つて斷つた、然るに兩親は元々一時懲戒の爲めに小僧にしたのであり、且つ又本人は希望であつても總領を小僧にする譯に行かぬと云ふので、已むを得ず家に引戻さるゝ事となつたが、此時は夫程好きな一つ畫を習はせたら宜からうと云ふ事で、兩親の評議も一決して遂に目賀多幽雲と云ふ人の門に入つたのが嘉永五年で私が十一歳であつた、此幽雲と云ふ人は

目賀多雲川の子で畫の名人でありましたが、夫れから私は日々午前には藩立學校に通學して、午後より夜にかけて目賀多先生の家に通つて、雲川風の畫を稽古して居たのであります。

元治元年八月年二十三の時江戸に出て師家目賀多の縁故を以つて鍛冶橋の狩野塾を訪問して探原法眼に面會した處が、恰も幕府の命を以て畫れた屏風が出来上つて居るから、御覽に入れやうと言つて金屏風野鶴の圖を示された、因てツク、之を視るに、當時の流行風で筆力薄弱、更に感服する所がない、夫れから私に席畫を描いて見よと所望されたので、直に筆を把つて墨竹を畫いた處が、塾生等は之を評して目賀多も斯くの如き風であつたが、東北の人は墨氣が濃くて壯なる風があると私語して居ました、此頃當塾には狩野探美、福池探月、篠原探谷、玉澤經泉、市川經一等の青年畫家が十八九人も居ましたから、私は是等の諸士と交りて畫談を試みなどして居りました。

四

或る時狩野の塾で塾生に乞ふて粉本を一覽した處が、宋元の大幅の名畫諸侯の寶物の寫に係る名品が澤山ありましたので、私は之を寫したいと思つて此事を依頼した處が、束修を行へば塾に入つて勝手に寫す事が出来るが、門外不出の規則なれば束修を行はぬ者に貸す事は出来ぬと言ふ、併し私は聊か思ふ所あつて束修を行ふ事を欲せず、已むを得ず時々塾に參つて門人等と交つて粉本を借覽する事を勉めた、併し唯之を覽るばかりでなく之を寫したいと云ふ希望は片時も止まない、因て當時上杉家の典醫たりし高橋玄勝に諮り、束修を行はずして狩野塾の粉本を寫し取る工夫はあるまいかと其智恵を借りた處が、高橋は何とか工夫しやうと、同門人中で伎倆のある者四五人を御馳走して頼んで見る事に決した、其頃山下見附に吉浦と云ふ大きな料理店があつたので、其處へ探谷、經泉、經一等四五輩を案内して、座談中私は狩野の塾に遊んで以來諸君と交りを重ねて見たが、私の考とは大分異つて居る處がある、塾では月に一度鑑定會を催されて居るが、其鑑定は甚だ不熟で其着眼が至つて狭い、即ち探幽、常信等を以て無上の畫聖と看做し、伊川、晴川等を

金科玉條と思ふて居るやうである。然るに他の一方を見れば、宋元の名作が山の如くあるにも拘はらず、夫れには目を着けぬと云ふ事は誠に無慘の至りである。獨り繪畫のみならず、今日諸君の用ひて居る印章を見るに、瓢箪形とか壺形とかにて然も木印を以て満足して居るやうであるが、是れは甚だ俗である。若し此有様で推移せば、狩野家は行く／＼他派に壓せられて遂に消滅するであらう。探幽、常信等は能く瓢箪やら壺などの形を好んで用ひたが、是れは探幽にして可なり、常信にして可なる者で、夫れを真似ると云ふに至つては甚だ不見識と言はざるを得ない。一體印と云ふものは漢の私印と云つて四角なものに白字の印を第一としたものである。其邊から改めて今少し着眼點を廣く、且つ高くしなければ不可んぢやないかと説破した處が、一同大に感動した様子であつた。是に於て私は宋元名畫の粉本を寫したいけれども、自分は少しく考ふる處があつて束修を行ひたくない。就いては諸君に相當の謝儀を呈するから小遣取りと思つて彼の粉本を寫しては呉れまいかと云つて先づ私の用ひて居る印章を示し、是れは自分が彫つた印であるが、斯う云ふ

風の印で宜しいなら自分が彫つて諸君に進ずべし、又石も自分で提供しやう。其代りに粉本を寫して貰ひたい、猶ほ此高橋と云ふ人は私の後援者であるから、諸君が粉本を寫して呉れたならば又相當の潤筆料を差上げるから、何うか一つ骨折つて貰ひたいと頼んだ處が、皆悦んで承諾したので、此高橋立勝の後援に依つて少からず粉本の寫しを手に入るゝ事が出来たやうな次第で、今猶私の手許に存して居る者が澤山あります。

五

右様の次第で當時江戸の諸畫家を訪問して見たが、私が師事すべき程の人に會はず、是れなら寧ろ郷里の目賀多雲川先生に就て學ぶに若かずと考へ、此間古賀勤堂の門に遊んで漢學を研究し、翌慶應元年の秋郷里に歸つて目賀多家に入り、再び繪畫の研究を續けて居ました。

一體上杉藩は祿高に應じて士族の數が多いが爲めに、身分に應じて比較的小祿であつた、乃で藩の慣習として男子が十五六歳以上に至れば、國産の織物に屬する糸

拵え等の手内職をして、各自家計の助けを爲すのが常でありました故に私が畫を以て幾分か家政の助けを爲す事が出来れば好し、左もなければ已むを得ず畫を罷めて他の手内職を仕なければならぬ場合に立至つたので、何とかして畫を以て手内職にしたいと云ふ考へて、市中で繪馬を商ふ店に行つて繪馬を描かせて貰ひたいと頼み込んだ、斯くて繪馬の下地板約五六十枚を受取つて持歸り、之に寶珠及び鶏にほとり又は華表の下で禮拜する人物等の圖を描いて持つて行つた處が、繪馬店主は大に悦び其畫料として錢八十文を出し、更に又若干の繪馬板を渡されたので、大に悦んで歸宅して其八十文を兩親に示した處が、兩親は之を見て他の内職にも劣るまじと思ひ當りたるものゝ如く、是れより私は畫の稽古を繼續する事を許され、始めて初志を達する事を得たのであります、斯くして家政の助けを爲して居つた處が、繪馬屋から又更に注文を受けて紙鳶の繪を描いて呉れと云ふ事で、武者だとか達磨だとか云ふ者を描いて遣つた處が、是れが又大に好評を得て諸方から注文が來て家政の助けを爲す事が出来たので、兩親も大に安心したような次第でありました、扱て又茲に私の畫の稽古に非常の福音を與へたと云ふのは、當時私の近所に大聖寺と云ふ修驗者があつて、世間に交際の廣い所から、此人が主唱と爲つて屏風の畫會を世話して呉れたのである、是れは屏風半双を畫いて二分今の五十錢、一雙描けば一兩取れる勘定で、大分家計の手助けを爲した處が、段々此畫會の事を聞き傳へ在方でも亦世話する者が出來て、同様の畫會が成立して宮内村と云ふ處に一つ、荻生村と云ふ處に一つ、以上三つの畫會が組織されたので、月に一雙半位づゝ描いて夫れが三年程も續いて居たのであるから、彼の地方には殆んど百双程の屏風を描き與へた筈であります、是れは家計を助くる手内職の爲めに起つた事であるが、又大に自分の修業に爲つて非常の研究が出來、何うか斯うか畫を罷めず此難關を經過したのであります。

六

私は明治二年若松在陣軍務監に召され續いて同年十月兵部省の御用で東京に出た處が、維新勿々時移り世變りて、貴重なる古名畫を珍重する者少く、歐米人は争ふ

て之を購ふやうの有様で、名畫が殆んど地を拂はんとするのを歎じ、明治九年狩野探美、赤松琴二、青木信寅等と相謀り、佐野常民、吉井友實、岩下佐次、右衛門、神田孝平、税所篤、本田親雄、諸氏の後援を以て、繪畫鑑賞會なる者を開設して、古名畫保存の道を講じ、又其圖録を著はしなどしたのであります。が是れが我が美術保存會の嚆矢と謂ふべきであらう。又明治十五年政府に於て初めて内國繪畫共進會を開催せられたが、是れが今の文部省美術展覽會の前身とも云ふべきものであらう。事務官長が當時帝室博物館長たりし山高信離と云ふ人にて、私は其審査部長を仰附かつたので、同會へ天皇皇后兩陛下行幸啓あり、列品御覽の節は私が御説明の役目を拜し、且つ博物館樓上に於て御席畫を勤むるの光榮に浴した次第であります。が是れより先き此會を開設するに當つて、參考品陳列の調査係が山高と私と兒玉源之丞の三人でありました。然るに此參考品を陳列する場合に當つて、容齋派の畫は幾分か西洋畫を加味した一種の畫風であるから、是れは參考品として陳列する事を見合せやう、容齋に限らず其他西洋畫を加味したる一種異様の畫は陳列する事を見合せ

が宜いと云ふ論が起りました。私は平生美術談に於て山高氏と同主義でありました。が此事は賛成せぬと言ひます。夫れでは西洋畫を加味した者を採用しても宜いかと言はれます。から私は今必ずしも其西洋畫を加味した者を採て宜いとは言はぬ。左りながら其畫を見て後進生に有益なる者は採り、又害を與ふる者は捨て、西洋畫風を加味すると否とに拘らず、邪方に趨る者のみを排斥して可なりと主張しました。ので、山高等と私と議論が二つに分れて六かしくなつて來ました。其處で私は無闇に西洋畫を歓迎すると云ふ論ではない。否、西洋畫を加味した日本畫は寧ろ甚だ悦ばぬ。左りながら聊か西洋畫を加味したりとて善所あれば之を採りて差支なからうと思ふ。如何となれば西洋は總ての文物が概して進歩して居る。獨り美術のみ後れて居ると云ふ事はあるまい。故に西洋畫でも追々其長所を取つて、我國固有の繪畫に新空氣を注入するのは強ち無益な事でもあるまい。彼の徳川二代三代將軍の時に、二本マスト三本マストの大船を禁じたが爲めに、後年海軍の發達が後れたと云ふ批評もあるから、明治十五年の内國繪畫共進會の時、審査官が西洋畫風

を排斥した為めに、他日日本繪畫の進運を阻害したと云ふやうな事に爲つては、其審査官たる者は我が美術上の大罪人になるのであるから、是れは慎重に考へなければならぬと主張したのであります。

七

抑も日本人が西洋畫と云ふ其標準は何であるか、若し今日日本に渡つて居る油繪を以て其代表だとすれば、甚だ氣の毒な次第である、日本人が洋行して歸朝の時、土産物として買つて來た西洋畫を代表とするやうな事に爲つては甚だ困る、外國人が日本に來て俗に云ふ横濱の仕入物などを買つて歸つて、是れが日本畫の代表であると吹聴されては迷惑至極であるから、之れと同様に西洋畫の良否は其真正なる者に就て判断せねばならぬ、結局西洋の最上の繪畫を實地に研究して、若し感服すべき所があれば之を取り、左もなければ之を捨て、茲に始めて取捨を決すべき者であらう、故に是れは姑く研究問題として今日の所は別に之を排斥しないで、兎に角陳列して置くこと云ふ事に方針が一定したのであります。

私は明治十七年第二回内國繪畫共進會に於ても亦審査部長を仰附けられ、兩陛下は無上の光榮とする所であります、又明治二十九年日本美術協會の美術展覽會に皇后陛下行啓の節にも亦私が御案内申上げました處、香川皇后宮大夫より私の執筆に係る鷺の圖を御用に相成る旨御沙汰が有りました、是れは誠に有り難き次第であるが、私などの作品よりは却て専門家の出品を御用に相成るやう、御取計らひを願ひたいと大夫に申出で、大夫より其旨陛下に言上せられしに、夫れならば下條と相談して二點なり三點なり出來の善い者を選び、下條のと共に差出すべしと云ふ御沙汰が有りましたので、私も有り難くお請した次第であります、然るに其後香川大夫より左の文面の書附を交付せられました。

秋季美術展覽會へ御揮毫御出品の鷺の圖、皇后陛下御所望に付き、御肴料賜はり候間、御拜領相成度候此段申入候也。

明治二十九年十一月二十日

皇后宮大夫子爵 香川敬三

美術展覽會審査部長 下條正雄殿

皇后陛下御聖徳の有難き事は申す迄もなく、御側近く奉仕の人の注意の周到なる事も亦甚だ有難く感じましたから、茲に當時の顛末を申述べて身に餘る光榮の記念と致します。

八

如上桂谷翁の自話に依りて、翁が青年時代より米澤の目賀多雲川に就きて如何に刻苦勉勵せしかを知るに足らん、雲川は米澤藩の畫家にして、常に藩地に在りしを以て其名廣く世に知られざれども、筆力雄勁着眼高古、其遺作に據つて見れば、健筆は文晁に類して、氣韻は遙に彼よりも高く、若し此人をして當時江戸に在つて門戸を張らしめば、徳川時代の大畫家として其名聲當代に振ひたるや知るべきなり、翁は斯かる良師を得て、其筆力を鍛錬せしが故に、得意は殊に席畫にあり、懸腕直筆一氣呵成の妙に至りては、古今其比類を見ず、平常人に語りて、狩野芳崖は筆力勁拔なれども、其勁拔の人目に障るが未だ至らざる所なり、橋本雅邦は健腕を以て筆を遣る能はざりしが爲

め、筆勢快暢を缺くの憾みありと評されしが、翁が線畫の筆致輕妙は其自負する所に背かず、雪舟以來殆ど匹儔なき者の如し、翁は斯く筆力を練りたるのみならず、其自話の如く、狩野家若くは其他名畫收藏家に就き、勉めて粉本若くは原圖を摸寫したる其數非常に多量なりしが、爲め近年諸名家の珍幅世に出づるに際して、夫れも是れも嘗て翁が摸寫せし者なるを發見して、其精力絶倫に驚きたる事あり、又翁は宋元諸大家若くは我が周文、雪舟、祥啓の筆法を究めしのみならず、巨勢、春日及び古土佐の雅致をも會得し、物に應じ處に隨つて之を調合活用せしが故に、其作品中には南宗あり北宗あり、墨畫あり彩色畫あり、殆んど行く所として可ならざる所なかりき、余が翁の繪畫を見たるは、明治二十八年頃なりしが、當時余は固より翁の名を知らず、卒然尺八絹本の前面に大岩石を描き、其岩陰に遠く離れて人家と杉林を襯出したる筆致、純然たる宋元風なりしかば、當代に斯る繪畫を作る人ありやと、奇異の感に打れけるが、其後翁と相識りて、爾汝の交りを爲すに至り、余は翁の畫才の非凡なるを稱美し、翁が官務多端なるが爲に、畫筆を執らざる事數年に亘り、又同僚に對して畫家らしき行動を示す

は當時の事情に於て面白からざる影響あるを虞れ、其繪畫を能するを人に知らしめざりし事ありと云に對して、役人として翁の如きは、樹で量り箒で掃く程あるべければ、少も早く左の羈絆を脱し、専心丹青に従事し、其天分に依り千載不朽の名を留べしと忠告せしに、翁も亦自ら悟る所あり、頓て官途を辭して再び畫筆に親しむに至れり。

九

桂谷翁が維新後東京の住人と爲りし頃は、舊物破壊の風、國中に吹き荒み、古書畫の如き二束三文にて古物商の店頭に掲げられければ、翁は或時日蔭町通りにて周文の名幅を一兩二分にて買取りしが、是は其繪畫よりも紫印金表具の結構なりしが爲めなりしと云ふ斯かる有様に、當時は宋元及び日本古畫を珍重する者なく、山内容堂、木戸孝允諸公が文人畫を悦ばれたるが一世の風潮と爲りたるを憤慨して、決然古畫復興の志を起し、鑑賞會若くは龍池會など云へる古畫展覽を目的とする會合を作りて、世間に觀畫の智識を普及せしめん事を勤め、又米人フエノロサ等が日本人の美術的失心に乘じて、頻りに我が名畫を買取り陸續米國に輸出するを憤慨して、友人に

勸め或は自ら工面して名畫を買收したる其數測り知る可からず、固より格別の資力あるに非ざれば、随つて買へば随つて譲り、唯名品の海外に散逸するを防ぎたる次第なるが、昨年郷男爵家の入札會に於て三十二萬圓の高價を呼たる藝阿彌山水の如きも、一度は翁の手を潜りたる者にして、近年東京に於て名畫名書と稱せらるゝ者は、多くは一度翁の所有たりし者なりと云ふ、斯くて翁は明治初年より美術奨励の事務に參與し、鑑賞會、龍池會、美術協會若くは諸繪畫展覽會等殆んど關係せざる者とはなく、又官吏を退職後も貴族院議員として政務に參與するなど、雅俗用務多端なりしが爲め、相變らず畫筆に親しむの場合少く、宴席の餘興に揮毫したる席畫などを除くの外、翁の筆力を傾注したる大作密畫は殆んど俛指する程にして、畫家として比較的遺作の少きは、蓋し其世才が累を成して大に其本職に盡すの機會を減ぜしが爲なるべし、左れば翁の繪畫は畫題餘り多からず、同時の大家雅邦翁に比して、圖案の變化少く、大作の後に遺る者甚だ少きは、余等同人の最も遺憾とする所なり、然りと雖も翁が尋常畫師等の及ばざる鑑識力を備へ、又其繪畫の獨立奔放にして、何等他の羈束を受け

ず唯己れの信ずる所を書きて始めより需用者の希望に副はんとするやうの斟酌なく、随つて氣品高邁にして毫も俗氣の冒す所と爲らざりしは、翁が専門畫家に非ずして紳士の餘技として己れの爲さんとする所を爲したるが爲めなれば、翁が専門畫家たらざりしは必ずしも損失のみには非ざるべし、而して翁の畫筆の最も老熟したるは大正五年溢血に罹りたる其前數年間にして、其得意の作に至りては殆んど雪舟の墨を摩するの概ありき。

+

桂谷翁は今年七十九歳にして去る二月再度の溢血症に罹りしが、其後漸次回復して再び小品を描き得るまでに至りしに、十一月に入りて宿痾復た起り遂に泉籍に入られたるは眞に痛惜の至りなり、然れども翁の遺筆は今や可なりの多數に達し、其精神は長へに後代に傳はり、後人の爲に有益なる感化を及ぼすならんと思へば又自ら慰むべき者あり、唯翁の畫風は筆力の鍛鍊に依りて始めて其妙を見るべき者にし、甚だ學び難きが故に今日に於て純然たる翁の筆致を傳承する者は、其愛弟たる八

木岡春山其他一二に過ぎるべし、今や世間の畫家徒に新奇を競ひ、難きを捨て、易きに就き、東洋畫の眞髓たる一點一畫間に含有する筆勢の妙味を求めず、西洋畫の糟粕を嘗めて刷毛先の仕事にのみ没頭する職工然たる畫風を悦び、諸方の展覽會に朦朧繪畫のみ出現する有様なれども、此れ等は一時過渡的の好奇風尙にして、時來れば自ら覺醒し頓て東洋畫風の本来に復歸す可きは余の信じて疑はざる所なり、此時に及んで翁の眞價は今日よりもヨリ多く世間に認識せらるゝ事なるべく、随つて翁の作品が明治大畫伯の遺墨として、一層大歡迎を受くるの日あるや疑ひを容れず、翁は常に東洋畫風の氣格日に下り、其固有の特色を失墜するを觀て憂憤に堪へず、門生を戒めて宋元及び日本古畫の筆致を失はざる事を獎勵して已まざりしが、近來日本に於ては自から筆力の鍛鍊を忘れ、西洋畫風の摸倣に没頭する間に、西洋諸國の藝術家は巴里を中心として已に東洋美術の特長を看取し、之を研究して到る處に應用しつゝありとの事なれば、日本に於ても他年自から省みて本を忘れて末に趨りたるの愚舉を後悔するの時あるべく、翁の訓言も此時に至つて始めて我が諸美術家に敬服

せられ、其流風遺烈は長く且つ大に美術界に影響する事ならん、蓋し狩野芳崖同雅邦と桂谷翁とは明治の三大畫家と稱すべき者なれば、今や其最後の大家を失ひたるに當り、予は翁の閱歷功勞畫風の一端を叙して深甚なる痛惜の意を表し、併せて翁の門下並に其流風を追慕する者に向つて、翁の平生期待せし所に勇往邁進せん事を希望する者なり。

小柴庵口切

(大正九年十二月十二日)

小柴庵主三井華精翁は遐齡古稀を踰ゆる又一當年老を告げて、三十年來繼續したる三井銀行總長を罷め、上二番町邸の改築も略成りて、少しく小柴庵の位置を變へ、露地をも廣々と取り擴げられたので公私數々の目出度さを重ね、久方振にて口切茶會を催されたが、余は其開席初日の十二月十二日に寵招を蒙り、正午今度新築の三疊隅切寄附に罷り通れば、席中に更紗敷物を敷き、桑木地火鉢二つを並べ、黒塗長角煙草盆に

黄色樂燒火入を置き、白湯は汲み出にて至つて簡單なる飾附であつた、頓て先づ腰掛に立出づべしとの案内があつたので、此寄附より南手に開かれたる露地に下り立ち、生垣を隔て、舊鷹司邸の方に造られたる新庭より、母家の方を一目に見渡す腰掛に腰打掛くれば、合利蓋煙草盆に吳洲冠手三角火入を置き、時代鹿紅葉蒔繪手焙を備へられてあつた程なく此腰掛と生垣を隔て、相對する小柴庵を立ち出でられた庵主は、柴折戸を開きて慇懃に出迎はれければ、當日の相客馬越化生、福井親庵、益田紅艶、古筆了任と余の五客中で獨り當庵主より年長なる化生翁を正客に推立て、背低く灯袋大きな鳥羽屋傳來石燈籠の前に、今度新に据ゑ附られたる天然石の大蹲踞石にて嗽ぎ、順次小柴庵に入りて其床を見れば、建仁寺清拙禪師の墨蹟で左の文句の一軸が掛けられた。

九重勝槩入蒼穹

日月星辰圖畫中

碧路上頭窮眼界

嶂猿花鳥不相同

靈致書記別稱、偈以證之、延元元年甲子仲夏、清拙正澄、書于天下瑞龍山

七言絶句の偈で、文字も大きく幅柄も能く小間の床に篋まり、表具も無論結構にして、口切茶會の氣分は此一軸より湧き出づるやうに思はれた。當庵は位地が變つたばかり従來の二疊中板其儘で、庵主は一同に挨拶の後炭手前に取掛られたが、其器物は左の如くであつた。

釜 古道也尻張鬼面銀附

炭斗 杉木地折敷

香合 宋胡録柿

羽箒 白鶴

灰器 南蠻内澁

灰七、火著 桑柄

古道也尻張釜は大々として一軸と好く釣合ひ、又宋胡録柿香合は釉色一段優れて合口も好く、此種中の逸品と見受られた。

二

小柴庵の懷石は八百善の庖丁と味はれたが、庵主が京都風味を加へられたので平常と大いに其趣を異にし、其獻立は左の通りであつた。

汁 合せ味噌、蕪、同菜

向附 金欄手、鯛岩茸、山葵、甘酢

椀 鴨、生鉄、午夢、柚皮

燒物 赤繪福壽鉢、伊勢海老

吸物 鯨骨

八寸 いらすみ、銀杏

強肴 青磁手附鉢、甘煮鷺しらず

酒器 染附蓋鐵銚子、染附花鳥德利、黃阿蘭陀盃

菓子 洲濱羹

當庵主は平常綺麗好きなれば、懷石器具も總て其氣性を顯された中にも、赤繪福壽鉢など一段美事にて、大形の伊勢海老を全身其儘此鉢の上に盛り入たる風情、食膳中に福祿壽の數々を表して如何にも目出度く感ぜられた。以上懷石終りて暫時腰掛に中立すれば、折柄の時雨空に銅鑼五點の響き陰々と尾を曳きて茶趣味一段深かりしが、頓て復座して後座の床を見れば、宗旦作銘折烏帽子とて、口下に於て一拉ぎ拉げたる竹花入に、白玉椿二輪と枯葉残りたるみづき一枝を挿まれたる風致、誠に感服の至りであつた。斯くて庵主の濃茶手前となつたが、其器物は左の通りである。

茶入 中興名物萬右衛門作

茶碗 名物志野、片桐石州歌

水指 江岑好み

茶杓 金森宗和作

建水 砂張合子

蓋置 青竹引切

落穂手田面は秋元子爵家舊藏で、鳥羽田振鼓など云ふ姉妹品もある。首細く肩張りて幅廣く其形振鼓に似た者であるが、遠州の物數奇で中興名物に加へられ、箱書は無論遠州で同人筆、小色紙掛物が附屬して居る、其歌は左の通りである。

うちわひて落穂ひろふときかませは

われも田面にゆかましものを

此茶入は中興名物中最も有名な者で、容體附屬品共に詳しく名物茶書に出て居るか
ら今更之を説明する必要もなからう、扱て茶碗の卯の花塙は古來志野茶碗の大王と
呼ばれた者で、明治二十一年頃此茶碗が大阪の入札で千兩の高値を呼んだのは無
論當時のレコード破りて、古來如何に茶人間に重んぜられたか、知らるゝのである、
此卯の花塙茶碗に就ては從來種々の名譽談が傳はつて居るから、次項に其一二を物
語らう。

三

志野焼茶碗銘卯の花塙は片桐石州の箱書で、裏の張紙に同人筆で左の歌が書附けら
れてある。

山里の卯の花かきのなかつみち

雪ふみわけし心地こそすれ

深い筒茶碗で無論口切時節の適役であるが、今日は先般降つた當年の初雪が猶ほ露
地の垣根に消え残つて居るので、卯の花ならぬ眞の雪踏み分くる余等に一段の風情
を感じしめたのである、口作は厚薄不同で雅致に富み、胴の上の方に深く括れた籠作
があつて、白釉の中に黒釉にて荒い垣根の如き模様が現はれ、高臺を夾んで例の煙
草の葉形に白粉を溶きたるが如き細かき白土を見せ、高臺は低く處々に面白き籠作
があるが、何れも力強き作行で、ヒヨットしたら光悦作ではあるまいかと思はるゝや
うである、此茶碗は昔江戸深川の豪商冬木喜平次の家にあつた者だが、或時大阪の山
田某と云ふ數寄者が是非此茶碗を需めたいと云ふので、冬木は自ら之れを大阪まで
持參した處が、其値段が當時千兩と云ふので、流石の山田も買取り兼て一時談判不調
と爲り、冬木は此茶碗を携へて、大津まで引返したるを、山田は茶碗戀しさに居ても立
つても堪へられず、跡追つかけて大津にて追付き、例の力餅の茶店に立寄りて、名物餅
を喰ひながら此茶碗にて薄茶一服を呑む間に、到頭談判を纏めて茶碗は首尾克く山
田の手に入つたさうであるが、此山田は彼の政治家で、山田喜之助號を澱南と云つた

人の父か若くは祖父であらうと云ふ事である、本来志野茶碗には赤味の勝つた者と鼠色の勝つた者があるが純白に比すれば何れも稍品格が下るやうである、余は近頃森岡男所藏の無地志野と云へる白無地志野を拜見したが是れは古來有名な者で品格高く釉質は最も卯の花牆に類して居る、而して卯の花牆は大坂で山田氏所藏中同地方に於ける志野三茶碗の首位を占めたさうであるから志野茶碗に於ては是れが日の下開山であらうと思はるゝ斯くて濃茶一巡するや廣間へとの案内があつたので、小間より飛石傳ひに母家に附屬し居る六疊廣間に打通れば床には遠州表具と覺しき雪舟筆富士の一軸が掛つて、其の下の時代黒三足卓には長次郎作寄口小香爐を飾られた。

四

小柴庵廣間床中は前記の如くであるが、爐には大西五郎左衛門作遠山鑲附釜が掛けられて、長板の上には祥瑞丸平鷄撮みの水指青磁鯉耳杓立、仁清作輪花形建水、同絲卷蓋置を飾附けられた風情、誠に豊に且つ麗しくあつたが、川部宗無宗匠の炭及び薄

茶手前の器物は左の如くであつた。

香合

交趾鴨、身煎黃、羽白檀

羽箒

野鷹

炭斗

竹組四方底

茶入

不味好み黒塗、桐蒔繪棗

茶碗

左入作原叟詩入

替

釘彫伊羅保

茶杓

象牙

干菓子

京都伊織製綾衣及び造り土

菓子器

桐木地胡粉菊、盛上げ硯蓋

如上器物の取合は能く庵主の潔癖を現はして、總て綺麗づくめで能く祝賀の氣分を示されたが、殊に左入茶碗に原叟筆にて

今年七十安閑暮

明歲花開萬國春

と書かれたのは、今日の茶會の爲めに態々適當の句を選んだ者のやうで、現在庵主の境遇は此二句の中に言ひ盡されて居る、庵主は曾に三井家長老と云ふばかりでなく、明治二十四年三井銀行總長に就職後同家中興事業の中心人物と爲り、爾來三十年間に同家が一躍して世界的の大資産家と爲つたのは、勿論他の主人其他重役共の盡力に依る事ではあるが、之れと同時に庵主が其大元勳たる事は何人も首肯する所である、庵主は斯の如き大業を成就して、今年已に七十一の高齡を重ね、所謂功成り名遂げ

て、銀行總長を後繼者に譲り、安閑として楽しんで今年を送り、平和の花も開くなる明歲
 笑つて萬國の春を迎ふる其目出度さは何と祝すべき言葉もない、庵主が銀行總長を
 罷められた時の自詠に

三井銀行社長となりて三十とせありけるに、大正九年一月こ
 れをやめるける時

七十路をひとせこゆることしより

花を友にそ世をば終へなむ

とありしは眞に雅俗兩諦の能事を一身に集めたる者で、余の如き嘗て庵主の部下に
 あり、親しく其活動振を目撃しつゝ、あつた者に取りては、其目出度さを感じずる事も一
 段深く、滿腔の熱誠を以て謹んで恐悦申上ぐる次第である。

正大 庚申茶道記下巻終

大正十年五月十五日印刷
 大正十年五月二十日發行

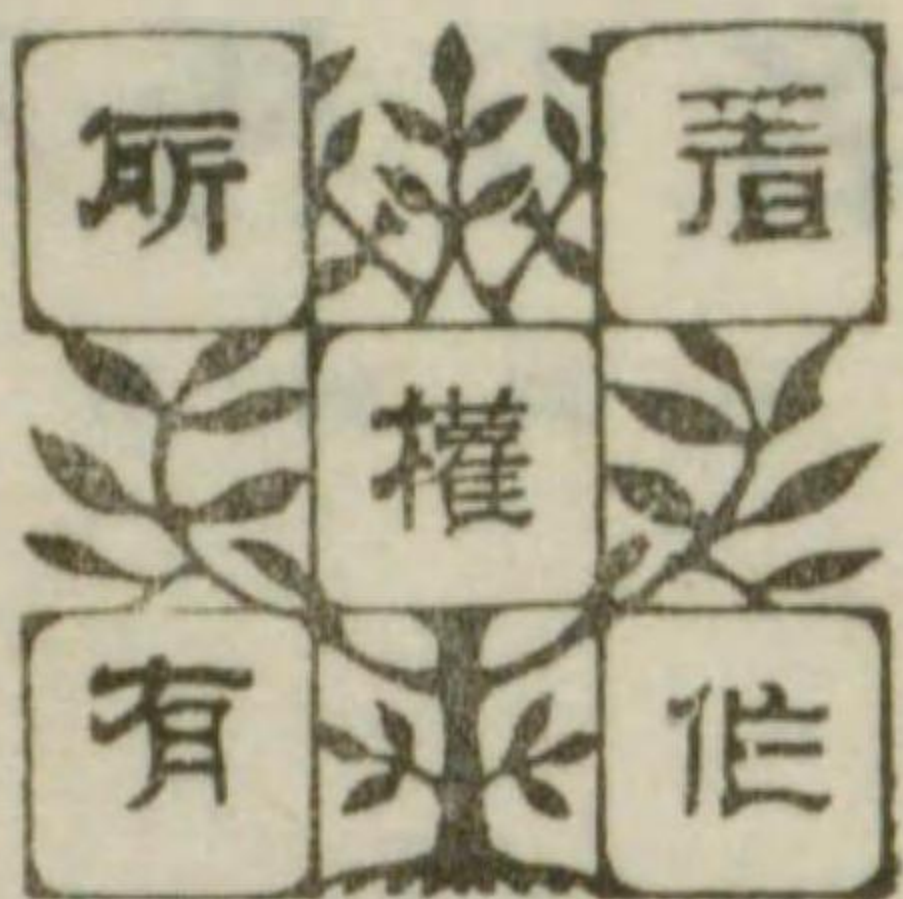
大正庚申茶道記
 定價金五圓八拾錢

著者 高橋義雄

發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 風間成五

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 村橋圭二

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社



發行所

東京市神田區錦町一ノ十九
 振替口座東京八五三三番
 電話神田四九貳番

慶文堂書店

御注意

弊店發行圖書は常に取揃有之候に付地方取次ぎ店にて萬一品切の節は發行元
 へ御注文被成下度候尤も「東都茶會記」に限り再版致さず候間御含置願上候也

慶文堂書店發行

□ 永代不朽の名著 □

同	藤川淡水著	編輯部	松平家	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	高橋幕庵著
淡水教訓お伽噺	教訓日本お伽噺	松平不味傳	へそ	我樂多	水戸學	大正庚申茶道記	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東都茶會記第一輯
紙數三百餘頁	紙數六百二十頁	紙數八百餘頁	紙數四百十頁	紙數五百廿頁	紙數六百四十四頁	紙數三百八十四頁	紙數四百五十四頁	紙數三百廿頁	紙數四百八十餘頁	紙數五百五十五餘頁	紙數四百九十一頁	紙數二百頁	紙數五百一十一頁	紙數五百一十一頁	紙數五百一十一頁	紙數五百一十一頁	紙數五百一十一頁
正價金壹圓五拾錢	正價金壹圓五拾錢	正價金六圓五拾錢	正價金五拾錢	正價金壹圓八拾錢	正價金壹圓拾錢	正價金五圓八拾錢	正價金六圓	正價金參圓	正價金五圓五拾錢	正價金五圓五拾錢	正價金五圓五拾錢	正價金貳圓	正價金七圓	正價金七圓	正價金七圓	正價金七圓	正價金七圓
送十二錢料	送十二錢料	送二十四錢料	送八錢料	送十八錢料	送十錢料	送十八錢料	送十八錢料	送十二錢料	送十八錢料	送十八錢料	送十八錢料	送十二錢料	送十二錢料	送十二錢料	送十二錢料	送十二錢料	送十二錢料

202
2
299